



Acronis True Image HD

ユーザーズ ガイド

Copyright © Acronis, Inc., 2000-2011. All rights reserved.

「Acronis」および「Acronis Secure Zone」は、Acronis Inc. の登録商品です。

「Acronis Compute with Confidence」、「Acronis リカバリ マネージャ」、「Acronis Active Restore」、および Acronis ロゴは、Acronis, Inc. の商標です。

Linux は、Linus Torvalds の登録商標です。

VMware および VMware Ready は、VMware, Inc. の米国ならびにその他の地域における商標または登録商標です。

Windows および MS-DOS は、Microsoft Corporation の登録商標です。

ここに記載されているその他すべての商標および著作権は、それぞれの権利所有者に帰属します。

著作権所有者の明示的な許可なく本ドキュメントの実質的な修正版を配布することは禁止されています。

著作権所有者からの事前の許可がない限り、いかなる形態（紙媒体など）であっても商業目的で本ドキュメントまたはその派生物を配布することは禁止されています。

ドキュメントは、「現状のまま」で提供され、商品性に対する黙示的保証、特定の目的に対する適合性、権利を侵害していないことなどを含む明示的または黙示的な条件、言明、および保証に関する責任を負いません（免責条項の範囲が法的に無効と見なす場合を除く）。

本ソフトウェアまたはサービスにサードパーティのコードが付属している場合があります。サードパーティのライセンス条項の詳細については、ルート インストール ディレクトリにある license.txt ファイルをご参照ください。本ソフトウェアまたはサービスと共に使用するサードパーティ コードおよび関連するライセンス条項の最新の一覧については、<http://kb.acronis.com/content/7696> をご参照ください。

目次

1	はじめに	8
1.1	Acronis True Image HD とは	8
1.2	Acronis True Image HD の基本概念	8
1.3	Acronis True Image HD の新機能.....	11
1.4	システム要件とサポートされるメディア	12
2	Acronis True Image HD のインストールと起動	14
2.1	Acronis True Image HD のインストール	14
2.2	Acronis True Image HD の実行	15
2.3	Acronis True Image HD のアクティブ化.....	15
2.4	Acronis True Image HD のアップグレード.....	15
2.5	Acronis True Image HD の削除.....	16
3	一般情報および アクロニス独自のテクノロジー	17
3.1	ディスク/パーティション イメージ.....	17
3.2	完全バックアップ	17
3.3	バックアップ ファイルの名前付け規則	18
3.4	ディスクとパーティション情報の表示	18
3.5	Acronis DriveCleanser	19
4	システムに大容量ハード ドライブ(2 TB を超えるもの)を新しく追加する場合	20
4.1	大容量ドライブの追加と管理(代表的なシナリオ).....	21
4.1.1	システム ディスクではないディスクとしての新しい大容量ドライブの追加.....	21
4.1.2	大容量ディスクへのオペレーティング システムの移行	21
4.1.3	大容量ディスクへのオペレーティング システムのインストール	22
4.1.4	拡張容量ディスクへの GPT ディスクのリカバリ	22
4.1.5	大容量ディスクへの MBR パーティションのリカバリ.....	22
4.1.6	拡張容量ディスクを GPT スタイルに変換.....	22
4.1.7	大容量ディスク サイズの修正	23
4.1.8	拡張容量ディスクを作成したシステムからの Acronis True Image HD の削除	23
4.1.9	更新	23
4.2	導入前にシステムについて知っておくべきこと.....	23
4.3	大容量ハード ドライブの追加.....	24
4.4	2 TB を超えるディスクへの移行	25
4.5	Acronis 拡張容量マネージャ.....	28
5	障害復旧のための準備	29
5.1	障害や災害に対する最善の準備方法	29
5.1.1	バックアップをリカバリに使用できるかをテストするときの推奨事項	29
5.1.2	その他の推奨事項	30
5.2	ブータブル レスキュー メディアのテスト	30
5.3	カスタム レスキュー CD の作成	33

6	Acronis True Image HD について	34
6.1	プログラムのワークスペース	34
6.2	メイン画面	35
6.3	オプション画面	38
7	バックアップ アーカイブの作成	40
7.1	最初のバックアップの準備	40
7.2	バックアップするデータの決定	40
7.3	代表的なバックアップ シナリオ	41
7.3.1	システム パーティションのバックアップ	41
7.3.2	システム ディスク全体のバックアップ	42
7.3.3	データ パーティションまたはディスクのバックアップ	43
7.3.4	ネットワーク共有へのバックアップ	45
8	オンライン バックアップ	46
8.1	オンライン バックアップ アカウントの作成	46
8.2	Acronis オンライン ストレージへのバックアップ	47
8.3	オンライン ストレージからのデータのリカバリ	50
8.4	オンライン バックアップの管理	51
8.5	オンライン バックアップ オプションの設定	53
8.5.1	接続の試行	53
8.5.2	ストレージの接続速度	53
8.5.3	ストレージのクリーンアップ	54
8.5.4	プロキシ設定	55
8.6	オンラインで保存するデータの選択に関する推奨事項	55
9	その他のバックアップ機能	57
9.1	バックアップ ウィザード - 詳細情報	57
9.1.1	バックアップするデータの選択	57
9.1.2	アーカイブの場所の選択	57
9.1.3	バックアップの種類	58
9.1.4	自動統合の設定	59
9.1.5	バックアップ オプションの選択	60
9.1.6	コメントの指定	60
9.1.7	バックアップ処理	60
9.2	バックアップの微調整	61
9.2.1	バックアップ オプション	61
9.2.2	ローカル ストレージの設定	63
10	Acronis True Image HD によるデータ リカバリ	65
10.1	システム パーティションのリカバリ	65
10.2	容量の異なるハードディスクへのディスク バックアップのリカバリ	66
10.2.1	隠しパーティションを含まないディスクのリカバリ	67
10.2.2	隠しパーティションを含むディスクのリカバリ	69
10.3	データ パーティションまたはディスクのリカバリ	71
10.4	ファイルとフォルダのリカバリ	72

10.4.1	イメージ アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ	72
11	追加のリカバリ情報	74
11.1	リカバリ ウィザード - 詳細情報	74
11.1.1	リカバリ ウィザードの開始	74
11.1.2	アーカイブの選択	74
11.1.3	リカバリの方法の選択	75
11.1.4	リカバリするディスク/パーティションの選択	75
11.1.5	リカバリ先ディスク/パーティションの選択	77
11.1.6	リカバリするパーティションの種類の変更	78
11.1.7	リカバリするパーティションのサイズおよび場所の変更	78
11.1.8	リカバリされたパーティションへのドライブ文字の割り当て	79
11.1.9	移行方法	79
11.1.10	リカバリ オプションの設定	79
11.1.11	リカバリの実行	79
11.2	デフォルトのリカバリ オプションの設定	79
11.2.1	ファイルのリカバリ オプション	80
11.2.2	ファイル上書きオプション	80
11.2.3	リカバリの優先度	80
12	タスク スケジュールの作成	81
12.1	スケジュールされたタスク	81
12.2	スケジュールされたタスクの作成	82
12.2.1	スケジュール設定	82
12.2.2	認証情報	86
12.3	スケジュールされたタスクの編集	87
12.4	スケジュールされたタスクの名前の変更	87
12.5	スケジュールされたタスクの削除	87
12.6	スケジュールされたタスクの実行時に必要な認証	87
13	ブータブル メディアの作成	88
13.1	Linux ベースのレスキュー メディアの作成	88
14	アーカイブの参照およびイメージのマウント	91
14.1	イメージのマウント	91
14.2	イメージのアンマウント	93
15	バックアップ アーカイブとその内容の検索	95
15.1	検索	95
15.2	Windows サーチと Google デスクトップの統合	96
15.2.1	Google デスクトップと Acronis True Image HD の組み合わせ	97
15.2.2	Windows Search と Acronis True Image HD の組み合わせ	100
16	その他の操作	104
16.1	バックアップ アーカイブのベリファイ	104
16.2	タスクとログの表示	104
16.3	バックアップ アーカイブの管理	106
16.4	バックアップ アーカイブの削除	107

16.5	バックアップ アーカイブの移動	107
17	新しいディスクへのシステムの転送	109
17.1	一般情報	109
17.2	セキュリティ	110
17.3	転送の実行	111
18	ディスク管理	112
18.1	ディスクのクローン作成	112
18.1.1	クローン作成モードの選択	113
18.1.2	ソース ディスクの選択	114
18.1.3	ターゲット ディスクの選択	115
18.1.4	移行方法	115
18.1.5	移行方法	116
18.1.6	除外する項目の指定	121
18.1.7	手動レイアウト	123
18.1.8	クローン作成の概要	125
18.2	新しいハードディスクの追加	125
18.2.1	ターゲット ハードディスク	126
18.2.2	初期化方法の選択	126
18.2.3	新しいパーティションの作成	127
18.2.4	新しいディスクの追加の概要	129
18.3	Acronis 拡張容量マネージャ	129
18.3.1	Acronis 拡張容量マネージャが起動しない場合	131
18.4	SSD のトリミング	132
19	セキュリティとプライバシーのツール	133
19.1	Acronis DriveCleanser	133
19.2	データを消去するユーザー定義消去方法の作成	136
20	トラブルシューティング	138
20.1	全般	138
20.2	インストールの問題点	139
20.3	バックアップとベリファイの問題	139
20.4	リカバリの問題	141
20.5	リカバリ後のシステム起動の問題	142
20.6	その他の問題	143
21	ハードディスクと起動順	145
21.1	BIOS での起動順の並び替え	145
21.2	コンピュータへのハードディスク ドライブの設置	146
21.2.1	一般的な IDE ハードディスク ドライブの設置方法	146
21.2.2	マザーボードのソケット、IDE ケーブル、電源ケーブル	146
21.2.3	ハードディスク ドライブとジャンパの構成	147
21.2.4	SATA ハード ドライブの取り付け	148
21.2.5	新しい内部 SATA ドライブを設置するための手順	148
21.3	ハードディスクの消去方法	149

21.3.1	情報の抹消方法の動作原理	150
21.3.2	アクロニス製品で使用できる情報消去方法	150
22	起動パラメータ.....	152
22.1	説明	152

1 はじめに

1.1 Acronis True Image HD とは

Acronis True Image HD は、コンピュータに保存されているすべての情報を安全に守るための統合ソフトウェアスイートです。オペレーティングシステム、アプリケーション、設定など、すべてのデータのバックアップができるだけでなく、不要になった機密データを完全に消去することができます。本製品を使用すると、選択したファイルやフォルダに加え、ディスクドライブ全体あるいは選択したパーティションもバックアップすることができます。Acronis Online Backup では、リモートストレージに最も重要なファイルを保存できるため、これらのファイルはコンピュータの盗難や火災の場合にも保護されます。Acronis ノンストップ バックアップはシステムとファイルの変更を 5 分ごとに継続して保存できるため、必要に応じて任意の時点まで容易にロールバックできます。

ディスクドライブが破損した場合や、システムがウイルスやマルウェアの攻撃を受けた場合も、バックアップデータを迅速かつ簡単に復元できるので、何時間あるいは何日もかけてディスクドライブのデータおよびアプリケーションを最初から再構築する必要はなくなります。

Acronis True Image HD には、データの損失、重要なファイルまたはフォルダの誤削除、ハードディスク全体のクラッシュなどの障害や災害が発生した場合にコンピュータシステムをリカバリするのに必要なツールがすべて含まれています。障害や災害が発生したために、情報にアクセスできなくなった、あるいはシステムの動作に影響が及んだような場合も、システムと消失したデータを簡単に復元できます。

Acronis True Image HD に実装されたアクロニス独自のテクノロジーによって、オペレーティングシステム、アプリケーション、構成ファイル、ソフトウェア更新プログラム、個人設定、およびデータを含むディスクを、セクタ単位で正確にバックアップすることができます。

バックアップを保存する場所は、コンピュータのストレージデバイスのほとんどが使用可能です。たとえば、内蔵または外付けのハードディスクやネットワークドライブ、あるいは IDE、SCSI、FireWire (IEEE-1394)、USB (1.0、1.1、2.0)、PC カード (旧 PCMCIA) などのインターフェイスで接続されたリムーバブルメディアドライブ、および CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R/RW、MO、Iomega Zip、Iomega Jaz などのドライブから選択できます。

新しいハードディスクドライブを設置する場合には、Acronis True Image HD を使用すると、オペレーティングシステム、アプリケーション、ドキュメント、および個人設定を含む情報を、数分間で古いディスクから新しいディスクに移行することができます。2 TB より大きいハードディスクがある場合は、大容量ディスクでの動作がシステムでサポートされていない場合でも、ディスク領域全体を使用できます。新しいハードディスクに移行した後、元のディスク上のすべての機密情報を完全に消去できます。古いハードディスクを処分する場合には、この操作を行うことをお勧めします。

ウィザードと Windows Vista スタイルのインターフェイスにより操作を容易に行えます。簡単なステップをいくつか実行するだけで、あとはすべて Acronis True Image HD によって処理されます。システムに障害や災害が発生した場合は、ソフトウェアによりすぐにコンピュータを稼働できる状態に戻せます。

1.2 Acronis True Image HD の基本概念

ここでは、プログラムの動作のしくみを理解するうえで役立つと思われる、基本的な概念について説明します。

バックアップ

Wikipedia にはこのような記述があります。「バックアップとは、元のデータが失われてもそのコピーから復元できるように、データのコピーを作成しておくことを指す。バックアップの主な目的は 2 つある。1 つは、障害または災害発生後に状態を復旧することで（「災害復旧」という）、もう 1 つは、誤って削除されたか破損した少数のファイルを復旧することである」

Acronis True Image HD は、これらの目的を達成するために、ディスク(またはパーティション)イメージの作成機能を備えています。デフォルトでは、Acronis True Image HD によってイメージに保存されるのは、ハードディスクのうち、データが格納されている部分のみです(サポート対象のファイル システムのものに限る)。ただし、イメージにハードディスクの全セクタを保存することもできます(このオプションを「セクタ単位のバックアップ」と呼びます)。

ディスクのクローン作成

これは、1 つのディスク ドライブの内容全体を別のドライブに移行/コピーする処理です(大容量のディスクを新たに取付けたときなどに使用します)。同じファイル構造を持つ同一のドライブを作成することができます。「ディスクのクローン作成」ツールを実行すると、1 つのハードディスク ドライブのすべての内容が別のハードディスク ドライブにコピーされます。この処理を利用すると、ハードディスク ドライブの内容が、オペレーティング システムやインストール済みプログラムも含めてすべて別のドライブに転送されるので、すべてのソフトウェアを再インストールして再設定する必要はなくなります。クローン作成機能を使用するのが最も適している場面は、コンピュータの既存のドライブを取り外して、代わりに新しいドライブを取付けたときです。新しいドライブの接続方法は、古いドライブと同一でなければなりません。

Acronis True Image HD では、特定のパーティションのみのクローン作成はできません。クローンを作成できるのは、ドライブ全体のみです。

ハードディスク ドライブの情報をすべて別のドライブに転送するには、他にも、古いハードディスク全体をバックアップしてから、そのバックアップを新しいディスクにリカバリするという方法があります。

バックアップ アーカイブのコンポーネント

アーカイブ - 「アーカイブ チェーン」または「アーカイブ グループ」と呼ばれます。1 つのバックアップ タスクによって管理されるバックアップ ファイルの集合全体を指します。アーカイブは、1 つ以上のスライスで構成されます。

スライス - タスクの 1 回の実行サイクルで作成されるファイルの集合です。作成済みのスライスの数は常に、タスクが実行された回数と同じです。スライスはそれぞれ特定の時点を表しており、その時点にシステムやデータをリカバリすることができます。

ボリューム - スライスに関連付けられた TIB ファイルです。通常は、スライス 1 つにつきボリュームは 1 つだけですが、1 つのスライスが複数のボリュームで構成されることもあります。アーカイブを分割することがタスクのオプションで設定されている場合は、作成されたスライスが複数のファイルに分割されます。また、FAT32 でフォーマットされたハードディスクに大きなサイズのバックアップを保存しようとする、スライスが自動的に複数のファイル(1 つあたり 4 GB、ただし最後のファイルを除く)に分割されます。これらのファイルはそれぞれ、スライスのボリュームです。

スナップショット

Acronis True Image HD によるディスク イメージの作成時には、「スナップショット」テクノロジーが使用されます。そのため、システム パーティションのバックアップでさえも Windows の実行中に作成でき、ファイルは開いたままになるので読み取りや書き込みが可能で、コンピュータを再起動する必要もありません。パーティションのバックアップ処理が開始されると、そのパーティションに対するすべての処理が一時的に凍結されて、パーティションの「スナップショット」が作成されます。スナップショットの作成は通常、数秒で終わります。その後は、オペレーティング システムの動作が再開し、並行してイメージ作成処理が実行されますが、ユーザーからはオペレーティング システムが通常どおり動作しているように見えます。

アクロニスのドライバは、パーティションの特定時点のビューを保持するために継続的に動作します。そのパーティションへの書き込み指示を検出すると、ドライバは、書き込まれるセクタが既にバックアップされているかどうかを調べます。まだバックアップされていない場合は、上書きされるセクタのデータを専用のバッファに保存してから、書き込みを許可します。そのセクタのバックアップはバッファから作成されるので、スナップショットが取得された時点のすべてのパーティション セクタが、何の変更も加えられずにバックアップされ、パーティションの正確な「イメージ」が作成されます。

バックアップ ファイルの形式

Acronis True Image HD では、バックアップ データは独自の TIB 形式で圧縮して保存されます。そのため、保存に必要な領域の大きさが抑えられるだけでなく、以前のバージョンの Acronis True Image HD との下位互換性も維持されます。TIB ファイルの作成時に、データ ブロックのチェックサム値が計算されて、バックアップ対象のデータに追加されます。このチェックサムの値を使用すると、バックアップ データの整合性を検証できます。ただし、独自の形式でデータがバックアップされるので、そのデータをリカバリするには Acronis True Image HD が必要です（Windows の動作中に実行することも、リカバリ環境で実行することもできます）。

バックアップ アーカイブのベリファイ

将来システムのリカバリが必要になったときに必ずリカバリできるという保証は、どうすれば得られるでしょうか。「バックアップのベリファイ」機能を使用すれば、そのような保証も可能です。前述のように、バックアップされるデータにはチェックサム値が追加されます。バックアップ ベリファイの実行時に、Acronis True Image HD はバックアップ ファイルを開いてチェックサム値を再計算し、保存されているチェックサム値と比較します。比較した値がすべて一致していれば、そのバックアップ ファイルは破損していないので、バックアップからのデータ リカバリはかなり高い確率で成功します。レスキュー メディアからコンピュータを起動した後で、システム パーティションのバックアップをベリファイすることを強くお勧めします。

災害復旧

障害や災害が発生したときのリカバリには一般に、レスキュー メディアが必要です。発生した障害によっては、システム データの破損（ウイルスやマルウェアなどが原因）やハードディスクの障害が原因で、オペレーティング システムが起動しなくなることがあります。オペレーティング システムが起動できないときは、別の手段でコンピュータを起動してから、Acronis True Image HD を使用してシステム パーティションをリカバリする必要があります。したがって、障害に対する備えを万全にするには、レスキュー メディアが必須

です。正規のユーザーは、メディアビルダというツールを使用してレスキューメディアを作成できます。

コンピュータの起動時にリカバリ環境を起動できるようにするには、BIOS のブートシーケンスにレスキューメディアを追加しておく必要があります。「BIOS での起動順の並び替え『145ページ』」を参照してください。

1.3 Acronis True Image HD の新機能

- **Acronis ノンストップ バックアップ** - Acronis True Image HD での Near-CDP (Continuous Data Protection: 継続的データ保護) が可能になりました。ドキュメントを、過去の特定の時点の状態に戻せるようになります。この機能が役に立つのは、重要なドキュメントを誤って削除してしまったときや、ドキュメントに加えた修正が正しくないことが判明したために、たとえば 2 週間前の状態に戻す必要がある場合です。特定のファイルのリカバリが必要なときは、Windows エクスプローラに似たブラウザの検索機能を使用して、目的のファイルをすばやく見つけることができます。ただし、Acronis ノンストップ バックアップは単なるバージョン管理ツールではありません。システムのリカバリも、必要であれば実行することができます。
- **オンライン バックアップ** - 非常に重要なデータの安全をさらに強化するために、離れた場所に保管します。ファイルはリモートストレージに保管されるので、コンピュータが盗難や火災に遭っても、データは保護されます。そのため、盗難、火災、その他の自然災害によってデータが消失するリスクは、実質的に排除されます。また、コンピュータ上の破損、消失、または削除されたファイルのリカバリも、安全に行うことができます。オンライン バックアップと Acronis True Image HD の統合により、データバックアップのすべてのニーズを満たす単一のソリューションが実現します。

お住まいの地域によっては Acronis オンライン バックアップを使用できない場合があります。詳細については、<https://www.acronis.co.jp/my/online-backup/index.html> を参照してください。

- **ベリファイ対象の選択** - 以前のバージョンの Acronis True Image HD では、バックアップアーカイブ全体のベリファイしかできませんでした。このことは、場合によっては不都合です。たとえば、完全バックアップアーカイブのサイズが 20 GB で、その後に関連する増分バックアップは 1 つあたり数ギガバイト、全体では 100 GB あるとします。このような場合に、以前のバージョンの Acronis True Image HD ではベリファイが 120 GB のアーカイブ全体に対して行われるため、非常に長い時間がかかることがあります。このバージョンでは、選択した 1 つの増分バックアップと完全バックアップだけをベリファイすることができます。
- **Windows 7 が含まれる TIB イメージからのシステム起動** - Windows 7 Enterprise または Windows 7 Ultimate を使用している場合は、システムパーティションのバックアップが含まれている TIB イメージからシステムを起動することができます。この機能を利用すると、バックアップしたシステムが起動可能かどうかを、実際にリカバリしなくてもテストすることができます。オペレーティングシステムが TIB ファイルから起動可能ならば、その TIB ファイルからのリカバリ後も確実に起動します。
- **拡張容量マネージャ** - Acronis True Image HD ユーザーは、パーティションレイアウトやオペレーティングシステムの制限を回避して、2 TB を超える大容量ディスクの領域全体を管理できます。
- **ディスクのクローン作成時のファイル除外** - 新バージョンの Acronis True Image HD では、ディスクのクローンに含めないファイルおよびフォルダを設定できます。このような除外は、明示的な方法、または一般的なワイルドカード文字の * および ? を使用したパターンの両方で指定できます。
- **SSD のトリミング ウィザード** - この新しいディスク管理ユーティリティ『112ページ』では、ソリッドステートドライブ (SSD) の書き込み速度が改善されるので、時間の

経過とともに発生するか、集中的な使用の結果として発生するデバイスのパフォーマンスの自然な低下を緩和できます。

1.4 システム要件とサポートされるメディア

最小システム要件

Acronis True Image HD のハードウェア要件は、Acronis True Image HD の実行に使用するコンピュータにインストールされているオペレーティング システムの最小要件に一致します。さらに、Acronis True Image HD を実行するには次のハードウェアが必要です。

- ブータブル メディア作成用の CD-RW/DVD-RW ドライブ
- マウスまたはその他のポインティング デバイス(推奨)

Acronis ノンストップ バックアップを実行するには、1 GB 以上の RAM が必要です。

Acronis True Image HD ブータブル メディアを作成するには、次のハードウェアが必要です。

- 256 MB の RAM
- 1 GHz 以上の Pentium プロセッサ

画面解像度は 1152 x 864 以上を推奨します。

サポートされるオペレーティング システム

Acronis True Image HD は、次のオペレーティング システム上でテスト済みです。

- Windows XP SP3
- Windows XP Professional x64 Edition
- Windows Vista SP2(全エディション)
- Windows 7(全エディション)

Acronis True Image HD では、コンピュータ上のディスク/パーティションのバックアップとリカバリのためのブータブル CD-R/DVD-R を作成することもできます。作成できるのは、そのコンピュータで Intel または AMD ベースの PC オペレーティング システムが実行されている場合です。ただし、Intel ベースの Apple Macintosh は、現時点ではネイティブ モードではサポートされません。

サポートされるファイル システム:

- FAT16/32
- NTFS
- Ext2/Ext3
- ReiserFS

ファイル システムがサポート対象外または破損している場合も、Acronis True Image HD ではデータをセクタ単位でコピーできます。

Ext2/Ext3 および ReiserFS ファイル システムの場合は、ディスクまたはパーティションのバックアップと復元処理のみがサポートされます。Acronis True Image HD では、これらのファイル システムに対するファイル レベルの処理(ファイル

のバックアップ、復元、検索、およびイメージのマウントとイメージからのファイル復元)は実行できません。また、これらのファイル システムのディスクまたはパーティションにバックアップを保存することはできません。

サポートされるストレージ メディア:

- ハードディスク ドライブ*
- ネットワーク上のストレージ デバイス
- CD-R/RW、DVD-R/RW、DVD+R (2 層ディスクの DVD+R を含む)、DVD+RW、DVD-RAM、BD-R、BD-RE**
- USB 1.0/2.0/3.0、FireWire (IEEE-1394) および PC カード ストレージ デバイス
- REV®、Jaz® およびその他のリムーバブル メディア
- SSD (ソリッド ステート ドライブ)

* Acronis True Image HD はダイナミック ディスクをサポートしていません。

** 作成された書き換え可能ディスクを Linux で読み込むには、カーネル パッチが必要です。

2 Acronis True Image HD のインストールと起動

2.1 Acronis True Image HD のインストール

Acronis True Image HD をインストールする手順は、次のとおりです。

- Acronis True Image HD のセットアップ ファイルを実行します。
- インストール メニューで、インストールするプログラムとして Acronis True Image HD を選択します。
- インストール ウィザードの画面に表示される指示に従います。



インストール方法は、**[標準]**、**[カスタム]**、**[完全]** から選択できます。**[カスタム]** を選択した場合は、**ブータブル メディア ビルダ**をインストールしないことを選択できます。

ブータブル メディア ビルダとは、ブータブル レスキュー ディスクを作成するためのツールです（詳細については、「ブータブル メディアの作成 『88ページ』」を参照してください）。**ブータブル メディア ビルダ**をインストールすると、ブータブル メディアやその ISO イメージの作成をいつでも、メイン プログラム ウィンドウから、または**ブータブル メディア ビルダ**を単独で実行して行うことができます。

Acronis True Image HD をインストールすると、新しいデバイスがデバイス マネージャのリストに追加されます（[コントロール パネル] → [システム] → [ハードウェア] → [デバイス マネージャ] → [Acronis Devices] → [Acronis True Image Backup Archive Explorer]）。このデバイスを無効にしたりアンインストールしたりしないでください。イメージ アーカイブを仮想ディスクとして接続するときに、このデバイスが必要になります（「アーカイブの参照およびイメージのマウント 『91ページ』」を参照してください）。

2.2 Acronis True Image HD の実行

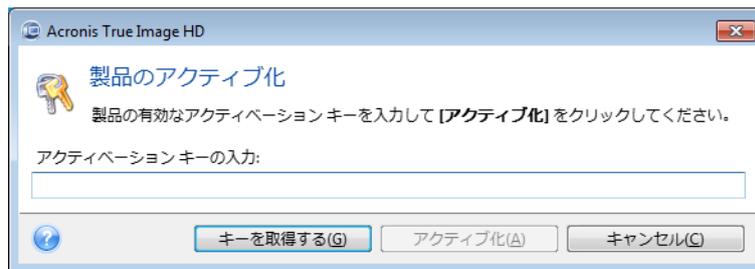
Windows で Acronis True Image HD を実行するには、[スタート] → [すべてのプログラム] → [Acronis] → [Acronis True Image] → [Acronis True Image HD] を選択するか、デスクトップにあるショートカットをダブルクリックします。

2.3 Acronis True Image HD のアクティブ化

Acronis True Image HD を初めて起動する際には、製品を実行できるようにするためのアクティベーション キーを入力する必要があります。

- アクティベーション キーを取得するには、[キーを取得する] ボタンをクリックして、表示されたフォームに連絡先と OEM 製造元から受け取った 16 桁のプロダクト キーを入力する必要があります。フォームには、半角英数字を使用して入力してください。
- [アクロニスの個人情報の保護方針に同意します] チェックボックスを選択して、[サブミット] ボタンをクリックします。入力した情報が正しい場合は、リンクが記載された確認メールが届きます。
- 受け取ったメールに記載されているリンクをクリックしてアクロニスのウェブサイトアクセスすると、製品をアクティブ化するためのプロダクト キーが表示されます。アクロニスのウェブサイトにはアカウントをお持ちの場合は、[登録済み製品とダウンロード] ページでもプロダクト キーを確認することができます。
- アクティベーション キーを受け取ったら、Acronis True Image HD の製品のアクティベーション ウィンドウの該当するフィールドに入力して、[アクティブ化] をクリックします。

[アクティブ化] ボタン は、正しいアクティベーション キーを入力するまで使用することはできません。



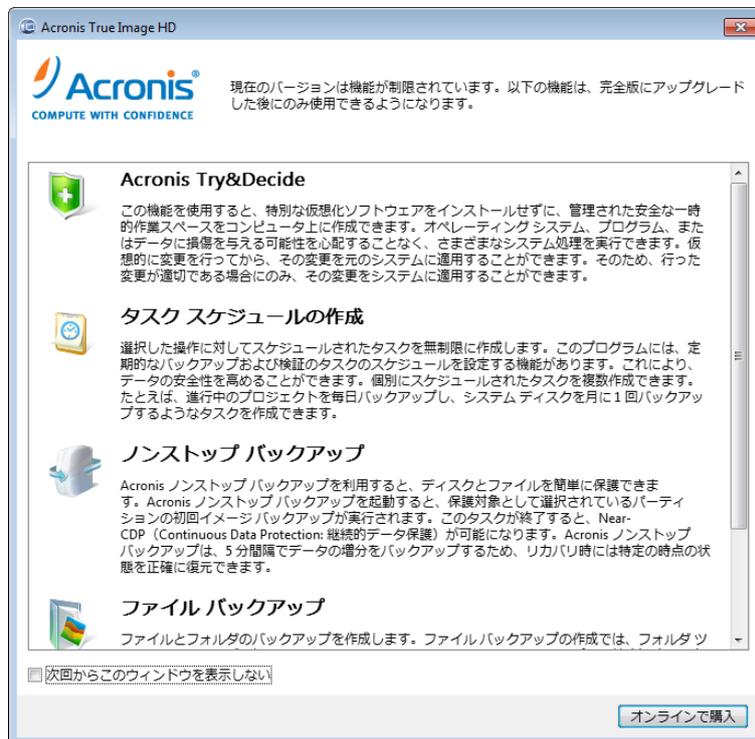
2.4 Acronis True Image HD のアップグレード

アクロニスのウェブ サイトで、Acronis True Image HD を Acronis True Image Home 2010 にアップグレードすることができます。

以下の機能は、Acronis True Image Home 2010 にアップグレードした後にのみ使用できるようになります。

- Acronis Try&Decide
- ノンストップ バックアップ
- システム状態のバックアップ
- アプリケーションのバックアップ
- データのバックアップ（選択したファイル/フォルダ）
- スケジュール設定

- アーカイブの保護
- クリーンアップ ユーティリティ
- バックアップの統合
- 増分バックアップと差分バックアップ
- 通知



新しいバージョンで作成されたバックアップ アーカイブは、古いバージョンのプログラムでは処理できないことがあります。そのため、Acronis True Image HD を古いバージョンに戻す場合は、その古いバージョンでアーカイブを再作成する必要があります。同じ理由により、Acronis True Image HD のアップグレード後は、新たにブータブル メディアを作成することをお勧めします。

2.5 Acronis True Image HD の削除

[スタート] □ → [設定] → [コントロール パネル] → [プログラムの追加と削除] → [Acronis True Image HD] → [削除] を選択します。画面の指示に従って操作します。削除を完了するために、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。

Windows Vista を使用している場合は、[スタート] → [コントロール パネル] → [プログラムと機能] → [Acronis True Image HD] → [削除] を選択します。画面の指示に従って操作します。削除を完了するために、コンピュータの再起動が必要になる場合があります。

3 一般情報およびアクロニス独自のテクノロジー

3.1 ディスク/パーティション イメージ

バックアップ アーカイブは、単一のファイルまたはファイルのグループから成ります（「バックアップ」とも呼ばれます）。その内容は、選択されたディスク/パーティションに保存されているすべての情報のコピーです。

ディスクおよびパーティションのバックアップは、次の方法で行われます。Acronis True Image HD では、オペレーティング システム、レジストリ、ドライバ、ソフトウェア アプリケーション、データ ファイル、およびユーザーから隠されているシステム領域を含むディスクのスナップショットがセクタ単位で保存されます。この処理を「ディスク イメージの作成」といい、作成されたバックアップ アーカイブを「ディスク/パーティション イメージ」といいます。

デフォルトでは Acronis True Image HD は、ハードディスクのデータ（サポートされているファイル システムのもの）を含む部分のみを保存します。また、スワップ ファイル情報（Windows XP 以降における pagefile.sys）や hiberfil.sys（コンピュータが休止状態になる際に RAM の内容を保持するファイル）は、バックアップされません。その結果、イメージ ファイルのサイズが小さくなり、イメージ ファイルの作成とリカバリに要する時間が短縮されます。ただし、**[全セクタのイメージを作成する]** オプションを選択すれば、ハードディスクのすべてのセクタをイメージに出力することもできます。

パーティション イメージにはすべてのファイルおよびフォルダが含まれます。これには、すべての属性（隠しファイル、システム ファイルなど）、ブート レコード、およびファイル アロケーション テーブル(FAT)のほか、ルート ディレクトリのファイルや マスタ ブート レコード(MBR)のあるハードディスクのトラック 0 も含まれます。

ディスク イメージには、マスタ ブート レコード(MBR)のあるトラック 0 とディスクのすべてのパーティションのイメージが保存されます。

Acronis True Image HD アーカイブ ファイルの拡張子は、デフォルトですべて「.tib」になります。ファイルの拡張子は変更しないでください。

ディスク/パーティション イメージから、ファイルやフォルダをリカバリできることにご注意ください。これを行うには、イメージを仮想ディスクとしてマウント（「アーカイブの参照およびイメージのマウント 『91ページ』」を参照）するか、またはイメージのリカバリを開始して **[指定したファイルおよびフォルダをリカバリする]** を選択します。

3.2 完全バックアップ

Acronis True Image HD では、完全バックアップを作成することができます。

完全バックアップ — バックアップが作成された時点のすべてのデータが含まれます。完全バックアップは、増分バックアップのベースとして使用するか、スタンドアロンのアーカイブとして使用できます（現在のバージョンでは、増分バックアップは使用できません）。

スタンドアロンの完全バックアップは、システムを最初の状態に戻すことが多い場合や、複数のバックアップ ファイルを管理することが望ましくない場合に最適なソリューションです。

3.3 バックアップ ファイルの名前付け規則

既に説明したとおり、Acronis True Image HD で完全アーカイブを作成するときに、分割オプションが設定されている場合や、4 GB を超えるサイズのバックアップを FAT32 ディスクに保存する場合は、アーカイブが複数のボリュームに分割されます。「Acronis True Image HD の基本概念 『8ページ』」の「バックアップ アーカイブのコンポーネント」を参照してください。

ユーザーがバックアップに名前を割り当てることもできますが、多くの場合は自動的に割り当てられる名前の使用をお勧めします。以下の情報は、Windows エクスプローラでバックアップ アーカイブ ストレージの内容を確認する場合に役立ちます。

1) FAT32 ディスクに保存すると、このようなバックアップは SystemBackup_mm_dd_yyyy1.tib、SystemBackup_mm_dd_yyyy2.tib、SystemBackup_mm_dd_yyyy3.tib といった名前のボリュームに分割されることがあります。

この場合、それ以降の自動的にスケジュールされたバックアップ(デフォルトでは 7 日ごとに 1 回)では、次のバックアップが終了した後でのみ前回のバックアップが置き換えられます(現在のバックアップが失敗した場合に古いバックアップを維持するため)。バックアップのファイル名は、SystemBackup_mm_dd_yyyy.tib と SystemBackup_mm_dd_yyyy (1) .tib が交互に使用されます。

2) 新しいターゲットで新しい完全バックアップ タスクを作成すると、バックアップの名前は「MyBackup_mm_dd_yyyy.tib」になります。

バックアップが分割される場合(FAT32 ディスクでのファイル サイズ 4 GB という制限のため、またはバックアップ タスクの設定で指定されたため)は、分割されたバックアップ ファイル(ボリューム)に次のように名前が付けられます。

MyBackup_mm_dd_yyyy1.tib...MyBackup_mm_dd_yyyyN.tib のようになります。N はボリュームの番号です。

3) たとえばパーティション C と D をバックアップすると、バックアップの名前は「System_C_D_mm_dd_yyyy.tib」になります。

4) [データ リカバリとバックアップの管理] 画面でバックアップの名前を変更すると、プログラムのメタデータ データベース内でのみバックアップの名前が変更されます。ディスク上のバックアップ ファイルの名前は変更されません。

3.4 ディスクとパーティション情報の表示

各ウィザードのスキームすべてにおけるデータの表示方法を変更できます。

ヘッダーには、[項目]、[アイコンの整理]、および [ディスク プロパティ] の最大 3 つのアイコンを表示できます。[ディスク プロパティ] はオブジェクトを右クリックして開くコンテキスト メニューにも表示されます。

メッセージを特定の項目で並べ替えるには、ヘッダーをクリックするか(再度クリックするとメッセージを逆順で表示)、[アイコンの整理] ボタンをクリックして項目を選択します。

表示する項目を選択するには、ヘッダー行を右クリックするか、**【項目】** ボタンを左クリックします。それから、表示する項目にフラグを設定します。**【項目】** ボタンを左クリックする際、**【上に移動】** および **【下に移動】** ボタンを使って項目の表示順を変更できます。

【ディスク プロパティ】 ボタンをクリックすると、選択したパーティションまたはディスクのプロパティ ウィンドウが表示されます。

このウィンドウは 2 つのペインで構成されています。左側のペインにはプロパティのツリーが、右側のペインには選択したプロパティの詳細な説明が表示されます。ディスク情報にはディスクの物理的なパラメータ（接続の種類、デバイスの種類、サイズなど）が表示されます。パーティション情報にはパーティションの物理的なパラメータ（セクタ、位置など）と論理的なパラメータ（ファイル システム、空き領域、割り当てられているドライブ文字など）の両方が表示されます。

項目の境界をマウスでドラッグすると、項目の幅を変更できます。

3.5 Acronis DriveCleanser

Acronis True Image HD には、ハードディスク ドライブ全体または個々のパーティションのデータを確実に消去するためのユーティリティが含まれています。古いハードディスク ドライブを新しい大容量のディスクに交換するときに、古いディスク上に個人的な機密情報が大量に残ってしまうことがあります。このような情報は、たとえディスクが再フォーマットされたとしても、リカバリできてしまうことがあります。

Acronis DriveCleanser は、ハードディスク ドライブやパーティション上の機密情報を消去するツールです。このツールに採用されている技術は、ほとんどの国や州の基準を満たすか上回っています。データ消去の方法は、機密情報の重要性に応じてさまざまなものから選択することができます。

4 システムに大容量ハードドライブ(2 TB を超えるもの)を新しく追加する場合

大容量ハードディスク (2 TB を超えるもの) を購入した場合、次の理由により、2 TB を超える分の空き領域を割り当てることができない場合があります。

- **MBR の制限:** MBR パーティション レイアウトは、最大 2^{32} バイト (使用可能なディスク領域全体の最大 2 TB) までしか対応できません。
- **GPT の制限:** GPT パーティション レイアウトは大容量ディスクに対応できますが、一部のオペレーティング システムは GPT ディスクの使用をサポートしていません。
- **GPT ディスクからの起動:** UEFI システムでの GPT ディスクからの起動をサポートするのは Windows Vista SP1(x64)と Windows 7(x64)のみです。
- **UEFI:** UEFI は新しいテクノロジーです。すべてのコンピュータでサポートされているわけではありません。
- Windows XP(x32)では、2 TB を超えるディスクを正確に検出できません。
- **USB コントローラ:** 一部の USB コントローラでは、大容量ディスクのサイズを正確に認識できない場合があります。

Acronis True Image HD では、システムへの新しいディスクの追加、他のディスクからのデータの移行、以前作成したアーカイブから新しいディスクへのデータの移行、2 TB を超えるディスク領域の割り当てなどを実行できます。

また、Acronis True Image HD を Windows XP(x32)にインストールすると、大容量ディスクのサイズを正確に検出できるドライバがインストールされます。

新しいディスクの追加

ご使用のコンピュータに新しいハード ドライブを取り付けたら、ディスク領域を割り当て、新しいパーティションを作成し、必要なファイル システム、パーティション タイプ、ドライブ文字を指定することができます。詳細については、「新しいハードディスクの追加」セクションを参照してください。

現在、Acronis True Image HD では、ディスク処理を追加するときに、パーティション スタイル(GPT または MBR)を選択できます。つまり、**新しいディスクの追加**ウィザードで、パーティション テーブルの選択ステップを行うときに、必要なパーティション スタイルを定義できます。

新しいハードディスクが 2 TB を超えるもので、MBR パーティション スタイルを選択した場合は、後から Acronis 容量拡張マネージャ 『28ページ』を使用して 2 TB を超える分の領域を割り当てることができます。

新しいディスクへの移行

より大きいサイズのディスクにシステムを復元またはクローン作成する場合、ターゲットディスクのレイアウトを変更できます。ウィザードの各ステップで、システム パラメータに応じて MBR または GPT パーティション レイアウトを選択できます。復元処理の際にパーティション スタイルを変更する方法については、「リカバリ ウィザード - 詳細情報 『74ページ』」を参照してください。クローン作成の詳細については、「システムの新規ディスクへの転送 『109ページ』」を参照してください。

MBR と GPT の詳細については、「パーティション レイアウト 『117ページ』」セクションを参照してください。

ソースおよびターゲット ハード ドライブのパラメータに応じて、該当する使用可能なオプションを表で確認できます。「2 TB を超えるディスクへの移行 『25ページ』」セクションを参照してください。

ディスク領域の割り当て

Acronis True Image HD では、大容量ディスクの空き領域を MBR パーティション スタイルで割り当てることができます。ディスク領域をオペレーティング システムからアクセス可能にする方法については、「Acronis 容量拡張マネージャ 『28ページ』」を参照してください。

4.1 大容量ドライブの追加と管理(代表的なシナリオ)

この章では、システム内での大容量ハード ドライブの管理に関する代表的なシナリオについて説明します。

4.1.1 システム ディスクではないディスクとしての新しい大容量ドライブの追加

2 TB を超える大容量ハードディスクを新しく購入して、システム ディスクではないディスクとして使用したいものの、コンピュータにインストールされているオペレーティング システム (Windows XP など) が GPT ディスクをサポートしていない場合を考えてみましょう。

1. 新しいハード ドライブをコンピュータに取り付けます。
2. Acronis True Image HD を実行して**新しいディスクの追加**ウィザードを起動します。お使いのオペレーティング システムが GPT パーティション スタイルをサポートしていないため、MBR スタイルが適用され、ディスク領域全体のうちの 2 TB のみが使用可能になります。ディスク領域全体を割り当てるには、処理完了後に Acronis True Image HD を再起動して、Acronis 拡張容量マネージャ 『28ページ』 を実行し、拡張容量ディスクを作成します。

このようなディスクを別のシステムに移動する場合、拡張容量ディスクを使用するには移動先のシステムに Acronis 製品が少なくとも 1 つインストールされている必要があります。

拡張容量ディスクは、Windows 以外のオペレーティング システムでは使用できません。

4.1.2 大容量ディスクへのオペレーティング システムの移行

2 TB を超えるハードディスクを新しく購入したが、使用しているコンピュータにインストールされているオペレーティング システムが GPT ディスクをサポートしておらず、UEFI ベースでもないとします。この新しいディスクにオペレーティング システムを移行するには次の手順に従います。

1. 新しいハード ドライブをコンピュータに取り付けます。

2. Acronis True Image HD を実行し、オペレーティング システムを新しいハード ドライブに移行するために**ディスクのクローン作成ウィザード**を起動します。
3. Acronis のドライバが自動的にインストールおよびアクティブ化されます。処理完了後、新しいディスクからオペレーティング システムを起動できるようになります。
4. 拡張容量ディスクが使用可能になります。

4.1.3 大容量ディスクへのオペレーティング システムのインストール

2 TB を超えるハードディスクを新しく購入したが、使用しているコンピュータにインストールされているオペレーティング システムが GPT ディスクをサポートしておらず、UEFI ベースでもないとします。この新しいディスクにオペレーティング システムをインストールするには次の手順に従います。

1. 新しいハード ドライブをコンピュータに取り付けます。
2. 新しいディスクにオペレーティング システムをインストールした後、MBR パーティション スタイルの制限により、2 TB を超えるディスク領域は未割り当てのままとなります。
3. Acronis True Image HD をインストールして、Acronis のドライバをアクティブ化し、コンピュータを再起動します。
4. ディスク領域全体を割り当てるには、Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 拡張容量マネージャ 『28ページ』 を実行し、拡張容量ディスクを作成します。

4.1.4 拡張容量ディスクへの GPT ディスクのリカバリ

大容量ハード ドライブに 拡張容量ディスクを作成し、アーカイブから GPT ディスクをリカバリするための、リカバリ先のパーティションとして、それを使用するとします。

1. Acronis 拡張容量マネージャを使用して 拡張容量ディスクを削除してから、リカバリ処理を開始します。
2. **リカバリ ウィザード**を起動して、GPT ディスクを復元します。

4.1.5 大容量ディスクへの MBR パーティションのリカバリ

Acronis True Image HD では、MBR ディスクを大容量ハード ドライブにリカバリできます。

1. **Acronis 拡張容量マネージャ** を実行して、リカバリ先のパーティションに 拡張容量ディスクを作成します。
2. **リカバリ ウィザード**を実行して、アーカイブから MBR ディスクをリカバリするための、リカバリ先のパーティションを選択します。

4.1.6 拡張容量ディスクを GPT スタイルに変換

拡張容量ディスクを作成した大容量ディスクを GPT スタイルに変換するとします。

GPT に変換すると、2 TB を超える領域のデータが失われることを考慮する必要があります。この問題を回避するには、拡張容量マネージャを起動して、拡張容量ディスクを削除し、Acronis True Image HD を再起動して、パーティション スタイルを GPT に変換します。

4.1.7 大容量ディスク サイズの修正

2 TB を超えるハードディスク ドライブをシステムに取り付けると、Windows がディスクのサイズを誤って認識する場合があります。

ディスク サイズの検出を修正するには、次の手順を実行します。

- Acronis ドライバをインストールおよびアクティブ化します。
- コンピュータを再起動します。
- これで、Windows がディスクのサイズを正確に認識できるようになります。Acronis True Image HD またはディスク管理ツールを使用してパーティションを作成します。

4.1.8 拡張容量ディスクを作成したシステムからの Acronis True Image HD の削除

Acronis True Image HD をインストールし、Acronis 拡張容量マネージャを使用すると、ディスク領域全体が正確に認識され、割り当てられます。

2 TB を超えるディスク領域は 拡張容量ディスクとして使用されます。

この製品をアンインストールする際には、拡張容量ディスクも削除するかどうかの確認を求められます。

- 拡張容量ディスクを削除しても、Acronis ドライバがシステムにインストールされている限りは、ディスク サイズが Windows によって正確に認識されます。
- 拡張容量ディスクを削除しなければ、Acronis ドライバがシステムにインストールされている限り、[新しいディスクの追加] やディスク管理ツールからアクセスできます。

4.1.9 更新

お使いのシステムで Acronis True Image HD を更新すると、Acronis ドライバのバージョンが最新の状態に保持されます。

既存の拡張容量ディスクは、更新後も保持されます。

4.2 導入前にシステムについて知っておくべきこと

導入（コンピュータに新しいディスクを追加する場合は、移行方法や新しいパーティションスタイルの選択）を開始する前に、いくつかのシステム パラメータについて把握しておく必要があります。

1. ハードウェアが UEFI をサポートしているかどうか

UEFI とは

統合拡張可能ファームウェア インターフェイス(UEFI)は、起動サービスやランタイム サービスのための標準的な構文を設定することにより、ソフトウェアの相互運用性を向上させる仕様です。

UEFI は比較的新しい標準のため、すべてのシステムでサポートされているわけではありません。Windows 7 x64（全エディション）と Windows Vista SP1+ x64（全エディション）オペレーティング システムのみ UEFI テクノロジーをサポートしています。

UEFI の詳細については、<http://www.uefi.org>（英語）にアクセスしてください。

UEFI が必要な理由

UEFI ベースのシステムでは、2 TB を超えるディスク サイズに対応する GPT パーティション レイアウトから起動できます。またこのようなシステムでは、特定のファイル システムは必要とされず、プロセッサ モードは 32 ビットと 64 ビットのいずれかを使用することができます。

お使いのシステムが UEFI ベースかどうかを確認するには、BIOS を起動して、**[UEFI 起動]** オプションがあるか確認する必要があります。

1. 起動中に、画面上のメッセージに表示されたキーを押して、BIOS 設定プログラムを起動します。通常は Del キーまたは F2 キーです。
2. 矢印キーを使用して **[起動オプション]** メニューを起動します。
3. **[UEFI 起動]** 項目がある場合は、この項目で **[有効]** を選択します。
4. **[設定を保存して終了]** に移動して、**Enter** キーを押し、変更を保存して、システムを起動します。

システム ディスクのレイアウトが MBR の場合、Windows オペレーティング システムは UEFI 起動できません。

2. オペレーティング システムが GPT をサポートしているかどうか

ハード ドライブのパーティション スタイルが MBR の場合、Windows のディスク管理 ツールでは 2 TB までしか使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、ディスクのパーティションを GPT スタイル 『117ページ』に変更するか（オペレーティング システムが GPT をサポートしている場合）、Acronis 容量拡張マネージャ 『28ページ』を使用する（オペレーティング システムが GPT をサポートしていない場合）必要があります。

次の表は、GPT ディスクの読み取りや GPT ディスクからの起動を、どのオペレーティング システムがサポートしているかを示しています。

	GPT ディスクを読み取り可能	GPT ディスクから起動可能
Windows XP x32	×	×
Windows XP x64	○	×
Windows Vista x32	○	×
Windows Vista x64	○	×
Windows Vista x64 SP1 以降	○	○
Windows 7 x32	○	×
Windows 7 x64	○	○

4.3 大容量ハード ドライブの追加

新しいハードディスク ドライブを追加するには、まずハードディスク ドライブをコンピュータに取り付け、**新しいディスクの追加ウィザード**を起動します。

最初は、ディスク領域が未割り当てとなります。Acronis True Image HD により、パーティションを作成し、新規作成したパーティションで必要となるパラメータを指定できます。

新しいディスクの追加ウィザードを使用して、パーティション レイアウトを GPT または MBR から選択できます。

下の表は、システムに新しいディスクを追加する際に選択できるオプションを示しています。

ご使用のオペレーティング システム	選択可能なオプション
<p>GPT はサポートされていません</p> <p>(Windows XP x32)</p>	<p>MBR スタイルがパーティションに適用されます。MBR は大容量ディスクをサポートしていないため、2 TB を超える領域は処理完了後も未割り当てのままとなります。Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 容量拡張マネージャを使用してディスク領域全体を割り当て、Windows のディスク管理ツールが認識できるようにする必要があります。</p>
<p>GPT はサポートされています</p> <p>(Windows XPx64、Windows Vista、Windows 7)</p>	<p>Acronis True Image HD では、次のパーティション レイアウト スタイルを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ [ディスクに GPT パーティション テーブルを作成する]: パーティション レイアウトは GPT になります。 ▪ [ディスクに MBR パーティション テーブルを作成する]: パーティション レイアウトは MBR になります。このオプションを選択した場合、処理完了直後はディスク容量全体を使用できません。Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 容量拡張マネージャを使用してディスク領域全体を割り当て、Windows のディスク管理ツールが認識できるようにする必要があります。
<p>Acronis ブータブルメディア</p>	<p>Acronis True Image HD では、次のパーティション レイアウト スタイルを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ [ディスクに GPT パーティション テーブルを作成する]: パーティション レイアウトは GPT になります。お使いのオペレーティング システムが GPT ディスクをサポートしている必要があります。 ▪ [ディスクに MBR パーティション テーブルを作成する]: パーティション レイアウトは MBR になります。このオプションを選択した場合、処理完了直後はディスク容量全体を使用できません。Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 容量拡張マネージャを使用してディスク領域全体を割り当て、Windows のディスク管理ツールが認識できるようにする必要があります。

4.4 2 TB を超えるディスクへの移行

コンピュータに新しいディスクを取り付けたら、**ディスクのクローン作成ウィザード**を起動し、新しいディスクにデータを転送します。

移行を開始する前に、オペレーティング システムでの UEFI のサポート状況、ソース ディスクのレイアウト (GPT または MBR)を確認する必要があります。確認することで、ニーズに最も適した移行方法を選択できるようになります。

[移行方法] ステップでは、ターゲット ディスクを MBR のままにするか(ソース ディスクが MBR の場合)、Acronis True Image HD を使用して GPT に変換するかを選択する必要があります。

下の表は、ソース ディスクを大容量ハードディスク(2 TB を超えるもの)に移行する場合に使用可能なオプションを示しています。

各オプションの長所と短所は、お使いのシステムのパラメータによって異なります。多くは、ターゲット ディスクのブータビリティと大容量ディスクの領域全体を使用できるかどうかに関係しています。

	システムは BIOS 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)	システムは UEFI 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)
<p>ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしていない</p>	<p>クローン作成後、パーティション スタイルは MBR のままとなります。クローン作成したオペレーティング システムに Acronis Bus ドライバがインストールされます。また、MBR は 2 TB を超えるハード ドライブをサポートしていないため、2 TB を超えるディスク領域は使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、パーティション スタイルを GPT に変更するか、または処理完了後に Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 容量拡張マネージャを使用して、2 TB を超えるディスク領域を Windows のディスク管理ツールで認識できるようにする必要があります。</p>	<p>次のいずれかの移行方法を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ ソース パーティションを変更せずにコピーする <p>パーティション スタイルは MBR のままとなります。処理完了後、UEFI からオペレーティング システムを起動できない場合があります。クローン作成したオペレーティング システムに Acronis Bus ドライバがインストールされます。また、MBR は 2 TB を超えるハード ドライブをサポートしていないため、2 TB を超えるディスク領域は使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、パーティション スタイルを GPT に変更するか、または処理完了後に Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 容量拡張マネージャを使用して、2 TB を超えるディスク領域を Windows のディスク管理ツールで認識できるようにする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ パーティション スタイルを GPT に変換する <p>ターゲットのパーティションが GPT スタイルに変換されます。お使いのオペレーティング システムは UEFI をサポートしていないため、システム ディスクではないディスクとして使用できます。すべてのディスク領域を使用できます。</p>

<p>ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしている</p>	<p>パーティション スタイルは移行後も MBR のままとなります。クローン作成したオペレーティング システムに Acronis Bus ドライバがインストールされます。MBR は 2 TB を超えるハード ドライブをサポートしていないため、2 TB を超えるディスク領域は使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、パーティション スタイルを GPT に変更するか、または処理完了後に Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 容量拡張マネージャを使用して、2 TB を超えるディスク領域を Windows のディスク管理ツールで認識できるようにする必要があります。</p>	<p>ターゲット ディスクのパーティション スタイルは自動的に GPT に変換されます。このディスクは、UEFI 起動用として使用できます。また、すべてのディスク領域を使用できます。</p>
<p>ソース ディスクは MBR であり、OS は Windows 以外または OS が ない</p>	<p>次のいずれかの移行方法を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ ソース パーティションを変更せずにコピーする <p>パーティション スタイルは MBR のままとなります。MBR は 2 TB を超えるハード ドライブをサポートしていないため、2 TB を超えるディスク領域は使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、パーティション スタイルを GPT に変更するか、または処理完了後に Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 容量拡張マネージャを使用して、2 TB を超えるディスク領域を Windows のディスク管理ツールで認識できるようにする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ パーティション スタイルを GPT に変換する <p>処理完了後、パーティション スタイルは GPT に変換されます。ソース ディスクに Windows オペレーティング システムがインストールされていないため、ターゲット ディスクを起動用として使用できません。すべてのディスク領域を使用できます。</p>	<p>次のいずれかの移行方法を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ ソース パーティションを変更せずにコピーする <p>パーティション スタイルは MBR のままとなります。MBR は 2 TB を超えるハード ドライブをサポートしていないため、2 TB を超えるディスク領域は使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、パーティション スタイルを GPT に変更するか、または処理完了後に Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 容量拡張マネージャを使用して、2 TB を超えるディスク領域を Windows のディスク管理ツールで認識できるようにする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ パーティション スタイルを GPT に変換する <p>ターゲットのパーティションが GPT スタイルに変換されます。ソース ディスクに Windows オペレーティング システムがインストールされていないため、ターゲット ディスクを起動用として使用できません。また、すべてのディスク領域を使用できます。</p>

<p>ソース ディスクは GPT であり、OS は UEFI をサポートしている</p>	<p>パーティション スタイルは移行後も GPT のままとなります。お使いのオペレーティング システムは GPT からの BIOS 起動をサポートしていないため、処理完了後、システムは BIOS から起動できなくなります。すべてのディスク領域を使用できません。</p>	<p>この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは GPT のままとなり、ターゲット ディスクは UEFI 起動が可能となります。すべてのディスク領域を使用できます。</p>
<p>ソース ディスクは GPT であり、OS は Windows 以外または OS がない</p>	<p>この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは GPT のままとなり、ターゲット ディスクは起動できません。すべてのディスク領域を使用できません。</p>	<p>この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは GPT のままとなり、ターゲット ディスクは UEFI 起動できません。すべてのディスク領域を使用できます。</p>

4.5 Acronis 拡張容量マネージャ

Acronis 拡張容量マネージャにより、ご使用のオペレーティング システムで大容量ディスクを MBR パーティション スタイルでサポートできるようになります。その結果、2 TB を超える領域が使用可能になります。この空き領域は個別のディスクとして認識され、通常の物理ハードディスクと同様にオペレーティング システムやアプリケーションからアクセスできます。

Acronis 拡張容量マネージャ ウィザードには、2 TB を超えるハードディスク(未割り当てまたは MBR パーティション スタイル)がすべて表示されます。ここでは、どのディスク領域が Windows によって認識および割り当てられるのかを確認できます。ウィザードでは、この領域を Windows ネイティブ容量と呼びます。

2 TB を超える領域は、**[拡張容量]** と表示されます。拡張容量ディスクを有効にすると、オペレーティング システムがこの領域を認識するようになり、ディスク管理処理が可能になります。

[領域の割り当て] をクリックすると、次のステップで割り当てることができるディスク領域が表示されます。

[適用] ボタンをクリックすると、拡張容量ディスクが物理ディスクにエミュレートされます。物理ディスクが 4 TB を超えており、ホスト オペレーティング システムが GPT パーティション レイアウトをサポートしていない場合は、複数の MBR 拡張容量ディスクが出現します。

これらの拡張容量ディスクはブータブルではありませんのでご注意ください。多くのプロパティは物理ディスクと同じです。

領域を割り当てたら、拡張容量ディスクを一時的にオフにすることができます。オフにするには、**[拡張容量ディスクを一時的にオフにする]** をクリックします。これにより、拡張容量ディスクはディスク管理ツールで表示されなくなりますが、ディスク領域は割り当てられたままなので、表示されていないパーティションは後で有効にすることができます。

拡張容量ディスクを削除するには、**[拡張容量ディスクの削除]** をクリックし、次のステップで **[適用]** ボタンをクリックします。ディスクはシステムから削除され、その結果、2 TB を超えるディスク領域にはアクセスできなくなります。この領域を後で割り当てするには、拡張容量マネージャを再起動する必要があります。

5 障害復旧のための準備

5.1 障害や災害に対する最善の準備方法

「失敗する可能性のあるものは、いずれ失敗する」（それも最悪のタイミングに、最悪の形で）というマーフィーの法則を思い出してください。また、彼は天性の楽道家だったという人も中にはいます。したがって、コンピュータはクラッシュする可能性があり、いずれはクラッシュすることになる（それも最悪のタイミングで発生することがあります）ということに注意してください。マーフィーの法則は別の解釈も可能です。つまり、悪い方向に進む可能性があるすべてのことを検討し、それを回避するために対処することはとても重要です。可能性のある障害に対処する最善の方法は、次のように必要な対策を取ることです。

1) 障害に対して適切に準備するには、システム ディスク(または、最小限度、Windows および使用しているアプリケーションを含むパーティション)の完全バックアップを作成する必要があります。

2) 可能な限り、プライマリ ハードディスク(C: ドライブ)以外のハード ドライブ(できれば外付けハード ドライブ)にシステム ドライブのイメージを保存する必要があります。これにより、プライマリ ハードディスク ドライブに障害や災害が発生した場合でも、システムをより確実にリカバリできます。また、個人のデータはオペレーティング システムやアプリケーションとは別に D: ドライブなどのディスクに格納します。このような対策を行うことにより、システム ディスクとデータ ディスク(またはパーティション)のイメージ作成時間を短縮できるだけでなく、リカバリが必要な情報の量も低減させることができます。これにより、システム ディスクのバックアップファイルが小さくなり、リカバリが容易になります。同様に、バックアップ ファイルのサイズが小さいため、破損の可能性が少なくなり、システムのリカバリに要する時間が短縮されます。

3) で説明している処置に従って、データ(ドキュメント、ビデオ、写真など)をシステム ディスク以外の場所に保存する場合は、そのデータもバックアップする必要があります。データを含んでいるフォルダをバックアップするか、データ ディスク イメージを作成できます。イメージの作成はファイルのコピーに比べて非常に高速であるため、大量のデータをバックアップする場合は、バックアップ処理時間が大幅に短縮される可能性があります。また、何らかの理由でイメージ ファイルが破損した場合でも、イメージをマウントし、マウントしたイメージから Windows エクスプローラを使用してファイルやフォルダをコピーすることで、ほとんどのファイルやフォルダを保存できることがあります。

4) ほとんどの場合、障害からのシステムのリカバリはレスキュー メディアからの起動後に行われるため、次のセクション「ブータブル レスキュー メディアのテスト」で説明されているようにレスキュー メディアをテストする必要があります。

5.1.1 バックアップをリカバリに使用できるかをテストするときの推奨事項

1) Windows でアクティブ パーティションのリカバリを開始する場合でも、リカバリ プロセスの開始後にプログラムは Linux 環境で再起動されます。これは、Windows 自体のパーティションのリカバリを実行中に Windows を実行しておくことができないためです。したがって、すべてのケースにおいてリカバリ環境下でアクティブ パーティションをリカバリします。予備のハード ドライブがある場合は、Linux を使用するレスキュー メディアから起動してこのハード ドライブにリカバリできるかどうかをテストすることを強く推奨します。スペア ドライブがない場合は、少なくともリカバリ環境でイメージの検証を実行してください。Windows での検証中に読み取ることができるバックアップは、Linux 環境で常に読み取れるとは限りません。

Acronis True Image HD のレスキュー メディアを使用すると、Windows でのドライブの識別方法とは異なるディスク ドライブ文字が作成されることがあります。たとえば、スタンドアロン版の Acronis True Image HD で D: と表現されるドライブが、Windows の E: ドライブに対応していることもあります。安全のために、ハード ドライブのすべてのパーティションに一意的な名前を割り当てておくことをお勧めします。これにより、バックアップを含むディスクを見つけることが容易になります。

2) また、リカバリ ウィザードの [概要] 画面までのすべてのステップを完了することも役に立ちます。ただし、[実行] ボタンはクリックしないでください。これにより、リカバリ プロセスのシミュレーションを行い、Acronis True Image HD でバックアップを含むドライブとターゲット ドライブの両方が認識されることを確認できます。リカバリ ウィザードのすべてのステップを完了したら、[概要] 画面の **[キャンセル]** をクリックします。この手順は、設定と選択肢に納得するまで繰り返すことができます。

5.1.2 その他の推奨事項

1) 多くの IT 担当者はシステム バックアップのコピーを少なくとも 2 つ（できれば 3 つ）持つように推奨しています。安全のために、バックアップの 1 つのコピーをその他のコピーとは別の場所（バックアップ コンピュータを自宅で使用している場合は、たとえば会社や友人の自宅など他の建物が望ましい）に保存することもお勧めします。複数のバックアップが有効なもう 1 つの点として、次のことが挙げられます。リカバリを開始すると、Acronis True Image HD により、ターゲット パーティション（またはディスク）が削除されます。1 つのバックアップのみを保有している場合、リカバリするコンピュータでシステム パーティションを削除する瞬間は大きな危険性があります。つまり、リカバリしたイメージが少なく、そのイメージが破損していた場合は大きな問題になります。

2) バックアップの保存に使用するハード ドライブは FAT32 ではなく NTFS ファイル システムにフォーマットすることをお勧めします。これは、FAT32 ディスク上のファイル サイズが 4 GB に制限されているからです。このため、バックアップのサイズが約 100 GB の場合、Acronis True Image HD によりファイルが 25 個のファイルに分割されます。ハードディスクにこのような完全バックアップが複数ある場合、ファイルの数はさらに完全バックアップの数を掛けた数になります。これは、Windows エクスプローラを使用してバックアップを別の場所に移動する場合などに不便です。

3) 自宅に 1 台のコンピュータしかない場合は、インターネットが使用できなくなる可能性があるため、障害からのリカバリに役立つ可能性がある情報を印刷しておくことをお勧めします。印刷した情報はレスキュー CD/DVD や別のレスキュー メディアと一緒に安全な場所に保管してください。

5.2 ブータブル レスキュー メディアのテスト

必要に応じてコンピュータを正常にリカバリできるよう、レスキュー メディアからコンピュータを起動できることをテストしておく必要があります。また、大容量記憶デバイスおよびネットワーク アダプタの運用に必要なドライバがすべてリカバリ メディアに含まれるようにしてください。

1) ダウンロード版のプログラムを購入された場合は、ユーザーズ ガイドまたはプログラムのヘルプで示される手順に従ってブータブル レスキュー CD(または USB スティックなどの他のレスキュー メディア)を作成し、このレスキュー メディアがコンピュータで起動できることを確認する必要があります。

レスキュー メディアからの起動を有効にし、レスキュー メディアのデバイス (CD-ROM/DVD-ROM ドライブまたは USB スティック) が最初のブート デバイスになるよ

うにコンピュータを構成してください。「BIOS での起動順の並び替え 『145ページ』」を参照してください。

レスキュー CD がある場合は、「Press any key to boot from CD」というプロンプトが表示されたらすぐにキーを押して CD からの起動を開始します。5 秒以内にキーを押さなかった場合は、コンピュータを再起動する必要があります。他のレスキュー メディアを使用する場合の手順も同様です。

2) コンピュータがリカバリ環境で起動した後は、バックアップの保存に使用する外部ハード ドライブを含む、システム内のハード ドライブすべてが検知されることを確認します。そのため、レスキュー メディアから起動する前に外部ドライブを接続しておく必要があります。接続していない場合は、リカバリ環境がドライブを検知しない場合があります。

3) バックアップをネットワークに保存している場合は、リカバリ環境でネットワークにアクセスできることを確認する必要があります。レスキュー メディアから起動した場合、Acronis True Image HD がネットワークを検知しない場合があります。ネットワーク上にコンピュータが表示されないが、[マイ コンピュータ] に [近くのコンピュータ] アイコンが表示されている場合は、ネットワーク上の DHCP サーバーが稼動していることを確認してください。DHCP サーバーを使用していない場合は、[ツールとユーティリティ] > [オプション] > [ネットワークアダプタ] で表示されるウィンドウで、ネットワーク設定を手動で指定します。

[マイ コンピュータ] で [近くのコンピュータ] アイコンが表示されない場合は、ネットワーク カードまたは Acronis True Image HD に同梱されているカード ドライバに問題がある可能性があります。

レスキュー メディアからの起動時におけるビデオ モードの選択

レスキュー メディアからの起動時には、ビデオ カードおよびモニタの仕様に応じて最適なビデオ モードが自動で選択されます。ただし、使用しているハードウェアに適していないビデオ モードが選択される場合もあります。このような場合は、次の手順で適したビデオ モードを選択できます。

1. レスキュー メディアからの起動を開始します。ブート メニューが表示されたら、Acronis True Image OEM (完全版) の項目にマウス ポインタを置いて F11 キーを押します。

2. コマンド ラインが表示されたら、「vga=ask」と入力して **[OK]** をクリックします。



3. ブート メニューで Acronis True Image OEM (完全版) を選択してレスキュー メディアからの起動を続けます。使用できるビデオ モードを表示するには、該当するメッセージが表示されたら Enter キーを押します。
4. 使用しているモニタに最適なビデオ モードを選択し、その番号をコマンドラインに入力します。たとえば、338 と入力すると 1600x1200x16 のビデオ モードが選択されます(下図参照)。

```
Starting Acronis True Image...
Press <ENTER> to see video modes available, <SPACE> to continue, or wait 30 sec
Mode: Resolution: Type: Mode: Resolution: Type: Mode: Resolution: Type:
0 F00 80x25 UGA 1 F01 80x50 UGA 2 F02 80x43 UGA
3 F03 80x28 UGA 4 F05 80x30 UGA 5 F06 80x34 UGA
6 F07 80x60 UGA 7 300 640x400x8 VESA 8 301 640x480x8 VESA
9 303 800x600x8 VESA a 305 1024x768x8 VESA b 307 1280x1024x8 VESA
c 30E 320x200x16 VESA d 311 640x480x16 VESA e 314 800x600x16 VESA
f 317 1024x768x16 VESA q 31a 1280x1024x16 VESA h 320 320x200x8 VESA
i 321 320x400x8 VESA j 322 640x400x8 VESA k 323 640x480x8 VESA
l 324 800x600x8 VESA m 325 1024x768x8 VESA n 326 1152x864x8 VESA
o 327 1280x960x8 VESA m 325 1024x768x8 VESA n 326 1152x864x8 VESA
o 327 1280x960x8 VESA p 328 1280x1024x8 VESA q 329 1400x1050x8 VESA
r 32A 1600x1200x8 VESA s 32B 1792x1344x8 VESA t 32C 1856x1392x8 VESA
u 32D 1920x1440x8 VESA v 32E 320x200x16 VESA w 32F 320x400x16 VESA
x 330 640x400x16 VESA y 331 640x480x16 VESA z 332 800x600x16 VESA
333 1024x768x16 VESA 334 1152x864x16 VESA 335 1280x960x16 VESA
336 1280x1024x16 VESA 337 1400x1050x16 VESA 338 1600x1200x16 VESA
339 1792x1344x16 VESA 33A 1856x1392x16 VESA 33B 1920x1440x16 VESA
33C 320x200x32 VESA 33D 320x400x32 VESA 33E 640x400x32 VESA
33F 640x480x32 VESA 340 800x600x32 VESA 341 1024x768x32 VESA
342 1152x864x32 VESA 343 1280x960x32 VESA 344 1280x1024x32 VESA
345 1400x1050x32 VESA 346 1600x1200x32 VESA 347 1792x1344x32 VESA
348 1856x1392x32 VESA 349 1920x1440x32 VESA 34A 1366x768x8 VESA
34B 1366x768x16 VESA 34C 1366x768x32 VESA 34D 1680x1050x8 VESA
34E 1680x1050x16 VESA 34F 1680x1050x32 VESA 350 1920x1200x8 VESA
351 1920x1200x16 VESA 352 1920x1200x32 VESA 353 2048x1536x8 VESA
354 2048x1536x16 VESA 355 2048x1536x32 VESA 356 320x240x8 VESA
357 320x240x16 VESA 358 320x240x32 VESA 359 400x300x8 VESA
35A 400x300x16 VESA 35B 400x300x32 VESA 35C 512x384x8 VESA
35D 512x384x16 VESA 35E 512x384x32 VESA 35F 854x480x8 VESA
360 854x480x16 VESA 361 854x480x32 VESA 362 1280x720x8 VESA
363 1280x720x16 VESA 364 1280x720x32 VESA 365 1920x1080x8 VESA
366 1920x1080x16 VESA 367 1920x1080x32 VESA 368 1280x800x8 VESA
369 1280x800x16 VESA 36A 1280x800x32 VESA 36B 1440x900x8 VESA
36C 1440x900x16 VESA 36D 1440x900x32 VESA 36E 720x480x8 VESA
36F 720x480x16 VESA 370 720x480x32 VESA 371 720x576x8 VESA
372 720x576x16 VESA 373 720x576x32 VESA 374 800x480x8 VESA
375 800x480x16 VESA 376 800x480x32 VESA 377 1280x768x8 VESA
378 1280x768x16 VESA 379 1280x768x32 VESA
Enter a video mode or "scan" to scan for additional modes: _
```

3 桁の数字の前に 1 桁の数字や文字があるビデオ モードの場合、これらの数字や文字（この例では「v」）を入力して選択することもできます。

5. Acronis True Image OEM(完全版)が起動するまで待つてから、モニタ上の [ようこそ] 画面の表示状態が適していることを確認します。

他のビデオ モードをテストするには、Acronis True Image HD を閉じてから上記の手順を繰り返してください。

ハードウェアに最適なビデオ モードを見つけたら、そのビデオ モードを自動的に選択する新しいブータブル レスキュー メディアを作成できます。

これを行うには、Acronis メディア ビルダを起動して必要なメディア コンポーネントを選択し、[ブータブル メディアの起動パラメータ]のステップにおいてコマンド ラインに接頭辞「0x」を付加してモードの番号を入力（この例では「0x338」）してから、通常通りにメディアを作成します。

5.3 カスタム レスキュー CD の作成

リカバリ環境で一部のハードディスク ドライブやネットワーク アダプタが検出されない場合、通常はドライバに問題があります。Acronis のレスキュー CD には、市販されているすべてのハードウェアのドライバが収録されているわけではありません。このため、使用しているハードウェア ドライバのいくつかが標準的なレスキュー CD に含まれていない場合は、カスタム レスキュー メディアを作成する必要があります。

Acronis 製品で使用される Linux ベースのリカバリ環境では、新しいドライバを追加できません。このため、必要なすべてのドライバを含むカスタム レスキュー CD を作成するには、Acronis のカスタマー サービス部門に依頼する必要があります。

依頼する前に、システムに関する情報を収集します。[ヘルプ] メニューで **[システム レポートの生成]** を選択します。Acronis True Image HD によって必要な情報が自動的に収集され、収集された内容のリストがレポートに表示されます。レポートの作成プロセスでは、必要な情報の収集に使用される一部のコンポーネントがプログラムによってインストールされることがあります。レポートの作成が完了したら、**[名前を付けて保存]** をクリックし、希望するフォルダを選択するか、またはデフォルトの **[マイ ドキュメント]** フォルダに保存します。レポートは ZIP ファイルにアーカイブされます。このファイルを Acronis のカスタマー サービス部門に送信します。カスタマー サービス部門は、コンピュータのハードウェアと互換性があるカスタム レスキューメディアの ISO イメージを作成し、ISO ファイルをお客様に送信します。Nero など、ISO ファイルを処理できるプログラムを使用して、このファイルを CD や DVD に書き込みます。また、このレポートは問題の解決を Acronis のカスタマー サービス部門に問い合わせるときにも役立つことがあります。

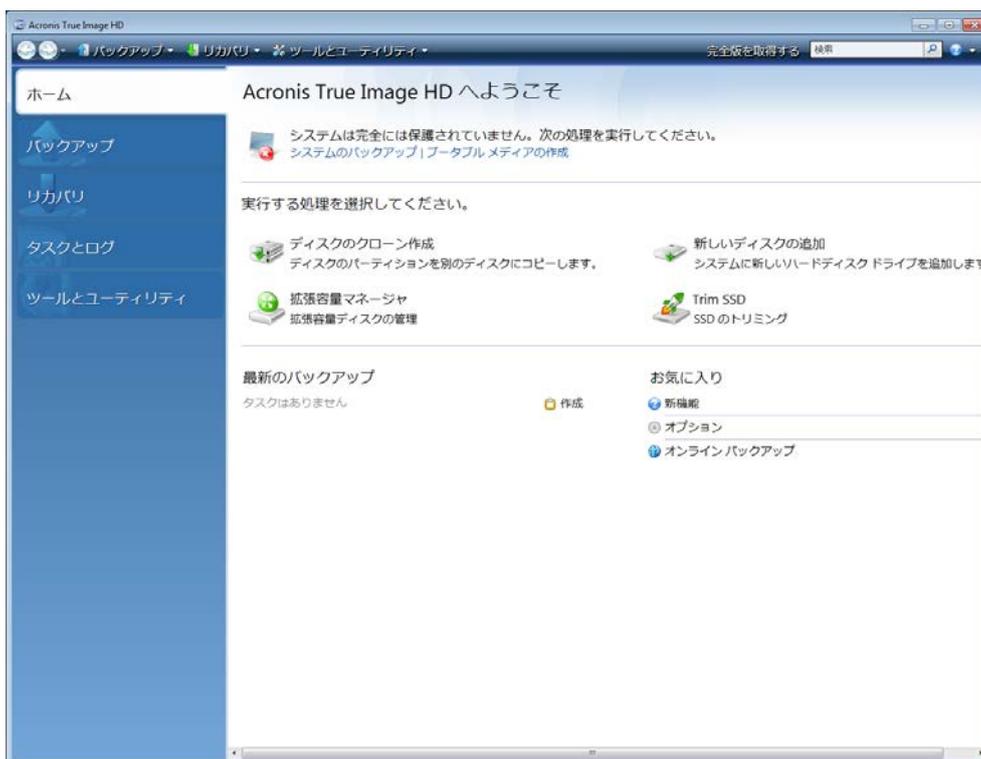
カスタム レスキュー CD を作成したら、ハードディスク ドライブやネットワーク アダプタがリカバリ環境で検出されるかどうかをテストします。

6 Acronis True Image HD について

6.1 プログラムのワークスペース

Acronis True Image HD を起動すると [ようこそ] 画面が表示されます。この画面では、バックアップとリカバリの機能に簡単にアクセスできるようなり、システムの保護に関する問題が示されます。

システムがバックアップされており、復元用のブータブル レスキュー メディアが作成されている場合に、システムは完全に保護されていると見なされます。これらのいずれかが行われていない場合は Acronis True Image HD に [システムのバックアップ]、[ブータブル レスキュー メディアの作成] のリンクが表示され、保護に関する問題を解決することができます。問題を解決すると、該当するリンクは表示されなくなります。



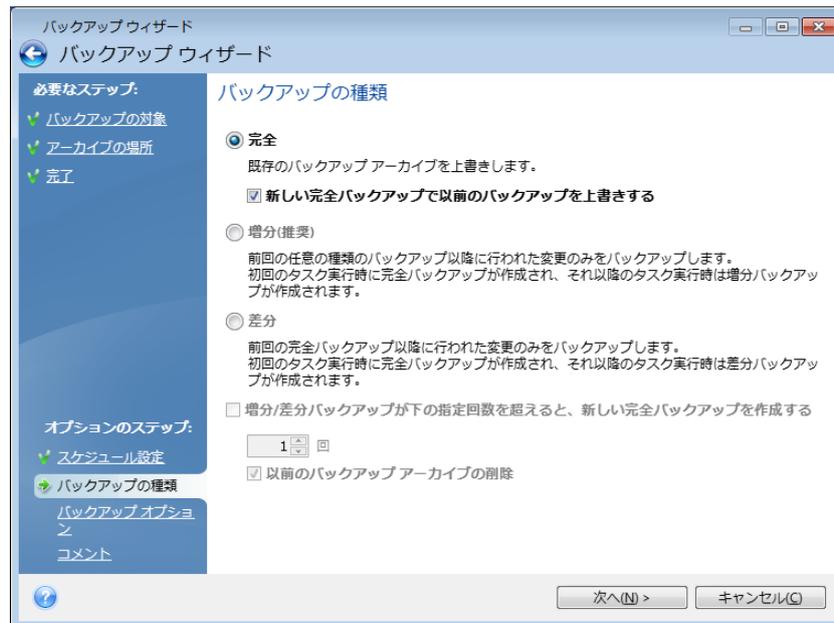
右側ペインの項目をクリックすると対応する画面が表示されます。この画面では、バックアップまたはリカバリのタスクをすぐに開始することも、詳細を選択することもできます。

右側ペインの【お気に入り】領域は最も頻繁に使用した機能の一覧を示し、これらの機能を再度使用できるようショートカットを提供します。【最新のバックアップ】領域は最近実行したバックアップの一覧を示し、クリックするだけでバックアップ アーカイブを更新できます。

画面の左側にあるサイドバーを使用すると、Acronis True Image HD の機能に容易にアクセスできます。サイドバー上の項目を選択すると、対応する機能にアクセスできる画面が表示されます。

Acronis True Image HD では、ウィザードを使用してさまざまな処理を案内に従って実行できるようになっています。メイン プログラム ウィンドウと同様、ウィザードにも、処理を実行するのに必要なすべての手順

(必須およびオプション) を示すサイドバーがあります。たとえば、次のバックアップ ウィザードのスクリーンショットを確認してください。



完了したステップには緑のチェックマークが付きます。緑の矢印は現在のステップを示します。必要なステップをすべて完了した後の【完了】のステップでは、[概要] 画面が表示されます。オプションのステップを省略する場合は、実行される処理の概要でデフォルトの設定が適切であることを確認してから、【実行】をクリックしてタスクを開始してください。省略しない場合は【バックアップ オプション】をクリックし、現在のタスクのデフォルト設定を変更できるオプションのステップに進みます。

タスク トレイのアイコン

ほとんどの処理の実行中には、特別なインジケータ アイコンが Windows のタスク トレイ（ステータス バーの右側にある時計が配置されている箇所）に表示されます。アイコンの上にマウスを置くと、処理の進行状況または状態を示すツールのヒントが表示されます。アイコンを右クリックすると、ショートカット メニューが開き、処理の状態を変更したり必要に応じて処理をキャンセルすることができます。このアイコンは、メイン プログラム ウィンドウを開いていなくても表示されます。

6.2 メイン画面

Acronis True Image HD の操作で使用する他のいくつかの画面について説明します。

もう 1 つの重要な画面に進むには、サイドバーで **[リカバリする]** をクリックします。



この **[データ リカバリとバックアップの管理]** 画面にはバックアップ アーカイブの詳細が表示され、アーカイブの処理を迅速に行うことができます。アーカイブを右クリックして必要な処理を選択すると、バックアップ アーカイブのリカバリ、検証、移動、削除、および参照や、イメージ バックアップのマウントを行うことができます。これにより、該当するウィザードが起動するか、適切な動作が行われます。

さらに、この画面では、適切なリンクをクリックしてオンライン バックアップ ストレージからデータをリカバリすることもできます。

また、バックアップのコメントの編集、バックアップに関する詳細情報の確認、およびバックアップへの優先度の割り当てを行うこともできます。たとえば、重要なバックアップは優先度を高くします。バックアップの優先度は、**[優先度]** の項目にある「星」の数によって示されます（星の数が多いほど優先度が高いことを示します）。デフォルトの優先度の場合星の数が 3 つですが、この列の星をクリックして優先度を変更することができます。優先度を設定しておく、バックアップ アーカイブにある多くのファイルを調べて、重要なデータを削除しないように注意しながら、削除可能な古いバックアップを探す必要がなくなるため、大幅に時間を節約できます。

さらに、この画面にはバックアップ アーカイブとその内容の検索結果が表示されます。検索を実行するには、Acronis True Image HD ウィンドウの右上にある **[検索]** フィールドに検索文字列を入力し、虫眼鏡のアイコンをクリックします。詳細については、「検索 『95 ページ 』」を参照してください。

もう 1 つ有用な画面は、プログラムの処理のログを表示する画面です。カレンダーから過去の日付のログに簡単にアクセスできます。アクセスするには、目的の日付をクリックしてください。詳細については、「タスクとログの表示 『104ページ』」を参照してください。

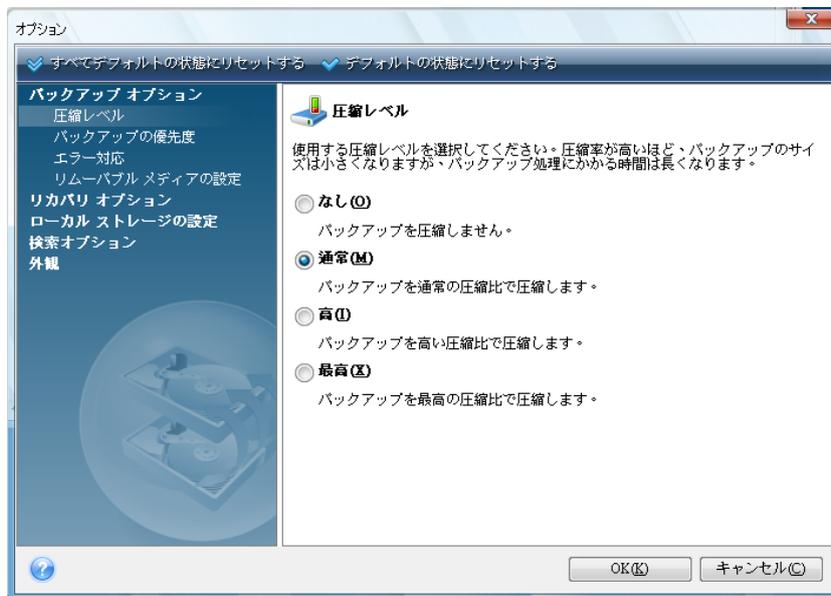


他の画面については、ここでは説明しません。画面の多くは直感的に操作できるようになっており、一部の画面については、このガイドの該当する章に説明があるからです。さらに、対応するボタンをクリックすると、コンテキスト ヘルプをいつでも表示できます。

また、メイン プログラム メニューを使用してほとんどの機能を選択できます。このメニューはツールバーでいつでも使用できます。

6.3 オプション画面

Acronis True Image HD には、外観およびプログラムのさまざまな機能に関するオプションがあります。デフォルトのオプションを表示または編集するには、メイン プログラム メニューで **[ツールとユーティリティ]**→**[オプション]** を選択します。



[バックアップ オプション] の項目では、すべてのバックアップ タスクにおいてデフォルトで使用する設定を指定できます。この設定はバックアップ要件に応じて変更できます。バックアップ オプションおよび設定の詳細については、「バックアップの微調整『61ページ』」をご参照ください。また、特定のバックアップ タスクを構成する際にもバックアップ オプションを変更できます。この場合は、オプションの変更はそのタスクにのみ適用されます。

同様に、**[リカバリ オプション]** の項目では、すべてのリカバリ タスクにおいてデフォルトで使用する設定を指定できます。リカバリのオプションおよび設定の詳細については、「デフォルトのリカバリ オプションの設定『79ページ』」を参照してください。バックアップ オプションと同様に、特定のリカバリ タスクについてリカバリ オプションを変更できます。

たとえば **[ローカル ストレージの設定]** 項目では、バックアップの処理に関する他の設定を指定できます。これらの設定はバックアップ処理速度に対し、ある程度顕著な影響を及ぼす場合があります。詳細については、「バックアップの微調整」『61ページ』を参照してください。

検索オプションにより、Windows Search または Google デスクトップ検索エンジンと統合して検索機能を向上できます。これらのいずれかの検索エンジンがインストールされている場合は、**[デスクトップ検索オプション]** ウィンドウで該当するボックスを選択して、それらのインデックス ファイルに tib ファイルを含めることができます。詳細については、「Windows Search と Google デスクトップの統合『96ページ』」を参照してください。

[外観] オプションでは、画面やダイアログなどで使用するフォントを選択してプログラムのユーザー インターフェイスの外観を変更できます。メニュー項目で使用するフォントも変更できます。実際のフォントの見た目を確認するには、**[...]** ボタンをクリックしてフォントを選択します。サンプルのテキストが表示されます。フォント

の使用する場合は **[OK]** をクリックします。使用しない場合は他のフォントを確認するか、または **[キャンセル]** をクリックします。

Acronis True Image HD インストール中に Acronis カスタマ エクスペリエンス プログラムへの参加を選択した場合、または **[プログラムに参加する]** ラジオ ボタンを選択した場合は、**[ご意見/ご質問]** オプションでこのプログラムをやめることができます。カスタマ エクスペリエンス プログラムの詳細については **[詳細]** のリンクをクリックしてください。

デフォルトのオプションを変更しても希望する設定にならない場合、または Acronis True Image HD のインストール時に設定されたデフォルトのオプション値を復元する場合は、ツールバーで **[すべてデフォルトの状態にリセットする]** をクリックします。一部のオプションのみをデフォルト値に設定する場合は、ツールバーで **[デフォルトの状態にリセットする]** をクリックします。

7 バックアップアーカイブの作成

7.1 最初のバックアップの準備

まず最初に、バックアップの保存場所を決定します。Acronis True Image HD では、さまざまなストレージ デバイスを使用できます。詳細については「サポートされるストレージ メディア」を参照してください。現在はハードディスクが安価になっているため、ほとんどの場合、外付けハード ドライブを購入してバックアップを保存する方法が最適です。データの安全性が向上するだけでなく、データを別の場所で保管することもできます（たとえば、オフィスのコンピュータのバックアップを自宅に保管、またはその逆）。また、多くのモデルはホットプラグ対応のため、必要なときに取り付けと取り外しができます。コンピュータの設定ポートと必要なデータ転送速度に応じて、USB、FireWire、eSATA など、さまざまなインターフェイスを選択できます。多くの場合は、USB の外付けハードディスク ドライブが最善の選択と言えるでしょう。Gigabit Ethernet ホーム ネットワークおよび専用のファイル サーバーまたは NAS（Buffalo TeraStation 1.0 TB NAS Gigabit Ethernet ホームサーバーなど）をお持ちの場合は、内蔵ドライブへの場合と同様に、ファイル サーバーや NAS にバックアップを保存することができます。DVD-R や DVD+R などの空の光学ディスクは大変安価であるため最も低価格なデータ バックアップ方法となりますが、DVD に直接バックアップを行う場合には特に、最も速度の遅いバックアップ方法ともなります。また、複数の DVD でバックアップを行った場合は、データ リカバリの際に何度もディスクを入れ替える必要があります。

ディスクが 4 枚以上になる場合はディスクの入れ替えが頻繁になるため、DVD 以外の方法でバックアップすることを強くお勧めします。

NAS などの外付けハード ドライブを使用する場合は、選択したバックアップ ストレージを Acronis True Image HD が検知するかどうか確認する必要があります。

外付けハード ドライブの一部は FAT32 に事前フォーマットされて販売されています。この場合、FAT32 のシステムでは 4 GB までのファイル サイズ制限があるため、このバックアップ用外付けハード ドライブを FAT32 から NTFS に変換することをお勧めします。このファイル サイズ制限により、サイズの大きいバックアップ ファイルは自動的に 4 GB ごとに分割されるため、データ リカバリ時に問題が発生する可能性が高くなります。

デスクトップ PC で USB ハード ドライブを使用する場合は、短いケーブルを使用して背面のコネクタにドライブを接続すると、バックアップ/リカバリ時のデータ転送エラーの可能性が低くなり、最も信頼性の高い運用が可能になります。

7.2 バックアップするデータの決定

オペレーティング システムとアプリケーションのサイズは以前に比べて大きくなっているため（たとえば、Windows Vista x64 ではハードディスクの空き領域が 15GB 必要）、オペレーティング システムとアプリケーションを元の CD や DVD から新しいハードディスクに再インストールするには、数時間が必要になります。さらに、インターネットからアプリケーションをダウンロードして購入する方法が一般的になってきています。ソフトウェアの販売業者から電子メールで送信されるアクティベーション キーやプロダクト キーなどの登録情報を紛失した場合、そのアプリケーションを使用する権利を復元する際に、問題が

生じる可能性があります。このため、システム ディスク全体のバックアップを作成すること（ディスク イメージの作成）は、障害や災害が発生した場合に費やされる貴重な時間を節約するだけでなく、その他の起こりうる問題に対する予防策となります。

システム ディスク全体のバックアップには、より多くのディスク領域が必要となりますが、システムのクラッシュやハードウェアの障害または災害が発生した場合に、短時間でシステムをリカバリすることができます（詳細については「ディスク/パーティション イメージ」『17ページ』を参照してください）。

ハードディスク全体のコピー作成には長時間を要すると考えられがちですが、Acronis True Image HD で用いられている独自の技術により、非常に迅速にイメージを作成することが可能です。

プライマリ ディスクの他に、通常使用するその他のパーティションのイメージも作成しておく必要があります。ドライブに複数のパーティションがある場合、ハードディスク ドライブに障害や災害が発生した場合はほとんど、そのドライブに含まれるすべてのパーティションにも障害や災害が発生するため、それらのパーティションをすべてイメージに含めておくことをお勧めします。

定期的にハードディスクのイメージを作成することを強くお勧めしますが、それも信頼性の高いバックアップ戦略の一部でしかありません。

7.3 代表的なバックアップ シナリオ

以下では、「典型的な」バックアップ シナリオをいくつか示して、よく使用されるバックアップ タスクについて説明します。バックアップ戦略に応じて、これらのバックアップが役に立つことがあります。

7.3.1 システム パーティションのバックアップ

システム パーティションをバックアップすることが推奨されるのは、C: ディスクのパーティションが 1 つだけのときですが、この場合は、パーティションのバックアップはシステム ディスクのバックアップと同じこととなります。システム パーティションをバックアップすることに意味がある別の例としては、システム パーティションにすべてのアプリケーションおよび重要なデータが格納されている場合や、システム ディスク全体をバックアップするのに十分な空き領域がない場合が挙げられます。システム パーティションのバックアップが最も役に立つのは、オペレーティング システムがウィルスやマルウェアによって損傷したときに、または Windows Update のインストール後などに、オペレーティング システムをリカバリしたい場合です。新しいハードディスク ドライブにリカバリすることも可能ですが、このことは、新しいハードディスクに複数のパーティションを作成しようとするとは簡単にはできない可能性があります。新しいハードディスク ドライブにリカバリするときは、システム ディスク全体をバックアップすることをお勧めします。特に、リカバリや診断が目的でコンピュータの製造元が作成した隠しパーティションがディスクに存在する場合です。さらに、システム ディスク バックアップのほうが、新しいディスクにリカバリするときは便利です。システム パーティションをバックアップすることが適切である別の例としては、多数のアプリケーションやゲームをテストしているときが挙げられます。ほとんどのアプリケーションは、アンインストールしても何らかの痕跡が残ります。Acronis True Image HD も例外ではありません。基本システム パーティションのバックアップを作成し、オペレーティング システムと主要アプリケーション（MS Office や Outlook など）だけを入れておくといよいでしょう。このようにすれば、新しいプログラムを使用した後で、

そのプログラムが気に入らない場合や、何らかの不具合が発生した場合も、基本システムの状態にいつでもリカバリすることができます。

7.3.2 システム ディスク全体のバックアップ

バックアップ ストレージ デバイスに十分な空き領域がある場合は、システム ディスク全体をバックアップすることをお勧めします。このようなバックアップを作成しておくことで、システムとアプリケーションの両方をリカバリできるので、これらを同じハードディスクドライブ上にリカバリする必要が生じたときや、ハードディスク ドライブが故障したために別のドライブ上にリカバリするときに利用できます。システム ディスクに複数のパーティションがある場合も、ディスク全体のバックアップから個々のパーティションをリカバリすることができます。

システム ディスクのバックアップは、障害発生時のリカバリにおいて最も重要であるため、システム ディスクと、バックアップ ストレージとして使用するハードディスクの両方のエラー チェックを実行することをお勧めします。エラーの有無を調べるには、Microsoft Windows 付属の Chkdsk ユーティリティを使用します。このユーティリティを利用するとエラーを修復でき、不良セクタを見つけることもできます。

システム ディスクのバックアップは、Windows 動作中に実行することも、リカバリ環境で実行することもできます。Windows 動作中にシステム ディスクのバックアップを作成する場合は、開始前に MS Outlook や DBMS プログラムなどのアプリケーションを終了することをお勧めします。

Acronis True Image HD では、システム パーティションをロックして、その間に「スナップショット」を作成するという方法が採用されていますが（「Acronis True Image HD の基本概念 『8ページ』」を参照）、Windows が動作していないときにシステム ディスクのバックアップを実行することもできます。

ブータブル レスキュー メディアからコンピュータを起動する場合の手順を次に示します。ここでは、起動後のリカバリ環境のハードディスク ドライブとその他のストレージ デバイスがすべて、Acronis True Image HD から認識可能であるものとします。「ブータブル レスキュー メディアのテスト 『30ページ』」を参照してください。

バックアップの保存場所として外付けドライブを使用する場合は、そのドライブが接続されて電源がオンになっていることを確認してください。これは、Acronis True Image HD レスキュー メディアから起動する前に行います。

1. BIOS でブート順序を設定して、ブータブル メディア デバイス (CD、DVD、または USB スティック) を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え 『145ページ』」を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して、[Acronis True Image OEM(完全版)]を選択します。
3. [ようこそ] 画面で [バックアップ] → [ディスクとパーティションのバックアップ]の順にクリックします。
4. システム ディスクをバックアップ元として選択します。該当するディスクのチェックボックスをオンにしてください(このディスクのすべてのパーティションが、隠しパーティションも含めて選択されます)。
5. このバックアップを保存するターゲット アーカイブを選択します。新しいバックアップを既存のアーカイブに追加することも、新しいアーカイブを作成することもできます。バックアップ ロケーションを選択し、作成するバックアップの名前を指定します。わかりやすいように、たとえば Disk1_full.tib のような名前を付けることをお勧めします。

6. バックアップ中に実行される処理の概要をよく読み、バックアップ タスクの設定に問題がなければ **【実行】** をクリックします。設定を変更する場合は、[概要] 画面の **【オプション】** をクリックします。
7. バックアップ方法を選択します。バックアップの種類の詳細な説明については、「完全バックアップ」『17ページ』を参照してください。リカバリ環境でバックアップを実行するときは、完全バックアップを作成するのが一般的ですが、必要に応じて別の方法を選択することもできます。
8. バックアップのオプションを設定します。リカバリ環境でバックアップを実行するときは、バックアップ タスクごとに手動でオプションを設定する必要があります。データ保護のためにバックアップを暗号化するかどうか、および圧縮レベルを選択できます(レベルを選択すると、バックアップ サイズの見積りが表示されます)。バックアップの作成直後にベリファイすることを選択できますが、ベリファイは後で実行することもできます。いつ実行するかにかかわらず、システム ディスク バックアップのベリファイはリカバリ環境で実行することをお勧めします。将来システム パーティションまたはディスクをリカバリするときは、リカバリ環境を使用するからです。
9. 必要に応じて、バックアップのコメントを入力します。また、後でコメントを追加することもできます。
10. **【実行】** をクリックすると、バックアップが開始します。

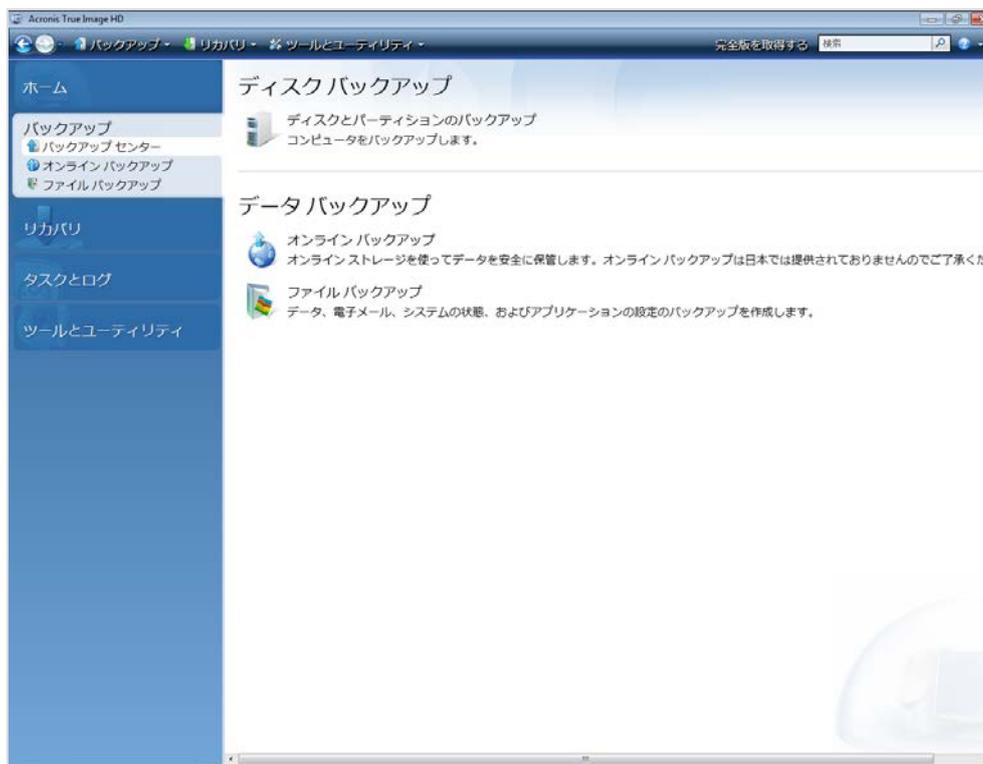
システム ディスクのバックアップからのリカバリを行う前にベリファイを実行することは、きわめて重要です。Acronis True Image HD による実際のリカバリが開始する前に、ディスク上の元のパーティションが削除されるためですが、バックアップ ファイルに問題があることがリカバリ中に判明したとしても、なすすべはありません。さらに、予備のハードディスクがある場合は、システム ディスクをそのディスクにリカバリできるかどうかを試してみるとよいでしょう。

7.3.3 データ パーティションまたはディスクのバックアップ

個人データ (MS Office ドキュメント、会計文書、写真、音楽、ビデオなど) は、オペレーティング システムと同様に保護が必要です。このようなデータは、オペレーティング システムやアプリケーションとは別に専用のパーティションまたはディスクに保存することが適切です。これにより、データ パーティションやディスク イメージのバックアップばかりでなくリカバリも迅速に行うことができます。データ ディスク バックアップを Windows で実行することをお勧めします。ほとんどの場合、ストレージ デバイスの Windows ドライバはリカバリ環境で使用される各 Linux ドライバよりも動作が適切で高速であるためです。また、データ ディスクおよびパーティションのリカバリは Windows で通常行われます。データ ディスク バックアップ タスクを Windows で作成しましょう。

バックアップの保存先として使用する外付けドライブを接続して、ドライブの電源がオンになっていることを確認します。これは、Acronis True Image HD を起動する前に完了しておく必要があります。

1. [ようこそ] 画面で [バックアップ] → [ディスクとパーティションのバックアップ]の順にクリックします。



2. [バックアップの対象] 画面でデータ パーティションまたはディスクのチェックボックスをオンにします。
3. 構成しているバックアップ タスクのターゲット アーカイブを選択します。新しいバックアップを既存のアーカイブに追加するか、新しいアーカイブを作成できます。バックアップ ロケーションを選択し、作成するバックアップの名前を指定します。Data_disk.tib など、わかりやすい名前を使用することをお勧めします。同じ場所(外付けドライブなど)に別のバックアップ アーカイブを保存するときは、新しいバックアップ アーカイブを作成する際に新しいフォルダを作成できます。これを実行するには、ツールバーの【新しいフォルダの作成】をクリックし、フォルダにわかりやすい名前を付けます。
4. バックアップ中に実行される処理の概要をよく読み、バックアップ タスクの設定に問題がなければ【実行】をクリックします。設定を変更する場合は、[概要] 画面の【オプション】をクリックします。
5. バックアップ方法を選択します。バックアップの種類の詳細な説明については、「完全バックアップ」『17ページ』を参照してください。繰り返しになりますが、バックアップの方法は必要なバックアップ戦略に応じて異なります。
6. 作成するバックアップ タスクのオプションを設定します。たとえば、バックアップの作成直後にベリファイすることを選択できますが、ベリファイは後で実行することもできます。
7. 必要に応じて、バックアップのコメントを入力します。また、後でコメントを追加することもできます。
8. バックアップ タスクの設定に問題がないことを確認したら、【実行】をクリックします。

検証をバックアップ タスクの設定に含めなかった場合は、後で手動で検証タスクを実行してバックアップを検証することを強く推奨します。バックアップを検証する習慣をつけてください。

7.3.4 ネットワーク共有へのバックアップ

Acronis True Image HD では、データをネットワーク共有にバックアップすることができます。この機能は、たとえば家庭内ネットワークに複数の PC があり、そのデータをファイル サーバーにバックアップしたいときに利用できます。各ユーザーのバックアップ方針に応じて、ファイルとフォルダだけをバックアップすることも、ディスク全体をバックアップすることもできます。もう 1 つの考慮すべき事項は、使用しているネットワークのデータ転送速度です。たとえば、ギガビット イーサネット ネットワークならば、帯域幅は十分に大きいので、バックアップ対象のデータをすべて転送することができます。しかし、Wi-Fi 接続を使用する場合は、バックアップ対象のデータが数百ギガバイトに及ぶようなときに、かなりの時間がかかることがあります。

ファイルとフォルダ、またはデータ パーティションのバックアップとリカバリは、Windows の動作中に実行できません。システム ディスクまたはパーティションをバックアップする場合は、バックアップに使用するネットワーク共有が Acronis True Image HD のスタンドアロン版から認識可能であることを確認してください。システムのリカバリは、リカバリ環境で実行されるからです。コンピュータをレスキュー メディアから起動した後で、バックアップ ウィザードまたはリカバリ ウィザードの画面でそのネットワーク共有を選択できることを確認してください。

ネットワーク経由でファイルのバックアップとリカバリができることを確認するために、最初に少数のファイルのバックアップとリカバリを実行してみることをお勧めします。また、ネットワーク共有が存在するドライブはマッピングしないことをお勧めします。UNC パスを指定するほうが、ほとんどの場合はネットワーク接続の確立が容易です。

たとえば、システム パーティションをバックアップとします。

1. Acronis True Image HD を起動します。[ようこそ] 画面で **[バックアップ]** → **[ディスクとパーティションのバックアップ]** の順にクリックします。
2. **[ソースの選択]** 画面に表示されているシステム パーティションのチェックボックスをオンにします。
3. ネットワーク上のコンピュータに接続してネットワーク共有にアクセスするには、ほとんどの場合、ネットワーク認証情報(ユーザー名とパスワード)の入力が必要です。認証情報を入力するには、**[NT 認証を使用する]** チェックボックスをオンにして、ユーザー名とパスワードを該当のフィールドに入力します。**[認証と接続をテストする]** ボタンをクリックすると、選択したネットワーク共有にこのコンピュータから接続できるかどうかをテストできます。テストの結果、エラー メッセージが表示された場合は、ネットワーク共有に対する認証情報を正しく入力したかどうかを確認し、正しくない場合は入力しなおします。**[NT 認証を使用する]** チェックボックスがオフの場合は、Windows へのログオンに使用された認証情報がネットワーク共有へのログオンに使用されます。情報の入力が完了したら、**[OK]** をクリックして次に進みます。構成しているバックアップ タスクのターゲット アーカイブを選択します。新しいバックアップを既存のアーカイブに追加するか、新しいアーカイブを作成できます。わかりやすいように、たとえば Disk_C.tib のような名前を付けることをお勧めします。
4. バックアップ中に実行される処理の概要をよく読み、バックアップ タスクの設定に問題がなければ **[実行]** をクリックします。設定を変更する場合は、[概要] 画面の **[オプション]** をクリックします。
5. バックアップ方法を選択します。バックアップの種類の詳細については、「完全バックアップ」『17ページ』を参照してください。繰り返しになりますが、バックアップの方法は必要なバックアップ戦略に応じて異なります。
6. 作成するバックアップ タスクのオプションを設定します。バックアップの作成直後にベリファイするを選択できますが、ベリファイは後で実行することもできます。
7. 必要に応じて、バックアップのコメントを入力します。また、後でコメントを追加することもできます。
8. バックアップ タスクの設定に問題がないことを確認したら、**[実行]** をクリックします。

8 オンラインバックアップ

オンライン バックアップは日本では提供されておりませんのでご了承ください。

Acronis オンライン バックアップを使用する主な理由は、データをサイト外で安全に保管できることです。ファイルは別の場所に保管されるので、コンピュータが盗難に遭ったり火災になったりしても、ファイルの安全が確保されます。そのため、盗難、火災、その他の自然災害によってデータが消失するリスクは、実質的に排除されます。基本的にオンライン バックアップはサイト外でデータを保存する方法であり、リモート ストレージにファイルとフォルダを定期的にバックアップします。その結果、破損、消失、または削除したファイルをコンピュータ上に安全にリカバリできます。

ただし、オンライン バックアップにも短所があります。インターネット接続に問題が発生した場合、しばらくデータにアクセスできなくなる可能性があります。また、オンライン バックアップからコンピュータを起動することはできないため、オンライン バックアップを補完するために、ローカル ハードディスクイメージをバックアップすることをお勧めします。

オンライン バックアップの最大の短所は処理速度です。高速なブロードバンド接続を使用しても、オンラインでのデータのバックアップは、ローカル ハード ドライブへのバックアップよりもかなり低速です。サイト外に保存するデータの量によっては、オンラインでの最初の完全バックアップは数時間かかる場合がありますが、それ以降のバックアップでは新しいファイルまたは変更されたファイルのみをバックアップするので、所要時間は大幅に短縮されます。

暗号化を使用する場合、ファイルは暗号化されてからインターネットを使って転送され、データは暗号化された形式で Acronis オンライン ストレージに保存されるので、個人情報の安全性を確保できます。

8.1 オンライン バックアップ アカウントの作成

Acronis オンライン ストレージへのバックアップを実行するには、オンライン バックアップ サービスのサブスクリプションが必要です。メイン プログラム メニューで **[バックアップ]** → **[オンライン バックアップ]** を選択し、**[オンライン バックアップ ログイン]** ウィンドウの **[オンライン バックアップ サービスを申し込む]** リンクをクリックします。これにより、ウェブブラウザが開き、アクロニスのメイン ウェブサイトが表示され、登録を行うことができます。

アクロニスのアカウントを既に所有している場合は、右側にある **[Log in to Your Account]** の下にそのアカウントの電子メール アドレスとパスワードを入力します。オンライン バックアップ サービスの申し込みを行うアカウント ページが表示されます。

アクロニスのアカウントを所有していない場合は、該当するフィールドに入力すると、アカウントが作成されます。姓、名、および電子メール アドレスを入力します。コンピュータの IP アドレスを基に選択された国名が表示されます。必要に応じて、別の国名を選択できます。

次に新しいアカウントのパスワードを入力し、該当するフィールドに確認のパスワードを再度入力します。アカウント登録に必要なすべての操作を実行したら、アカウントの作成確認電子メール メッセージが届くのを待ちます。

個人データを安全に維持するために、オンライン バックアップ用の強力なパスワードを選択して、悪意のある第三者に知られないように保護し、時々変更してください。

Acronis オンライン バックアップのアカウントを作成したら、アカウント ページにログインしてオンライン バックアップ サービスの申し込みを行い、サブスクリプション プランの詳細と有効期限が記載された電子メール メッセージが届くのを待ちます。以上で最初のオンライン バックアップを実行できます。

8.2 Acronis オンライン ストレージへのバックアップ

オンライン バックアップを実行するには、オンライン バックアップ サービス アカウントにログインします。サイドバーの **[バックアップ]** → **[オンライン バックアップ]** をクリックしてから、アカウント開設時に使用した電子メール アドレスとパスワードとを入力してください。次回以降のログイン時にパスワードの入力を省略するには、**[パスワードを記録する]** チェックボックスをオンにします。これらの設定を指定して **[ログイン]** をクリックします。

Acronis オンライン バックアップ サーバーに接続したら、オンライン ストレージへの接続に使用するコンピュータを選択します。オンライン バックアップ サービスへの初回ログイン時に、オンライン バックアップの作業に使用するコンピュータを登録します。**[新しいコンピュータ]** をクリックしてから、コンピュータ名を入力してください。

オンライン ストレージに保存されるデータを暗号化するには、暗号化に使用する暗号化キーを入力します。暗号化キーを入力すると、オンライン ストレージに格納されるすべてのデータの暗号化が自動的に有効になります。暗号化キーはパスワードに似ていますが、暗号化キーの用途は、暗号化されたデータへのアクセスのロックを解除することです。Acronis オンライン バックアップでは、業界標準の AES-256 暗号化アルゴリズムが使用されます。データは暗号化されてからインターネットを経由してオンライン ストレージに送信され、暗号化された状態で格納されます。コンピュータの暗号化キーを入力する必要があるのは、コンピュータの登録時の 1 回だけですが、このコンピュータからバックアップしたファイルを、別のコンピュータからオンライン ストレージに接続してリカバリする場合は、もう一度入力する必要があります。必要な設定をすべて指定したら、**[続行]** をクリックします。

これ以降、ログオフするまでの間は、このコンピュータからオンライン ストレージへの接続は **[オンライン バックアップ]** をクリックするだけで自動的に行われます。

コンピュータが既に登録されている場合は、登録済みコンピュータの一覧から選択して、**[続行]** をクリックします。デフォルトでは、ユーザーが使用しているコンピュータを登録するよう選択されています。

コンピュータがオンライン ストレージに接続すると、[オンライン ストレージ] 画面が開き、割り当てられたストレージの大きさが表示されます。



このコンピュータのバックアップを過去に実行したことがある場合は、オンライン ストレージ全体のうち、バックアップされたファイルおよびフォルダがどれだけ占有しているかが表示されます。この画面には、他のコンピュータからバックアップされたデータが占有している領域（ある場合）の大きさと、割り当てられたオンライン ストレージの空き領域の大きさも表示されます。

現在のコンピュータからのバックアップを初めて実行するとき（または、オンライン バックアップ対象として選択されているファイルやフォルダを変更する必要がある場合は）、[バックアップの対象] をクリックします。表示される [バックアップの対象] ウィンドウには、[バックアップ対象] と [除外] の 2 つのタブがあります。

[バックアップ対象] タブには、このコンピュータのファイルとフォルダのツリーが表示されます。ツリーの右の領域には、選択されているフォルダの内容が表示されます。このタブでは、バックアップの対象とするファイルやフォルダを個別に選択するだけでなく、データカテゴリを選択することもできます。カテゴリの詳細については、「バックアップするデータの選択 『57ページ』」を参照してください。さらに、[新しいカテゴリの追加] をクリックしてカスタム カテゴリを作成することもできます。

[除外] タブでは、隠しファイル/フォルダやシステム ファイル/フォルダをオンライン バックアップから除外するかどうかを指定します。また、指定した条件に一致するファイルを除外することもできます。オンライン ストレージにバックアップする場合は、データ転送レートや利用可能な領域の大きさに限りがあるため、不要なファイルを除外することは有益です。

バックアップ対象とする、または除外するファイルやフォルダの指定は、Windows エクスプローラから行うこともできます。ファイルやフォルダを選択して右クリックし、表示されたショートカットメニューの [ストレージ] > [オンライン バックアップから除外する]（または [オンライン バック

アップに含める]) を選択してください。このショートカットを利用できるのは、オンライン バックアップ サービスにログイン済みのときだけです。

オンライン ストレージへのバックアップ対象のファイルとフォルダ、およびバックアップから除外するファイルとフォルダを選択したら、**[OK]** を選択します。デフォルトでは**[更新されたオンライン バックアップ タスクを今すぐ実行]** チェックボックスがオンになっています。このオプションがオンの場合は、オンライン バックアップ タスクは即座に開始します。このチェックボックスがオフの場合は、オンライン バックアップ タスクは設定されたスケジュールに従って実行されます。

オンライン バックアップのスケジュールを設定するには、**[スケジュールの編集...]** リンクをクリックします。たとえば、バックアップを夜間に実行すれば、ユーザーの ウェブ閲覧に影響が及ぶことはありません。詳細については、「タスク スケジュールの作成『81ページ』」を参照してください。スケジュールの設定が終了したら、**[OK]** をクリックすると、**[スケジュールの編集...]** リンクの上にスケジュール情報が表示されます。

Acronis True Image HD のデフォルトでは、オンライン ストレージへのバックアップを毎日実行するようにスケジュールが設定され、バックアップ開始時間はランダムに選択されます。

オンライン ストレージにバックアップされたファイルやフォルダの更新は、バックアップスケジュールを作成しなくても容易に実行できます。更新するには、**[バックアップを今すぐ更新]** をクリックします。この方法が役に立つのは、オンライン ストレージにバックアップされているファイルに対する重要な変更が発生したために、直ちにバックアップしたい場合です。また、スケジュールされた前回のバックアップが失敗した場合は、このリンクが**[バックアップを今すぐ更新 (前回バックアップ失敗)]** に切り替わるので、失敗したバックアップ タスクを直ちに再実行することができます。前回のオンライン バックアップが何らかの理由で一時停止されている場合は、リンク テキストは**[バックアップを今すぐ更新 (前回バックアップ一時停止)]** となります。

8.3 オンライン ストレージからのデータのリカバリ

サイドバーで **[バックアップ]** → **[オンライン バックアップ]** をクリックし、アカウント開設時に使用した電子メール アドレスとパスワードを入力して、オンライン バックアップ アカウントにログオンします。プログラムが Acronis オンライン バックアップ サーバーに接続してから、オンライン ストレージに登録するコンピュータを選択します。デフォルトでは、ユーザーが使用しているコンピュータを登録するよう選択されています。**[続行]** ボタンをクリックします。**[オンライン ストレージ]** 画面が開きます。現在のコンピュータが選択されています。複数のコンピュータからデータをバックアップしている場合は、必要なファイルのリカバリ元コンピュータをこの画面で選択できます。他のコンピュータからバックアップしたデータは、参照およびリカバリしかできません。

他のコンピュータでデータを暗号化した場合、オンライン ストレージでデータにアクセスできるよう、コンピュータの暗号キーを入力するよう求められます。

1. **[オンライン ストレージ]** 画面の**[参照]** をクリックします。

Acronis Time Explorer が開き、**[オンライン ストレージ]** タブが選択された状態になっています。

2. このウィンドウでは、リカバリする必要があるファイルやフォルダのバックアップ元コンピュータの選択も行えます。左側ペインのオンラインストレージの下にあるディレクトリツリー上で、コンピュータの名前を選択します。
3. デフォルトでは最新のバックアップ後のオンラインストレージの状態が表示されており、ファイルやフォルダの最新バージョンをリカバリできるようになっています。以前のバージョンをリカバリする必要がある場合は、日付と時刻を選択して、ファイルやフォルダをその時点の状態にリカバリします。
4. 左側ペインで、リカバリするファイルが含まれるフォルダを選択します。右側のペインに、そのフォルダのファイルの一覧が表示されます。リカバリするファイルを選択します。複数のファイルを選択するときは、Windows エクスプローラの場合と同じように Ctrl キーと Shift キーを使用できます。選択を完了したら、ツールバーの [リカバリする] アイコンをクリックします。
5. Acronis True Image HD の [フォルダの参照] ダイアログが開きます。デフォルトで、ファイルがバックアップされた元の場所が選択されています。必要に応じて、別のフォルダを選択したり、[新しいフォルダの作成] ボタンをクリックしてファイルのリカバリ先のフォルダを新しく作成することができます。フォルダを選択した後、[OK] をクリックしてリカバリを続行します。

ファイルを元のフォルダにリカバリする場合、同じ名前のファイルが検出されると、ファイルの処理を選択するためのダイアログウィンドウが表示されます。ディスク上のファイルの [リカバリと置き換え]、[リカバリしない]（ディスク上のファイルを残す）、[リカバリするがファイルを両方とも残す]（リカバリされたファイルの名前は変更されます）のいずれかを選択できます。同じ名前のファイルすべてに対して選択内容を適用する場合は、[すべてのファイルに適用] チェックボックスをオンにします。

リカバリの時点でオペレーティングシステムによって使用またはロックされているディスク上のファイルに対して、[リカバリと置き換え] を行うことはできません。

ファイルの特定のバージョンをリカバリする必要がある場合は、ファイルを選択して右クリックし、ショートカットメニューで [バージョンの表示] を選択します。これにより、[ファイルバージョン] ウィンドウが開きます。バックアップ時刻に基づいて必要なバージョンを選択し、ツールバーの [リカバリする] をクリックします。また、選択したフォルダにバージョンをドラッグすることでもリカバリできます。

正しいバージョンを選択するには、関連するアプリケーションでバージョンを開き、ファイルの内容を表示します。右側ペインでファイルを選択すると、オンラインストレージに保存されている、そのファイルのバージョンすべてのバックアップ時刻が Time Explorer の最下行に表示されます。バックアップ時刻に基づいてバージョンを選択してから、右側ペインでファイルを右クリックしてショートカットメニューで **[開く]** を選択します。Acronis True Image HD によってファイルのそのバージョンが一時フォルダにリカバリされ、関連付けられているアプリケーションを使用してファイルが開かれます。

8.4 オンラインバックアップの管理

選択したバックアッププランによっては Acronis オンラインストレージの空き領域が限られているため、古いデータをクリーンアップしてオンラインストレージを管理する必要があります。クリーンアップはさまざまなやり方で実行できます。複数のコンピュータを登録している場合、最も抜本的な方法はオンラインストレージに登録されているコンピュータを削除することです。コンピュータを削除すると、そのコンピュータからバックアップされたすべてのデータが削除されます。このため、この操作は慎重に行う必要があります。コンピュータを削除するには、[オンラインストレージ] 画面でコンピュータの名前を選択し、[<コンピュータ名>の削除] をクリックし、確認ウィンドウで **[はい]** をクリックしま

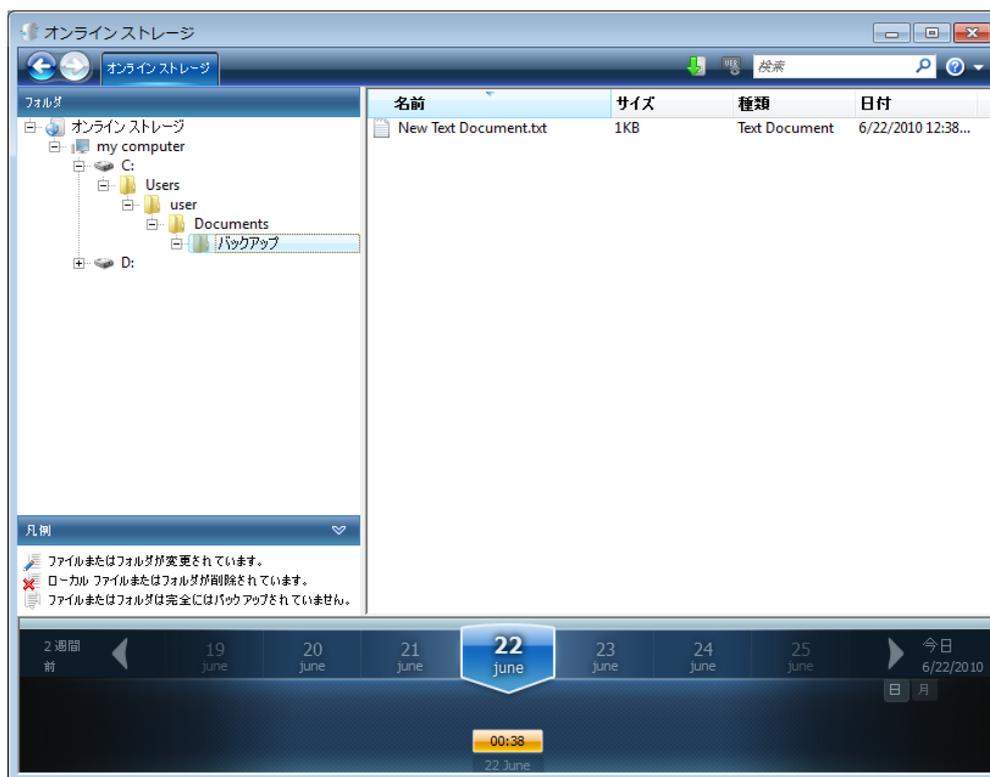
す。削除が完了したら、ツールバーの **[更新]** をクリックし、表示されているストレージの状態を更新します。

オンライン バックアップ オプションには、オンライン ストレージの自動クリーンアップもあります。指定された月数または日数を超えてオンライン ストレージに保存されているファイルを削除するように指定できます。また、オンライン ストレージに保存されるファイル バージョンの最大数を設定できます。 **[クリーンアップ オプションの変更...]** リンクの上に表示されるこれらのオプションのデフォルト設定をそのまま利用するか、必要な値を設定できます。上記のオプションを変更するには、リンクをクリックし、必要な値を設定します。

また、個々のファイルまたはバージョンの一部を削除して、Acronis オンライン ストレージを管理することもできます。

1. **[オンライン ストレージ]** 画面の **[参照]** をクリックします。

Acronis Time Explorer が開き、**[オンライン ストレージ]** タブが選択された状態になっています。



2. 左ペインのオンライン ストレージの下にあるディレクトリ ツリーで、管理する必要があるファイルのバックアップ元のコンピュータの名前を選択します。
3. 管理するファイルが含まれるフォルダを左側のペインで選択します。右側のペインに、そのフォルダのファイルの一覧が表示されます。
4. 特定のファイルのいくつかのバージョンを削除する場合は、ファイルを選択し、ツールバーの **[バージョンの表示]** をクリックします。これにより、**[ファイル バージョン]** ウィンドウが開きます。削除するバージョンを選択し、ツールバーの **[削除]** をクリックします。複数のバージョンを削除するには、Windows エクスプローラーの場合と同様に **Ctrl** キーと **Shift** キーを使用して、削除するバージョンを選択し、ツールバーの **[削除]** をクリックします。バージョンの削除を完了したら、**[OK]** をクリックします。ファイルのすべてのバージョンを削除するには、ツールバーの **[すべて削除]** をクリックします。

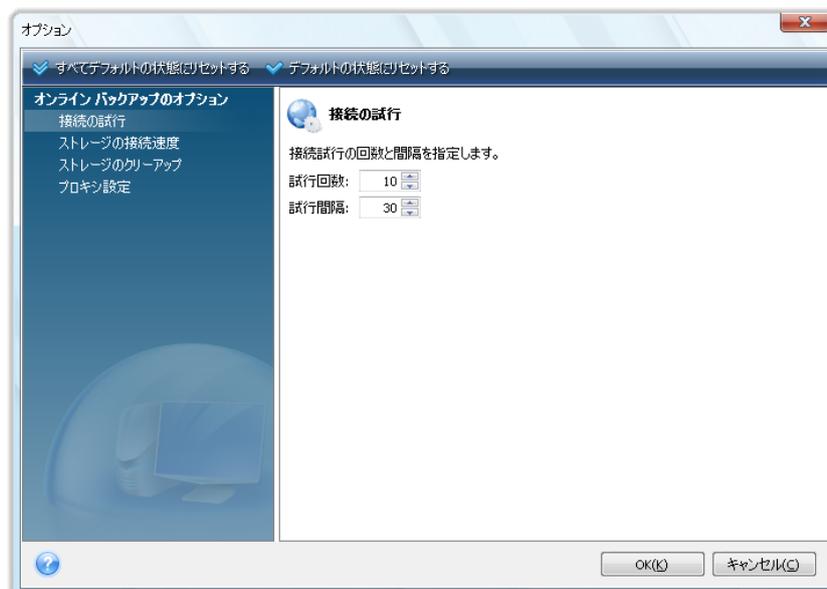
5. 1 つのファイルを削除するには、右側のペインで選択します。削除する複数のファイルを選択するには、Windows エクスプローラーの場合と同様に **Ctrl** キーと **Shift** キーを使用できます。選択を完了したら、選択した項目を右クリックし、ショートカット メニューの **[削除]** を選択します。
6. オンライン ストレージの管理を終了したら、[Acronis Time Explorer] ウィンドウを閉じます。
7. 解放された領域のサイズを確認するには、[ストレージ状態] 画面のツールバーの **[更新]** をクリックし、空き領域の新しい値を確認します。

8.5 オンライン バックアップ オプションの設定

これらのオプションを設定するには、Acronis オンライン バックアップにログオンし、オンライン バックアップ サービスで使用するコンピュータを選択します。これを行うには、[ストレージ状態] 画面の **[設定]** をクリックします。

8.5.1 接続の試行

このページでは、オンライン ストレージに接続するときに Acronis True Image HD で使用する設定を最適化することができます。



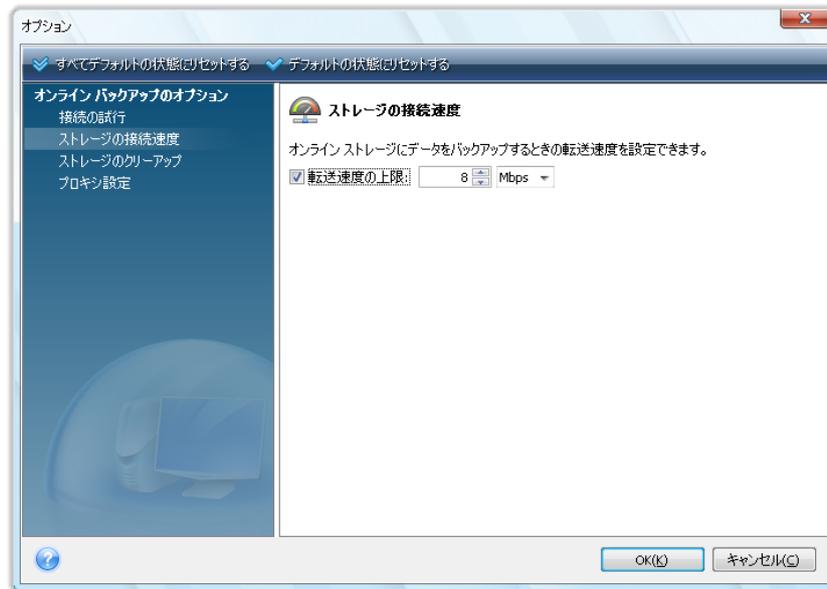
ここでは、初回の接続試行が失敗した場合の接続試行回数を指定できます（デフォルトは 10 です）。

また、接続試行間の間隔も指定できます（デフォルトは 30 秒です）。

8.5.2 ストレージの接続速度

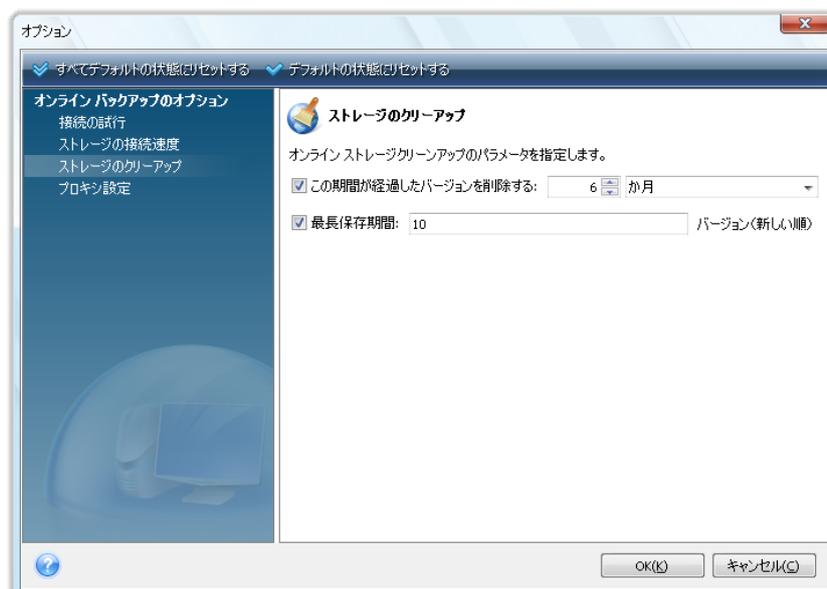
このオプションでは、オンライン ストレージへのデータ転送に割り当てられる帯域幅を調整できます。オンライン バックアップを実行中に、速度の低下を気にすることなく電子メールの送信やウェブの閲覧を実行できる接続速度を設定します。このためには、**[転送速度の上限:]** チェックボックスをオンにし、接続速度を設定します（デフォルトは 8 Mbps です）。

インターネット接続で使用可能な最大速度でデータをオンライン ストレージにバックアップするには、**[転送速度の上限:]** チェックボックスをオフにします。



8.5.3 ストレージのクリーンアップ

[ストレージのクリーンアップ] ページでは、オンライン ストレージがいっぱいにならないようオンライン ストレージから古いファイル バージョンを自動的にクリーンアップするオプションを設定できます。



次の操作を実行できます。

- 指定した期間よりも古いバージョンを削除します（デフォルトは 6 か月です）。
- オンライン ストレージに保存されるファイル バージョンの最大数を指定します。これにより、ファイルの変更内容に間違いがあることがわかった場合は、以前のファイル バージョンに戻ることができます。デフォルト

トでは、Acronis True Image HD では 10 個のファイル バージョンが保持されますが、別の数を指定することもできます。

8.5.4 プロキシ設定

プロキシ サーバーを使用してコンピュータをインターネットに接続している場合は、プロキシ サーバーの使用を有効にして設定を入力します。

Acronis オンライン バックアップでサポートされるのは、http および https のプロキシ サーバーのみです。

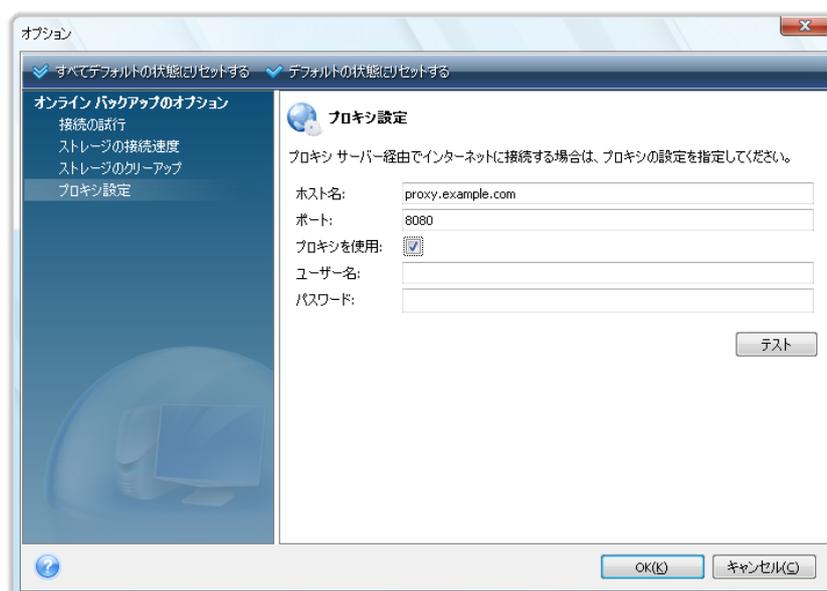
[ホスト名] ボックスに、proxy.example.com などのプロキシ サーバーの名前または 192.168.0.1 などの IP アドレスを入力します。

[ポート] ボックスに、8080 などのプロキシ サーバーのポートを入力します。

必要に応じてプロキシ サーバーに接続するのに使用する認証情報を **[ユーザー名]** ボックスおよび **[パスワード]** ボックスに入力します。

プロキシ サーバーへの接続をテストするには、**[テスト]** ボタンをクリックします。

使用するプロキシ サーバーの設定が不明な場合は、ネットワーク管理者またはインターネット サービス プロバイダに問い合わせてください。または、ブラウザの設定で指定されているプロキシ サーバー設定を調べてみてください。



8.6 オンラインで保存するデータの選択に関する推奨事項

オンライン バックアップの速度は比較的遅いため、バックアップするデータについてはよく検討する必要があります。最初に、火事やコンピュータの盗難などによって失われた場合にリカバリできない個人データのバックアップを検討してください。バックアップを実行する前に、データをバックアップするのに必要な時間を予測します。たとえば、フォルダのサイズが 10 GB で、アップロード速度が 1000 Kbps (1 時間あたり 0.5 ギガバイト弱) の場合、最初の完全バックアップを実行するのに 20 時間以上かかります。このため、イ

インターネット接続の速度によっては最重要ファイルのみをバックアップすることも検討してください。

9 その他のバックアップ機能

9.1 バックアップ ウィザード - 詳細情報

Acronis True Image HD の現在のバージョンでは、ディスク バックアップ タイプのみ選択できます。

ディスク バックアップ

-  **[ディスクとパーティションのバックアップ]** パラメータは、ディスク全体またはディスクのパーティションのイメージを作成する場合に選択します。 システム ディスク全体をバックアップする（ディスク イメージを作成する）には大量のディスク領域が必要ですが、深刻なデータの損傷やハードウェアの障害や災害が発生した場合にシステムを短時間でリカバリできるようになります。

BitLocker ドライブ暗号化機能によって保護されているドライブのデータをバックアップすることはお勧めしません。ほとんどの場合は、そのバックアップからのデータのリカバリが不可能であるからです。

9.1.1 バックアップするデータの選択

[バックアップ ウィザード] 画面が表示されたら、どのデータをバックアップするかを選択します。

ディスクとパーティションのバックアップ - バックアップするディスクまたはパーティションを選択します。ディスクやパーティションを自由に組み合わせる選択できます。バックアップ ウィザードの右ペインに、このコンピュータのハード ドライブが表示されます。ハード ドライブを選択すると、そのドライブのすべてのパーティションが選択されます。ハード ドライブに複数のパーティションが含まれている場合に、バックアップ対象のパーティションを個別に選択することもできます。その場合は、ドライブの行の右側にある下矢印をクリックします。表示されたパーティションの一覧から、パーティションを選択します。デフォルトでは、データを含むハードディスク内のセクタのみがコピーされます。ただし、完全なセクタ単位のバックアップを作成する方が便利な場合もあります。たとえば、誤ってファイルを削除してしまったので、削除を取り消そうとしているけれども、削除を取り消した結果ファイル システムに問題が発生する可能性もあるため、削除取り消しの前にディスク イメージを作成しておく場合です。セクタ単位バックアップを作成するには、**[セクタ単位でバックアップする（保存領域が多く必要）]** チェックボックスをオンにします。このモードでは、ハードディスクの使用済みセクタと未使用セクタの両方がコピーされるので、処理時間が長くなり、イメージ ファイルのサイズも大きくなるのが一般的です。さらに、ハードディスク全体をセクタ単位でバックアップするときに、ハードディスク上の未割り当て領域もバックアップするように設定するには、**[未割り当て領域をバックアップする]** を選択します。このオプションを選択すると、ハード ドライブ上のすべての物理セクタをバックアップすることができます。

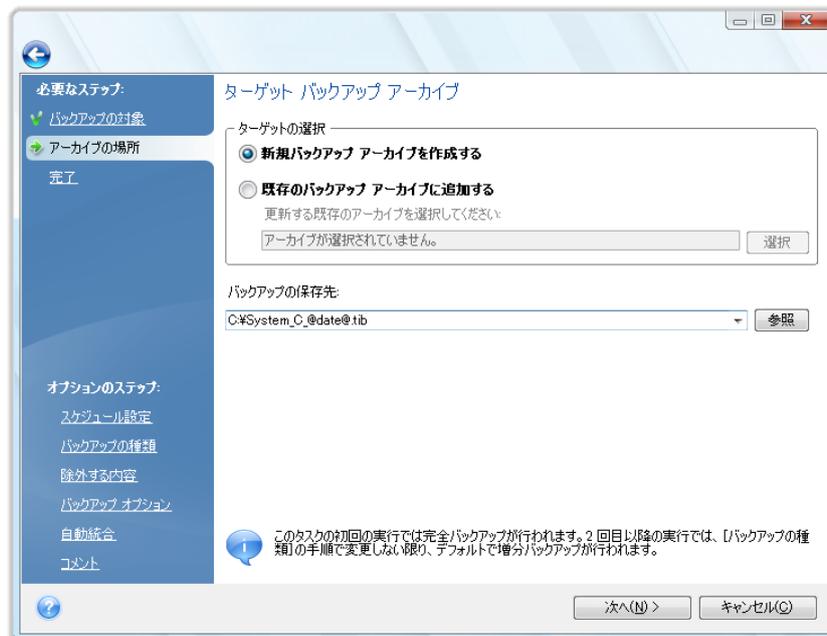
9.1.2 アーカイブの場所の選択

バックアップ アーカイブの場所を選択し、アーカイブ名を指定します。

新しいアーカイブを作成する、つまり完全バックアップを実行しようとしている場合は、**[新しいバックアップ アーカイブを作成する]** を選択して、その下の **[バックアップ ロケーション]** フィールドにアーカイブの場所へのパスと新しいアーカイブ ファイル名を入力するか、**[参照]** をクリックしてディレクトリ ツリー上でア

アーカイブ場所を選択し、**[ファイル名]** の行に新しいファイル名を入力するか、この行の右にあるボタンをクリックしてファイル名を自動的に生成します。

追加されるバックアップ ファイルの場所を変更する場合は、**[参照]** ボタンをクリックして、新しいバックアップの場所を指定します。変更しない場合は、既存のアーカイブと同じ場所のままにしておきます。



アーカイブを保存する場所が元のフォルダから遠ければ遠いほど、障害発生時のアーカイブの安全性は高まります。たとえば、アーカイブを別のハードディスクに保存すれば、プライマリ ディスクが損傷を受けた場合でもデータは保護されます。すべてのローカル ハード ディスクが損傷を受けた場合でも、ネットワーク ディスクまたはリムーバブル メディアに保存したデータは損傷を受けません。

アーカイブの場所を選択し、作成されるバックアップ アーカイブの名前を指定すると、バックアップ タスクの作成に必要なステップをすべて終えたことになります。このことは、**[完了]** ステップが表示されることからわかります。この画面の右ペインに、バックアップ タスクの要約が表示されます。残りのステップはいずれも必須ではなく、多くの場合は省略可能です。デフォルトのバックアップ オプションを使用するときは、**[バックアップ オプション]** 手順を省略します。

次に、バックアップ タスクの設定時に実行できるオプションのステップについて説明します。**[オプション]** ボタンをクリックしてください。

9.1.3 バックアップの種類

完全バックアップの作成を選択します。選択したデータをまだバックアップしたことがない場合、または完全アーカイブが古いため、新しいマスタ バックアップ ファイルを作成する場合は、完全バックアップを選択します。

[完全] を選択した場合は、新しい完全バックアップを作成するときに前の完全バックアップに対してどのような操作を実行するかを選択することもできます。デフォルトでは、前の完全バックアップは上書きされますが、**[新しい完全バックアップで以前のバックアップを上書きする]** チェックボックスをオフにすると、前の完全バックアップを残すことができます。

9.1.4 自動統合の設定

バックアップ アーカイブの自動統合は、アーカイブに全体的な制限を設定することにより有効になります。次のような制限項目があります。

- バックアップの最大数
- アーカイブ ファイルの最大保存期間
- アーカイブの最大サイズ

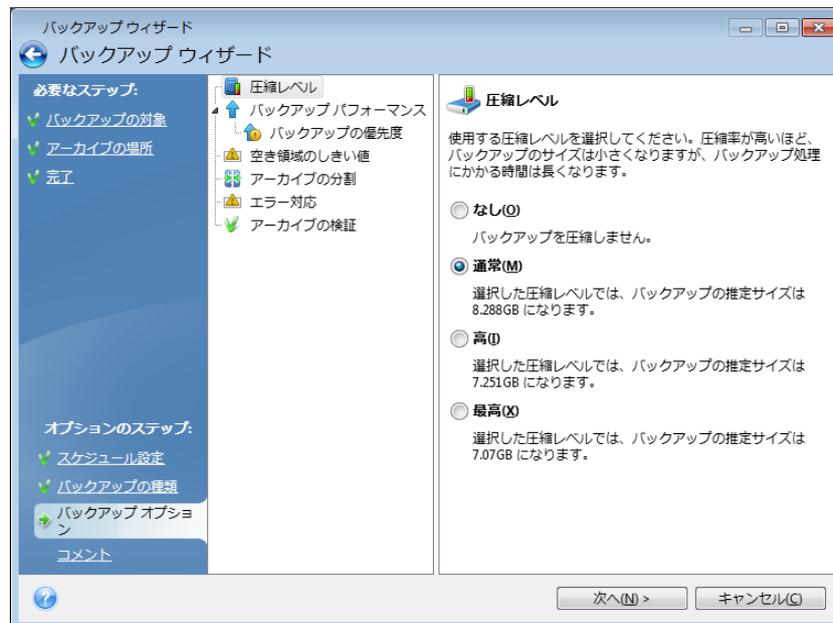
デフォルトでは、制限は設定されておらず、自動統合も実行されません。自動統合を有効にするには、少なくとも制限を 1 つ選択し、制限値をデフォルト値のままにするか、または必要に応じて変更する必要があります。

制限が設定されると、バックアップ作成後に、あらかじめ設定されているバックアップの最大サイズ (GB) を超えていないかなど、制限違反の有無が確認され、制限値を超えている場合は最も古いバックアップ群が統合されます。たとえば、アーカイブのバックアップ ファイルの保存容量を 50 GB に設定してあり、バックアップのデータ量が 55 GB に達した場合は制限違反となり、システムはユーザーが設定した規則に従って自動的に処理を行います。この処理により一時ファイルが作成されるため、ディスク領域が必要となります。また、制限に違反しなければ、プログラムは違反を検出できないという点に注意が必要です。したがって、ファイルを統合できるようにするには、アーカイブを保存する領域以外に、多少のディスク領域が必要となります。余分に必要になる領域の大きさは、アーカイブに含まれる最大のバックアップのサイズと同じです。

バックアップの数に制限を設定した場合、実際のバックアップの数は、最大バックアップ数を 1 つ超過することができます。これにより、プログラムが制限違反を検出し、統合を開始することができます。同様に、バックアップの保存期間が 30 日間に設定されている場合は、最も古いバックアップの保存期間が 31 日に達すると統合が開始されます。

9.1.5 バックアップ オプションの選択

バックアップのオプション（バックアップ ファイルの分割、圧縮レベルなど）を選択します。ここで設定したオプションが適用されるのは、現在のバックアップ タスクのみです。



現在の設定を将来のタスクでも使用できるように保存しておきたい場合は、デフォルトのバックアップ オプションおよびローカル ストレージの設定を編集することもできます。詳細については、「バックアップの調整」『61ページ』を参照してください。

9.1.6 コメントの指定

アーカイブについてのコメントを指定するとバックアップの識別に役立ち、間違ったデータをリカバリするのを防ぐことができます。ただし、コメントを必ず付ける必要はありません。バックアップ ファイルのサイズと作成日は自動的に付加されるため、これらの情報を入力する必要はありません。

また、バックアップを実行した後でコメントを指定または変更することができます。コメントを編集または追加するには、サイドバーで **[リカバリする]** をクリックして **[データ リカバリとバックアップの管理]** 画面を表示し、該当のバックアップを選択して右クリックし、ショートカット メニューの **[コメントの編集]** を選択します。

9.1.7 バックアップ処理

現在のバックアップ タスクの構成に必要なすべてのオプションのステップを完了してから **[実行]** をクリックすると、タスクの実行が開始されます。

別のウィンドウにタスクの進行状況が表示されます。 **[キャンセル]** をクリックすると、処理は中止されます。

[非表示] をクリックして進行状況のウィンドウを閉じることもできます。別の操作を開始したり、メイン プログラム ウィンドウを閉じたりしても、バックアップの作成は続行されます。メイン プログラム ウィンドウを閉じた場合、プログラムは引き続きバックグラウンドで実行されますが、バックアップ アーカイブが作成されると自動

的に終了されます。さらにいくつかのバックアップ処理を指示すると、これらの指示は待ち行列に入れられ、現在実行中の処理が終わると実行されます。

9.2 バックアップの微調整

特定のタスクに合わせて、バックアップを微調整することができます。このような微調整は、バックアップ タスクを開始する前にバックアップ オプションを設定することで行います。

バックアップ タスクの作成時に、デフォルトのバックアップ オプションを変更して、一時的なバックアップ オプションを設定することができます。今後実行するタスクで変更したオプションを使用する場合は、**[ツールとユーティリティ]** → **[オプション]** → **[バックアップ オプション]** を選択し、デフォルトのバックアップ オプションで適切な変更を行います。また、デフォルトのバックアップ オプションを Acronis True Image HD のインストール中に事前設定した値にいつでも復元することもできます。これを行うには、**[オプション]** ウィンドウの **[すべてデフォルトに戻す]** をクリックします。1 つのバックアップ オプションだけをリセットするには、左側のペインでオプションを選択し、**[この値をデフォルトに戻す]** をクリックします。

[すべてデフォルトに戻す] をクリックすると、バックアップやリカバリなどのすべてのデフォルトオプションは事前に設定された値にリセットされます。このため、このボタンを使用する場合は注意が必要です。

9.2.1 バックアップ オプション

圧縮レベル

デフォルトの設定は **[通常]** です。

次のような例を考えてみましょう。いくつかのファイルを USB スティックにバックアップする必要がありますが、ファイル サイズの合計が USB スティックの容量と同程度であるか、または超過しており、USB スティックにすべてのファイルを実際に入れたいと考えています。この場合、バックアップするファイルの圧縮レベルを **[最大]** にします。ただし、データ圧縮率はアーカイブに保存されるファイルの種類によって異なることを考慮に入れる必要があります。たとえば、.jpg、.pdf、.mp3 など、既に圧縮されたデータのファイルが含まれていれば、圧縮レベルが **[最高]** でもバックアップのサイズはそれほど小さくなりません。このようなファイルの場合、バックアップ処理にはかなり長い時間がかかり、バックアップのサイズもあまり縮小されないため、**[最高]** の圧縮レベルを選択しても意味がありません。特定のファイルの種類の圧縮率が不明な場合は、その種類のファイルをいくつかバックアップし、元のサイズとバックアップ アーカイブ ファイルのサイズを比較してください。その他のヒント：一般に、圧縮レベルとして **[通常]** を使用できますが、これはほとんどの場合、バックアップ ファイルのサイズとバックアップ処理の所要時間のバランスが最適になるためです。**[なし]** を選択した場合、データは圧縮されずにコピーされるため、バックアップ処理は最も速くなりますが、バックアップ ファイルのサイズは非常に大きくなります。

バックアップの優先度

デフォルトの設定は **[低]** です。

システム中で実行されているプロセスの優先度は、そのプロセスに割り当てられる CPU やシステム リソースの使用量を決定します。バックアップの優先度を下げることによって、他の CPU タスクが使用できるリソースが増えます。バックアップの優先度を上げると、実行中の他のプロセスのリソースがバックアップに回されるので、バックアップ プロセスが速くなります。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

エラー処理

バックアップの実行中にエラーが発生した場合は、バックアップ処理が中止されてメッセージが表示され、エラーへの処理に関するユーザーからの応答を待つ状態になります。エラーへの処理方法を設定しておくことで、バックアップ処理は中止されず、エラーに関する警告メッセージが発行され、設定した規則に従ってエラーが対処されて、処理は継続されます。

以下のエラー処理方法を設定することができます。

- **不良セクタを無視する**（デフォルトでは無効）：このオプションを使用すると、ハードディスクに不良セクタがある場合でもバックアップを実行できます。ほとんどのディスクには不良セクタはありませんが、ハードディスクを使い続けるうちに、不良セクタの発生する可能性は高くなります。ハードドライブから異音が聞こえる（たとえば、動作中にかなり大きなクリック音や摩擦音が発生する）場合は、ハードディスクが故障しかかっている可能性があります。ハードドライブが完全に故障してしまうと、重要なデータが失われるおそれがあるため、できる限り早くドライブをバックアップする必要があります。しかし、故障しかかっているハードドライブには既に不良セクタがあるかもしれません。【不良セクタを無視する】チェックボックスがオフの場合は、不良セクタで読み取りまたは書き込みエラーが検出されると、バックアップタスクは中止されます。このチェックボックスをオンにすると、ハードディスク上に不良セクタが存在していてもバックアップは実行できるので、ハードドライブから可能な限り最大の情報を保存することができます。
- **処理中にメッセージやダイアログを表示しない（サイレントモード）**（デフォルトでは無効）：この設定を有効にすると、バックアップ処理中のエラーを無視することができます。この機能は、主に無人バックアップのために用意されたものです。無人バックアップの場合は、ユーザーがバックアッププロセスを制御することはできません。このモードでは、バックアップ中にエラーが発生しても、通知は一切表示されません。その代わりに、タスクの完了後に、【タスクとログ】<input type="checkbox"/>→<input type="checkbox"/>【ログ】を選択して、すべての処理の詳細なログを表示することができます。このオプションは、たとえば、バックアップタスクを夜間に実行するように設定する場合に使用します。
- **タイムアウトした場合は処理をキャンセルします**（デフォルトでは有効）：このオプションを有効にすると、何らかの理由（ネットワーク共有へのアクセスに必要なログインやパスワードを入力しなかった場合や新しい CD/DVD を挿入しなかった場合など）によりバックアップの作成プロセスを続行できない場合、バックアップの作成は強制的に中断されます。デフォルトの設定では、要求された操作を実行することなく 10 分が経過すると、バックアップタスクがプログラムによってキャンセルされ、バックアップの作成に失敗します。このオプションを無効にすると、必要な操作をユーザーが実行しない限りバックアップ処理は続行されません。

リムーバブルメディアの設定

リムーバブルメディアにバックアップする際には、追加コンポーネントを書き込むことで、このメディアをブータブルにすることができます。このようにすると、別のブータブルディスクが不要になります。

ここでは次の設定を使用できます。

- **Acronis True Image OEM（完全版）** - USB、PC カード（旧 PCMCIA）、SCSI インターフェイスおよびそれらを介して接続されるストレージデバイスをサポートしています。このため完全版を使用することをお勧めします。
- **Acronis システム レポート**：システムレポートが生成されます。このレポートは、プログラムの問題が発生したときに、システムに関する情報を集めるのに利用できます。レポート生成は、ブータブルメディア

メディアから Acronis True Image HD を起動する前でも実行可能です。生成されたシステム レポートは、USB フラッシュ ドライブに保存できます。

- **リムーバブル メディアにバックアップ アーカイブを作成する際に最初のメディアの挿入を求める**

リムーバブル メディアにバックアップする際に、最初のメディアを挿入するように求めるメッセージを表示するかどうかを選択できます。デフォルトの設定では、メッセージボックスの [OK] がクリックされるまでプログラムの実行が停止するので、ユーザーがその場にいなければリムーバブル メディアへのバックアップはできません。

9.2.2 ローカル ストレージの設定

これらの設定もバックアップ処理に影響を及ぼします。たとえば、程度の差はありますが、バックアップの処理速度に顕著な影響を及ぼすことがあります。また、これらの値はローカル ストレージデバイスの物理的特性によって異なります。

空き領域のしきい値

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

バックアップ ストレージの空き領域が指定値より少なくなったときに通知を受けることができます。このような通知を有効にするには、**[ディスクの空き領域が不十分なとき]** チェックボックスをオンにし、空き領域のしきい値を下のフィールドに入力します。

このオプションをオンにすると、Acronis True Image HD はバックアップ ストレージの空き領域を監視します。バックアップ タスクを開始した後、選択したバックアップ アーカイブの場所の空き領域が既に指定値より少ないことが Acronis True Image HD で検出された場合、実際のバックアップ処理は開始されず、適切な通知メッセージが直ちに表示されます。このメッセージには、無視してバックアップを続行する、別の場所を参照する、またはタスクをキャンセルする、という 3 つの選択肢が表示されます。バックアップのキャンセルを選択した場合は、ストレージの一部を空けてタスクを再開するか、バックアップ アーカイブ用に別の場所を使用して新しいタスクを作成できます。**[参照]** を選択し、別のストレージを選択して **[OK]** をクリックすると、バックアップ ファイルはそのストレージに作成されます。

バックアップ タスクの実行中に空き領域が指定値より少なくなった場合、同じメッセージが表示され、同様に選択する必要があります。ただし、別の場所の参照を選択した場合は、バックアップ中の残りのデータを保存するファイルの名前を指定する必要があります (またはプログラムで割り当てられたデフォルトの名前を使用できます)。

Acronis True Image HD では、次のストレージデバイスの空き領域を監視できます。

- ローカル ハード ドライブ
- USB カードおよびドライブ
- ネットワーク共有 (SMB/NFS)

FTP サーバーと CD/DVD ドライブについては、このオプションを有効にすることはできません。

[エラー処理] 設定で [処理中にメッセージやダイアログを表示しない(サイレント モード)] チェックボックスがオンになっている場合、メッセージは表示されません。

アーカイブの分割

サイズの大きいバックアップを、複数のファイルに分割することができます。分割したファイルを集めて、元のバックアップに戻すこともできます。バックアップ ファイルは、リムーバブル メディアに書き込めるように分割することもできます。

たとえば、PC の完全バックアップを外付けハードディスクに保存しているけれども、安全のために、システムのバックアップ コピーを別の場所にも保存することを計画しているとします。しかし、別の外付けハードディスクが手元にあるわけではなく、USB スティックではバックアップのサイズが大きすぎて保存できません。Acronis True Image HD には、予備コピーを空の DVD-R/DVD+R ディスクに保存する機能があります(これらのディスクは、今日では非常に安価です)。サイズの大きいバックアップを複数のファイルに分割ことができ、分割したファイルを集めて、元のバックアップに戻すこともできます。PC のハードディスク上に十分な空き領域がある場合は、指定のサイズの複数のファイルから構成されるバックアップ アーカイブをハードディスク上に作成してから、そのアーカイブを後で DVD+R ディスクに書き込むことができます。分割ファイルのサイズを指定するには、**[アーカイブの分割]** で **[固定サイズ]** モードを選択し、ファイル サイズを入力するか、ドロップダウン リストから選択します。

バックアップを保存するのに十分な空き領域がハードディスク上にない場合は、**[自動]** を選択すると、バックアップは直接 DVD-R ディスクに作成されます。Acronis True Image HD によってバックアップ アーカイブが自動的に分割され、1 枚のディスクへの書き込みが終了すると、次のディスクの挿入を指示するメッセージが表示されます。

バックアップを直接 CD-R/RW または DVD+R/RW に作成する場合は、ハードディスクに作成する場合に比べて所要時間が大幅に増える可能性があります。

[アーカイブのベリファイ]

作成後にバックアップ アーカイブを検証する

デフォルトの設定は、**[無効]** です。

この設定を有効にすると、バックアップの直後に、作成または追加したアーカイブの整合性が検証されます。重大なデータのバックアップ、またはディスク/パーティションのバックアップを設定するときには、バックアップを使用して消失したデータを確実にリカバリできるよう、このオプションを有効にすることを強くお勧めします。

10 Acronis True Image HD によるデータ リカバリ

データ バックアップの最終的な目的は、ハードウェア障害、火災、盗難、または単純に誤って重要なファイルを削除したなどが原因で元のデータが失われたときに、バックアップされたデータをリカバリすることです。

新しいアプリケーション、ドライバ、または Windows 更新プログラムのインストール後の不安定な動作から、システム ハード ドライブの完全な障害、または古いハード ドライブを容量の大きい新しいハード ドライブに交換する場合など、システムのリカバリにはさまざまな理由があります。また、システム パーティションのみ、または隠しパーティションを含め、複数のパーティションから構成されるシステム ディスク全体のリカバリが必要な場合があります。Acronis True Image HD はこれらすべてのケースに対応していますが、リカバリの詳細は異なることがあります。いずれの場合も、レスキュー メディアからの起動時にシステムのリカバリを実行することが適切です。

一方、データ ディスク/パーティションまたはファイルやフォルダのリカバリは通常 Windows で行われます。

10.1 システム パーティションのリカバリ

最初に、システム パーティションを元のハードディスク ドライブの元の場所にリカバリする簡単な場合について説明します。

システム パーティションのリカバリは最も重要な操作の 1 つなので、「正常であることがわかっている」以前の Windows の状態にリカバリする場合であっても、慎重な準備が必要です。リカバリの準備では、次のことを行う必要があります。

a) Acronis ブータブル レスキュー メディアを作成してテストします。メディアのテストの詳細については、「ブータブル レスキュー メディアのテスト 『30ページ』」をご参照ください。

b) レスキュー メディアから起動し、リカバリに使用するバックアップをベリファイします。パーティションのリカバリを開始すると、Acronis True Image HD によってリカバリ先のパーティション(この場合はシステム パーティション)が削除され、バックアップ ファイルが壊れているとシステムもアプリケーションも失われてしまうため、このベリファイを行うことは非常に重要です。さらに、ユーザーからの報告では、Windows では正常にベリファイされたバックアップ アーカイブが、リカバリ環境でのベリファイでは壊れていると示されたという現象が発生しています。これは、Acronis True Image HD で使用されるデバイス ドライバが Windows とリカバリ環境とで異なることが原因である可能性があります。

c) コンピュータで使用するディスクとパーティションに一意の名前を割り当てます。Windows とリカバリ環境ではドライブ文字の設定が異なる場合があるので、この指定を行うことをお勧めします。バックアップを作成する前にこれを行っていない場合は、ここで名前を割り当てることができます。名前は、バックアップを含むドライブおよびリカバリ先のシステム パーティションの検索に役立ちます。

d) 必要に応じて、Windows に付属する Microsoft の Chkdsk ユーティリティを使用して、システム ハード ドライブのエラーを検査します。

以上の手順を実行した後、リカバリに進みます。

リカバリに使用するバックアップ アーカイブが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。これは、Acronis True Image HD レスキュー メディアから起動する前に行います。

1. BIOS でブート順序を設定して、ブータブル メディア デバイス (CD、DVD、または USB スティック) を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え 『145 ページ』」を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して、[Acronis True Image OEM(完全版)]を選択します。
3. メイン メニューから **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** の順に選択し、リカバリに使用するシステム パーティション(またはシステム ディスク全体)のイメージ バックアップを選択します。バックアップを右クリックし、ショートカット メニューで **[リカバリする]** を選択します。

Windows とリカバリ環境でディスクのドライブ文字が異なる場合は、「Acronis True Image HD はアーカイブ「Name」のボリューム N を検出できません。」というメッセージが表示されます。ここで、Name は必要なイメージ バックアップ アーカイブの名前であり、ボリューム番号 (N) はアーカイブに含まれるバックアップの数によって異なる場合があります。**[参照]** をクリックしてアーカイブのパスを表示します。

4. **[リカバリの方法]** で **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。
5. **[リカバリ元]** 画面で、システム パーティション(通常は C)を選択します。システム パーティションの文字が異なる場合は、**[フラグ]** 列を使用してパーティションを選択します。**[プライマリ]** および **[アクティブ]** フラグが設定されている必要があります。システム パーティションを元のハード ドライブにリカバリしているので、[MBR とトラック 0] チェックボックスをオンにする必要はありません。
6. [パーティション C の設定](または、異なる場合は実際のシステム パーティションの文字)の手順で、デフォルトの設定を確認し、正しい場合は **[次へ]** をクリックします。正しくない場合は、設定を適切に変更した後、**[次へ]** をクリックします。
7. **[完了]** の画面で処理の概要を確認します。パーティションのサイズを変更していない場合は、**[パーティションの削除]** 項目と **[パーティションの復元]** 項目のサイズが一致している必要があります。バックアップを検証しない場合は **[実行]** をクリックし、検証する場合は **[オプション]** をクリックして [リカバリ前にバックアップ アーカイブを検証する] チェックボックスをオンにしてから **[実行]** をクリックします。
8. 処理が終了したら、Acronis True Image HD のスタンドアロン バージョンを終了し、レスキュー メディアを取り出して、リカバリされたシステム パーティションから起動します。必要な状態まで Windows をリカバリしたことを確認してから、元のブート順序をリカバリします。

10.2 容量の異なるハードディスクへのディスク バックアップのリカバリ

手動によるパーティションのサイズ変更を使用して、複数のパーティションを含むディスクのバックアップを容量の異なるハードディスクにリカバリする作業は、Acronis True Image HD での最も複雑な操作の 1 つです。隠された診断またはリカバリ パーティションを含むハードディスクをバックアップした場合は、特に複雑になります。

Windows や LINUX の一部などを使用したデュアル/マルチ ブートシステムでは、さらに難しい場合があります。多くの場合は、リカバリ試行前に、該当するフォーラムを調べる必要があります。そのため、このセクションではこのような場合については説明しません。

前のセクション「システム パーティションのリカバリ」で最初に説明されている準備を行ってください。正常なシステム ディスクを容量の大きい新しいディスクにアップグレードする場合、システム ディスク バックアップの作成前にシステム ディスクのパーティション

に一意の名前を割り当てていなければ、一意の名前を割り当ててから、ディスク全体の新規バックアップを作成することをお勧めします。これにより、レスキュー メディアから起動する際に、一致しない可能性のあるドライブ文字ではなく、名前によってパーティションを識別できるようになります。システム ディスクのドライブ障害からリカバリを行う場合は、ここで名前を割り当ててください。名前は、バックアップを含むドライブや復元先（新規）ドライブを見つける際に役立ちます。

パーティションのサイズ、ドライブの容量、製造者、およびモデル番号も、ドライブを正確に識別するのに役立ちます。

その他の推奨事項 - 新しいハードディスク ドライブはコンピュータ内の同じ場所に取り付け、元のドライブと同じケーブルおよびコネクタを使用することを強くお勧めします（元のドライブが IDE で新しいドライブが SATA である場合など、これが不可能な場合もあります）。どの場合でも、新しいドライブは使用するマシンに取り付けてください。

10.2.1 隠しパーティションを含まないディスクのリカバリ

まず、ディスク バックアップを使用して、隠しパーティションでない 2 つのパーティションを含むシステム ディスクをリカバリする場合について説明します。また、このシステム ディスクには、隠しパーティションでない可能性のあるリカバリ パーティションは含まれないものとします。ディスクにパーティションが 3 つある場合でも手順は同様です。ここでは、レスキュー メディアを使用するリカバリ方法を説明します（通常は、この方法によって最善のリカバリ結果が得られます）。

リカバリに使用するバックアップ アーカイブが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。これは、Acronis True Image HD レスキュー メディアから起動する前に行います。

1. BIOS でブート順序を設定して、ブータブル メディア デバイス (CD、DVD、または USB スティック) を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え [145 ページ]」を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して、[Acronis True Image OEM(完全版)]を選択します。
3. メイン メニューで **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** を選択してから、リカバリに使用するシステム ディスクのイメージ バックアップを選択します。

Windows とリカバリ環境でディスクのドライブ文字が異なる場合は、「Acronis True Image HD はアーカイブ「Name」のボリューム N を検出できません。」というメッセージが表示されます。ここで、Name は必要なイメージ バックアップ アーカイブの名前であり、ボリューム番号 (N) はアーカイブに含まれるバックアップの数によって異なる場合があります。**[参照]** をクリックしてアーカイブのパスを表示します。

4. **[リカバリの方法]** のステップで **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。
5. **[リカバリ元]** の手順で、リカバリするパーティションのチェックボックスをオンにします。**[MBR とトラック 0]** チェックボックスはオンにしないでください。オンにすると、ディスク全体がリカバリの対象となります。ディスク全体のリカバリでは、パーティションのサイズを手動で変更することはできません。必要に応じて、後から MBR をリカバリできます。パーティションを選択して **[次へ]** をクリックします。

パーティションを選択すると、該当する **[パーティションの設定...]** のステップが表示されます。これらの手順はパーティション ドライブ文字の昇順に基づいて決定され、順序を変更することはできません。この順序は、ハードディスク上のパーティションの物

理的順序とは異なる場合があります。ここでは（隠しパーティションやリカバリパーティションがない場合は）、Acronis True Image HD によって自動的に適切な Windows ロード ファイルが修正されるため、新しいディスク上のパーティションの物理的順序は特に意味を持ちません。

また、この手順により、リカバリしようとしているディスクに隠しパーティションが含まれているかどうかを確認できます。隠しパーティションにはドライブ文字は割り当てられておらず、[パーティションの設定...] で最初に処理されます。隠しパーティションが見つかった場合は、「隠しパーティションを含むディスクのリカバリ 『69ページ』」をご参照ください。

- パーティション設定のうち、場所、種類、およびサイズを指定できます。システムパーティションの文字はほとんどの場合は C であるため、通常は最初にシステムパーティションの設定を指定します。新しいディスクにリカバリするため、**[新しい場所]** をクリックします。割り当てられた名前または容量によって、リカバリ先ディスクを選択します。

ディスクに名前を割り当てておらず、リカバリ先ディスクの選択時に確信が持てない場合は、**[キャンセル]** をクリックしてリカバリを中断し、型番やインターフェイスなどからリカバリ先ディスクを識別します。メインメニューで **[ツールとユーティリティ]** **[新しいディスクの追加]** を選択すると、**[ディスクの選択]** 画面にこの情報が表示されます。この画面を使用してリカバリ先ディスクの番号を確認してから **[キャンセル]** をクリックし、再度リカバリウィザードを実行して上の手順を繰り返し、リカバリ先ディスクを選択します。

- [確定]** をクリックすると、[パーティションの設定...] 画面に戻ります。パーティションの種類を確認し、必要に応じて変更します。システムパーティションはアクティブに設定されたプライマリパーティションである必要があります。
- 次に、[パーティション サイズ] の領域で **[デフォルトを変更]** をクリックしてパーティションのサイズを指定します。デフォルトではパーティションは新しいディスク全体を占めています。マウスでパーティションをドラッグする、画面上の水平バー上でパーティションの境界をドラッグする、または適切なフィールド（[パーティション サイズ]、[前方の空き領域]、[後方の空き領域]）に対応する値を入力することにより、パーティションのサイズおよび場所を変更できます。パーティションのサイズを指定する場合は、サイズを変更した新しいパーティションの後ろに、2 番目のパーティションに必要な未割り当て（空き）領域を残しておく必要があります。通常、パーティションの前の空き領域は 0 です。計画したとおりにパーティション サイズを指定したら、**[確定]** をクリックしてから **[次へ]** をクリックします。
- 次に、2 番目のパーティションの設定を指定します。**[新しい場所]** をクリックしてから、2 番目のパーティションを配置するディスク上の未割り当て領域を選択します。**[確定]** をクリックしてパーティションの種類を確認（必要に応じて変更）してから、パーティションのサイズを指定します。パーティションのサイズは、デフォルトでは元のサイズと同じです。通常、最後のパーティションの後ろには空き領域はないため、未割り当て領域のすべてを 2 番目のパーティションに割り当て、**[確定]** をクリックしてから **[次へ]** をクリックします。
- 実行する処理の概要を確認します。バックアップを検証しない場合は **[実行]** をクリックし、検証する場合は **[オプション]** をクリックして [リカバリ前にバックアップアーカイブを検証する] チェックボックスをオンにしてから **[実行]** をクリックします。
- 処理が終わったら、スタンドアロンバージョンの Acronis True Image HD を終了します。

リカバリ後の初回起動時には、Windows は新しいドライブおよび古いドライブを認識しません。古いドライブを容量の大きい新しいドライブにアップグレードする場合は、初回起動前に古いドライブを取り外してください。取り外さない場合は Windows の起動で問題が発生する可能性があります。

古いドライブを取り外す必要がある場合はコンピュータの電源を切ってください。その必要がない場合は、レスキュー メディアを取り出してからコンピュータを再起動します。

Windows でコンピュータを起動します。新しいハードウェア(ハード ドライブ)が見つかったため Windows を再起動する必要があると表示される場合があります。システムが正常に動作することを確認してから、元の起動順序を復元します。

10.2.2 隠しパーティションを含むディスクのリカバリ

隠しパーティション(診断やシステム リカバリのために PC 製造元が作成したものなど)を含むシステムを容量の異なるハード ドライブにリカバリする場合、他にも考慮が必要な点があります。まず、正常にリカバリするには、古いドライブに存在するパーティションの物理的順序を新しいドライブでも維持し、また、隠しパーティションを同じ場所(通常はディスクの最初または末尾)に配置する必要があります。さらに、隠しパーティションのサイズを変更せずにリカバリすると、問題発生リスクを最小限に抑えることができます。

リカバリを実行する前に、システム ディスク上に存在するすべてのパーティションについてサイズと物理的順序を把握する必要があります。この情報を確認するには、Acronis True Image HD を起動し、メイン メニューで **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** を選択します。システム ディスクのバックアップを選択し、ツールバーの **[詳細]** をクリックします。Acronis True Image HD はバックアップされたディスクの情報を表示し、ディスクに含まれるすべてのパーティションおよびディスク上の物理的順序を図で示します。パーティションの表示が小さいために必要なすべての情報が表示されない場合は、パーティション上にマウス ポインタを置くと情報が表示されます。

情報を取得したら、ブータブル メディアを使用してシステム ディスクのリカバリを進めます。

リカバリに使用するバックアップ アーカイブが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続して電源を入れます。これは、Acronis レスキュー メディアから起動する前に行います。

1. BIOS でブート順序を設定して、ブータブル メディア デバイス(CD、DVD、または USB スティック)を最初のブート デバイスにします。「BIOS での起動順の並び替え [145 ページ]」を参照してください。
2. レスキュー メディアから起動して、**[Acronis True Image OEM(完全版)]**を選択します。
3. メイン メニューで **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** を選択してから、リカバリに使用するシステム ディスクのイメージ バックアップを選択します。

Windows とリカバリ環境でディスクのドライブ文字が異なる場合は、「Acronis True Image HD はアーカイブ「Name」のボリューム N を検出できません。」というメッセージが表示されます。ここで、Name は必要なイメージ バックアップ アーカイブの名前であり、ボリューム番号(N)はアーカイブに含まれるバックアップの数によって異なる場合があります。

4. **[リカバリの方法]** のステップで **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。
5. **[リカバリ元]** の手順で、リカバリするパーティションのチェックボックスをオンにします。**[MBR とトラック 0]** チェックボックスはオンにしないでください。オンにすると、ディスク全体がリカバリの対象となります。ディスク全体のリカバリでは、パーティションのサイズを手動で変更することはできません。MBR は後でリカバリします。パーティションを選択して **[次へ]** をクリックします。

パーティションを選択すると、該当する **[パーティションの設定...]** のステップが表示されます。これらの手順は、ドライブ文字のないパーティション(隠しパーティションに

は通常、ドライブ文字はありません)から開始し、ドライブ文字の昇順に進みます。この順序は変更できません。この順序は、ハードディスク上のパーティションの物理的順序とは異なる場合があります。

6. パーティション設定のうち、場所、種類、およびサイズを指定できます。隠しパーティションには通常はドライブ文字がないため、最初に隠しパーティションの設定を指定します。新しいディスクにリカバリするため、**[新しい場所]** をクリックします。割り当てられた名前または容量によって、リカバリ先ディスクを選択します。

ディスクに名前を割り当てておらず、リカバリ先ディスクの選択時に確信が持てない場合は、**[キャンセル]** をクリックしてリカバリを中断し、型番やインターフェイスなどからリカバリ先ディスクを識別します。メインメニューで **[ツールとユーティリティ]** **[>]** **[新しいディスクの追加]** を選択すると、**[ディスクの選択]** 画面にこの情報が表示されます。この画面を使用してリカバリ先ディスクの番号を確認してから **[キャンセル]** をクリックし、再度リカバリウィザードを実行して上の操作を繰り返し、リカバリ先ディスクを選択します。

7. **[確定]** をクリックすると、**[パーティションの設定...]** 画面に戻ります。パーティションの種類を確認し、必要に応じて変更します。
8. 次に、**[パーティション サイズ]** の領域で **[デフォルトを変更]** をクリックしてパーティションのサイズを指定します。デフォルトではパーティションは新しいディスク全体を占めています。隠しパーティションは、サイズを変更せずそのままにし、ディスク上の同じ場所(ディスク領域の最初または末尾)に配置する必要があります。マウスでパーティションをドラッグする、画面上の水平バー上でパーティションの境界をドラッグする、または適切なフィールド(**[パーティション サイズ]**、**[前方の空き領域]**、**[後方の空き領域]**)に対応する値を入力することにより、パーティションのサイズおよび場所を変更できます。パーティションを必要なサイズおよび場所に指定したら、**[確定]** をクリックしてから **[次へ]** をクリックします。

2 番目のパーティションの設定を指定します。このパーティションは、ここではシステムパーティションです。**[新しい場所]** をクリックしてから、このパーティションを配置するディスク上の未割り当て領域を選択します。**[確定]** をクリックしてパーティションの種類を確認(必要に応じて変更)します。システムパーティションはアクティブに設定されたプライマリパーティションである必要があります。パーティションのサイズを指定します。デフォルトでは元のサイズと同じです。通常、このパーティションの後ろには空き領域はないため、新しいディスク上の未割り当て領域のすべてを 2 番目のパーティションに割り当て、**[確定]** をクリックしてから **[次へ]** をクリックします。

9. 実行する処理の概要を確認します。バックアップを検証しない場合は **[実行]** をクリックし、検証する場合は **[オプション]** をクリックして **[リカバリ前にバックアップアーカイブを検証する]** チェックボックスをオンにしてから **[実行]** をクリックします。
10. 処理を終了したら MBR のリカバリに進みます。PC の製造元は、隠しパーティションへのアクセスを提供するために、一般的な Windows MBR やトラック 0 上のセクタを変更していることがあるため、MBR をリカバリする必要があります。
11. 同じバックアップをもう一度選択して右クリックし、ショートカットメニューで **[リカバリする]** を選択し、**[リカバリの方法]** の手順で **[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択してから、**[MBR とトラック 0]** チェックボックスをオンにします。
12. 次のステップで MBR のリカバリ先のディスクを選択し、**[次へ]** をクリックしてから **[実行]** をクリックします。MBR のリカバリが完了したら、Acronis True Image HD のスタンドアロンバージョンを終了します。

リカバリ後の初回起動時には、Windows は新しいドライブおよび古いドライブを認識しません。古いドライブを容量の大きい新しいドライブにアップグレードする場合は、初回起動前に古いドライブを取り外してください。取り外さない場合は Windows の起動で問題が発生する可能性があります。

古いドライブを取り外す必要がある場合はコンピュータの電源を切ってください。その必要がない場合は、レスキュー メディアを取り出してからコンピュータを再起動します。

Windows でコンピュータを起動します。新しいハードウェア(ハード ドライブ)が見つかったため Windows を再起動する必要があると表示される場合があります。システムが正常に動作することを確認してから、元の起動順序を復元します。

10.3 データ パーティションまたはディスクのリカバリ

既に説明したとおり、ハード ドライブが検出されない、またはドライブ文字が変更されるなどの問題を避けるために、データ パーティションおよびディスクは通常、Windows 上でリカバリします。リカバリ中に問題が発生するリスクをさらに低くするには、リカバリするバックアップ アーカイブをベリファイし、chkdsk を使用してリカバリ先のディスクをチェックします。

リカバリに使用するバックアップ アーカイブが外部ドライブに格納されている場合は、その外部ドライブを接続してドライブの電源が入っていることを確認します。この操作は、Acronis True Image HD を起動する前に完了しておきます。

1. Acronis True Image HD を起動します。
2. メイン メニューで **[リカバリ]** → **[ディスクとパーティションのリカバリ]** を選択してから、リカバリするデータ パーティションを含むイメージのバックアップを選択します。
3. **[リカバリの方法]** の手順で、**[ディスクまたはパーティション全体をリカバリする]** を選択します。
4. リカバリ対象はデータ パーティションなので、**[リカバリ元]** の手順で **[MBR とトラック 0 のリカバリ]** チェックボックスをオンにする必要はありません。リカバリするデータ パーティションのみを選択します。
5. 次の手順では、リカバリするパーティションの設定を選択できます。パーティションを元の場所にリカバリする場合は、設定の確認だけが必要です。パーティションを他の場所にリカバリする場合は、新しい場所を選択し、必要なパーティションの種類を設定します(またはデフォルト設定のままにします)。新しい場所が既存のパーティションである場合は、通常、ドライブ文字およびディスク容量は変更しません。データ用に新しいハード ドライブを設置した後などで、新しい場所が未割り当て領域である場合は、新しいパーティションのサイズを指定し、論理ディスク文字を割り当てます。
6. 概要を注意深く読みます。正しく設定したかどうかを確認してから、デフォルトのリカバリ オプションを変更する必要がある場合は **[実行]** をクリックします。変更する必要がある場合は **[オプション]** をクリックします。
7. **[オプション]** の手順では、リカバリ後にファイル システムを確認するなどのリカバリ オプションを設定できます。リカバリ オプションの詳細については、「デフォルトのリカバリ オプションの設定」をご参照ください。リカバリ オプションを設定してから、**[実行]** をクリックします。

データ ディスク全体のバックアップをリカバリする場合の手順は、**[リカバリ後にファイル システムをチェックする]** オプションがないなど、いくつかの小さな違いを除いてほぼ同じです。元のハード ドライブにリカバリする場合、リカバリ ウィザードの手順は単純です。バックアップしたディスクと同じ数のディスクをリカバリ先として選ぶことだけに注意してください。

データ ディスク バックアップを容量の異なるハード ドライブにリカバリする場合は、容量とジオメトリ(ヘッドの数およびトラックあたりのセクタ数)によって微妙な違いがあります。今までよりも容量の小さいハード ドライブにリカバリする場合は、パーティションのサイズも同じ割合で縮小されます。今までよりも容量の大きいハード

ドライブにリカバリする場合は、ハード ドライブのジオメトリが同じであれば、バックアップ ディスクはそのままリカバリされ、未割り当ての領域が残ります。ハード ドライブのジオメトリが異なると、パーティションのサイズは同じ割合で増加します。

10.4 ファイルとフォルダのリカバリ

使用したバックアップの種類に応じて、ファイルとフォルダをリカバリする方法はいくつかあります。ほとんどの場合は、Windows でファイルとフォルダをリカバリします。ディスク/パーティションのイメージからファイルやフォルダをリカバリすることもできます。イメージからファイル/フォルダをリカバリするには、イメージをマウント（「イメージのマウント 『91ページ』」を参照）し、Windows エクスプローラを使用して目的の場所にファイル/フォルダをコピーします。

ファイル/フォルダを 1 つだけ、または数ファイルのみをリカバリする必要がある場合は、必要なイメージ バックアップ アーカイブをダブルクリックします。次に、リカバリする必要があるファイルを含むフォルダを開いてファイルを選択し、右クリックして、ショートカット メニューで **【コピー】** を選択します。リカバリするファイルを保存するフォルダを開き、フォルダ内で右クリックして、ショートカット メニューで **【貼り付け】** を選択します。バックアップ アーカイブから保存先フォルダにファイルをドラッグすることもできます。

以下に、イメージからファイル/フォルダをリカバリするもう 1 つの方法を示します。「イメージ アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ 『72ページ』」をご参照ください。

10.4.1 イメージ アーカイブからのファイルとフォルダのリカバリ

イメージ アーカイブからは、ディスク/パーティション全体だけでなくファイル/フォルダもリカバリできます。

1. メインのプログラム メニューで**【リカバリ】** → **□□ディスクとパーティションのリカバリ】** を選択して**リカバリ ウィザード**を開始します。
2. アーカイブを選択します。

直接 FTP サーバーからデータをリカバリするには、アーカイブにあるファイルのサイズが 2 GB 以下である必要があります。2 GB を超えるサイズのファイルが含まれている可能性がある場合は、最初にアーカイブ全体を（最初の完全バックアップと共に）ローカル ハードディスクまたはネットワーク共有ドライブにコピーします。

3. **【リカバリの方法】** のステップで **【指定したファイルおよびフォルダをリカバリする】** を選択します。
4. 選択したファイル/フォルダのリカバリ先を選択します。元の場所にデータをリカバリすることができます。また、必要に応じて新しい場所を選択することもできます。

ブータブル レスキュー メディアを使ってファイルやフォルダをリカバリする際は、**【元の場所】** オプションは無効になっています。これは、スタンドアロン版の Acronis True Image HD で使用されるドライブ文字が Windows でのドライブの識別方法と異なることがあるためです。

新しい場所を選択すると、追加で必要な **【インストール先】** のステップが表示されます。新しい場所を選択した場合、デフォルトでは、元の絶対パスはリカバリせずに、選択した項目がリカバリされます。項目をフォルダ構造全体と共にリカバリすることもできます。この場合、**【絶対パスをリカバリする】** を選択します。

【インストール先】 の手順で、ディレクトリ ツリー上の新しい場所を選択します。**【新しいフォルダの作成】** をクリックして、ファイルのリカバリ先とする新しいフォルダを作成できます。

5. リカバリするファイルとフォルダを選択します。不要なフォルダはすべて選択解除してください。選択解除しない場合は余分なファイルを大量にリカバリすることになります。
6. 最初のオプションのステップでは、選択したバックアップの作成以降のデータ変更を保持できます。バックアップアーカイブにあるファイルと同じ名前のファイルがリカバリ先フォルダで見つかった場合の処理を選択します。デフォルトでは、既存のファイルとフォルダは上書きされますが、最近のファイルとフォルダは上書きしないよう保護されます。必要に応じて該当するチェックボックスをオンにすることで、システムや隠しファイル/フォルダを上書きしないよう保護できます。
また、このウィンドウで指定した条件に一致するファイルを上書きしないよう保護することもできます。
[既存のファイルを上書きする] チェックボックスをオフにすると、ハードディスク上のファイルはアーカイブのファイルよりも無条件に優先されます。
7. リカバリ処理のオプション（リカバリ処理の優先度、ファイルレベルのセキュリティ設定など）を選択します。このページで設定するオプションは、現在のリカバリタスクにのみ適用されます。
8. この時点までは、任意のステップを選択して設定を変更し、作成したタスクに修正を加えることができます。**[実行]** をクリックすると、タスクの実行が開始されます。
9. 別のウィンドウにタスクの進行状況が表示されます。**[キャンセル]** をクリックすると、処理は中止されます。中止した手順によってリカバリ先のフォルダが変更されている場合があります。

11 追加のカバリ情報

11.1 リカバリ ウィザード - 詳細情報

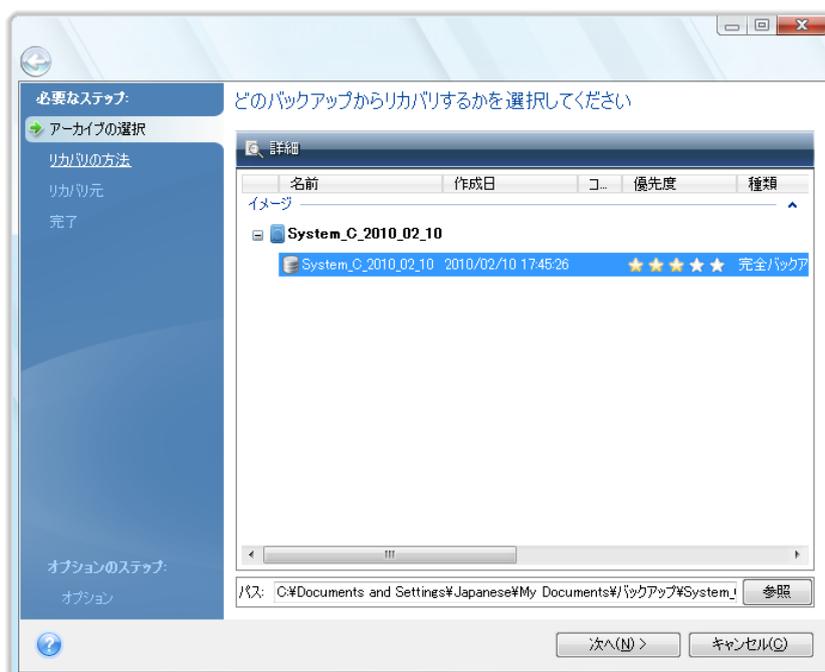
ここでは、リカバリ ウィザードに関して、イメージ バックアップからのパーティション/ディスクのリカバリについて説明します。 ファイルやフォルダをリカバリする必要がある場合は、「ファイルとフォルダのリカバリ」をご参照ください。

11.1.1 リカバリ ウィザードの開始

メインのプログラム メニューで [リカバリ] → [ディスクとパーティションのリカバリ] を選択してリカバリ ウィザードを開始します。

11.1.2 アーカイブの選択

1. アーカイブを選択します。 Acronis True Image HD のデータベースにはバックアップ アーカイブの場所の情報が格納されており、その情報を基にアーカイブの一覧が表示されます。 目的のバックアップが一覧に表示されていない場合（たとえば、そのバックアップがリカバリ環境で作成されたものである場合、または以前のバージョンの Acronis True Image HD によって作成されたものである場合）は、手動でバックアップを選択することができます。その場合は、[参照] をクリックし、ディレクトリ ツリーからバックアップの保存先を選択し、右ペインでバックアップを選択します。



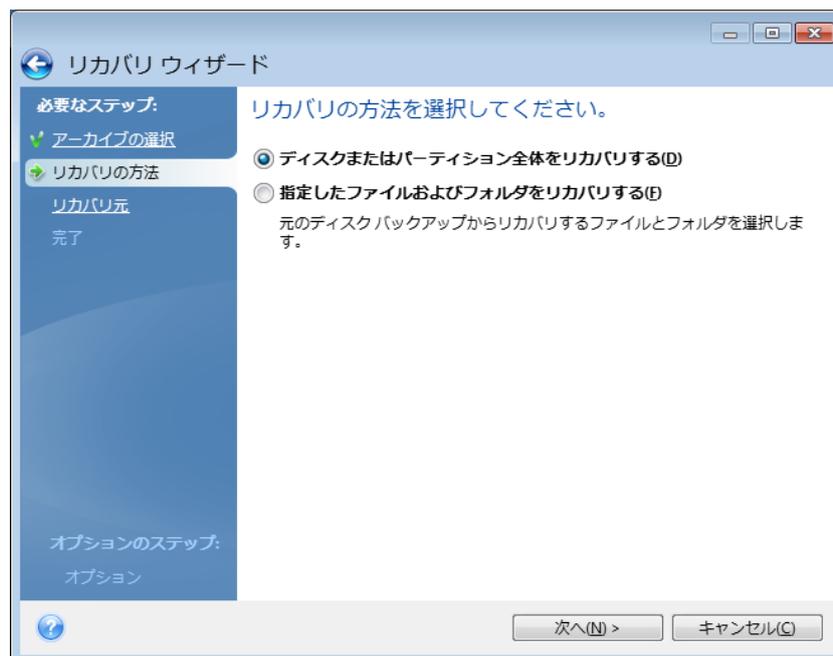
アーカイブが CD などのリムーバブル メディアに格納されている場合は、まず最後に作成した CD を挿入し、その後、リカバリ ウィザードの指示に従って新しいディスクから順に挿入します。

FTP サーバーから直接データをリカバリするには、アーカイブを構成するファイルのサイズが 2 GB 以下でなければなりません。2 GB を超えるサイズのファイルが含まれている可能性がある場合は、最初にアーカイブ全体を(最初の完全バックアップとともに)ローカル ハードディスクまたはネットワーク ドライブにコピーします。

Windows Vista または Windows 7 のシステム ディスクをバックアップからリカバリするときに、システム ディスクに復元ポイントが含まれている場合は、リカバリ後のシステム ディスクからコンピュータを起動してシステム復元ツールを開いたときに、復元ポイントの一部(またはすべて)が失われることがあります。

11.1.3 リカバリの方法の選択

リカバリの対象を選択します。



ディスクまたはパーティション全体をリカバリする

ディスクとパーティションのリカバリの種類を選択したら、必要に応じて以下のオプションを選択します。

指定したファイルおよびフォルダをリカバリする

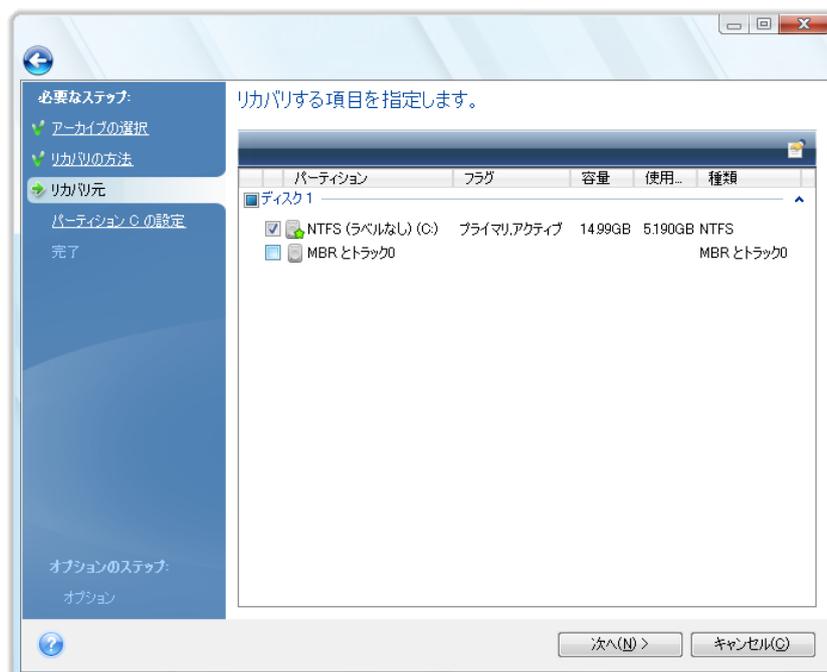
システムをリカバリせずに、破損したファイルの修復だけが目的の場合は、[指定したファイルおよびフォルダをリカバリする] を選択します。

ディスク/パーティション イメージからファイルをリカバリできるのは、ファイル システムが FAT または NTFS の場合だけです。

11.1.4 リカバリするディスク/パーティションの選択

選択したアーカイブ ファイルに、複数のパーティションや、場合によっては複数のディスクが含まれている可能性があります。どのディスク/パーティションをリカバリするかを選択してください。

1 回のセッションで複数のパーティションやディスクを 1 つずつリカバリすることができます。その場合は、最初のディスクを選択してそのパラメータを設定してから、リカバリ対象の他のパーティションやディスクのそれぞれについても、同様にパラメータを設定します。



ディスクおよびパーティション イメージには、マスタ ブート レコード (MBR) とトラック 0 のコピーが含まれています。これらは、このウィンドウ内の独立した 1 つの行に表示されます。MBR とトラック 0 をリカバリするかどうかを指定するには、該当するチェックボックスを選択します。MBR のリカバリは、システムを起動するために不可欠な場合に行います。

MBR のリカバリを選択すると、次のステップの画面の左下に [ディスク シグネチャをリカバリ] ボックスが表示されます。ディスク シグネチャのリカバリが必要になるのは、次のような理由からです。

1. Acronis True Image HD でスケジュールされたタスクが作成されるときに、ソース ハードディスクのシグネチャが使用されます。同じディスク シグネチャをリカバリする場合は、前に作成されたタスクを再作成または編集する必要はありません。
2. インストールされているアプリケーションによっては、使用許諾やその他の目的にディスク シグネチャを使用します。
3. Windows の復元ポイントを使用する場合は、ディスク シグネチャがリカバリされなければ復元ポイントは失われます。
4. また、ディスク シグネチャをリカバリすると、Windows Vista および Windows 7 の「以前のバージョン」機能で使用される VSS スナップショットをリカバリすることができます。

このチェックボックスがオフの場合は、リカバリされたドライブの新しいディスク シグネチャが Acronis True Image HD によって生成されます。これが必要になる可能性があるのは、イメージ バックアップを使用する目的が災害復旧ではなく、Windows Vista のハードディスク ドライブのクローンを別のドライブに作成する場合です。元のディスク シグネチャを復元してクローンを作成した後に、両方のドライブが接続された状態で Windows を起動すると、問題が発生します。Windows が起動されると、接続されているすべてのドライブのディスク シグネチャがローダによって検査され、2 つのディスク シグネチャが同一の場合は、2 番目のディスク (おそらくクローン ディスク) のシグネチャが変更されます。ク

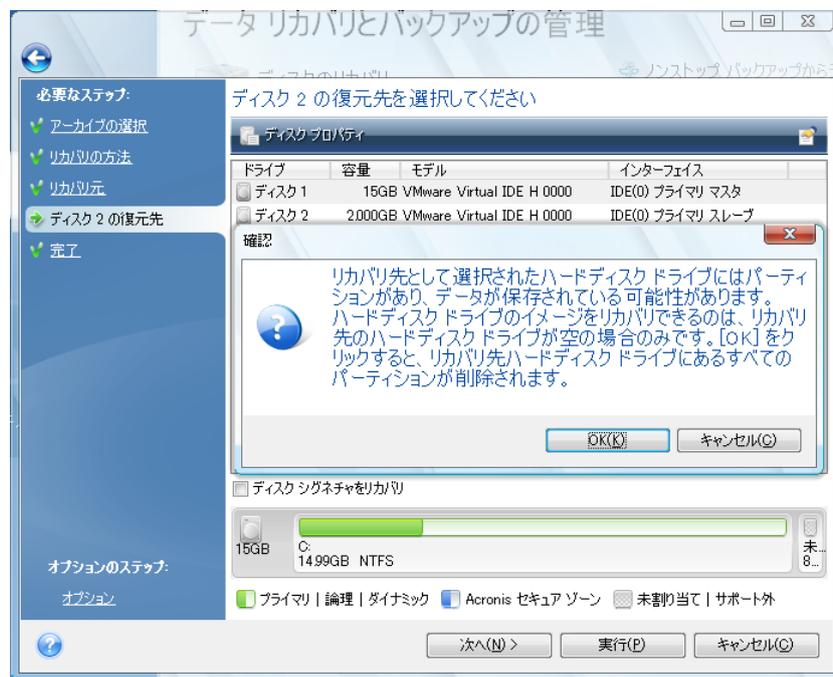
ローン ディスクのシグネチャが変更された後は、元のディスクなしでクローン ディスク単独でシステムを起動することはできなくなります。クローン ディスクのレジストリの MountedDevices 項目は元のディスクのシグネチャを参照していますが、元のディスクが接続されていないければ、そのシグネチャは取得できないからです。

11.1.5 リカバリ先ディスク/パーティションの選択

1. 選択したイメージのリカバリ先となるディスクまたはパーティションを選択します。データを元の場所にリカバリすることも、別のディスク/パーティションや未割り当ての領域にリカバリすることもできます。リカバリ先のパーティションの空き領域が、イメージデータの圧縮解除後のサイズ以上であることが必要です。

リカバリ先のパーティションに格納されているデータはすべてイメージデータで置き換えられるので、バックアップされていないデータの中に必要なデータが残っていないことを確認してください。

2. ディスク全体をリカバリするときは、リカバリ先ディスクが空かどうかを調べるためにディスク構造の分析が行われます。



リカバリ先ディスクにパーティションがある場合は、ディスクにパーティションが存在し必要なデータが含まれている可能性があることを知らせる確認ウィンドウが表示されます。

次のいずれかを選択する必要があります。

- **OK** - 既存のパーティションはすべて削除され、パーティションのデータはすべて失われます。
- **キャンセル** - 既存のパーティションは一切削除されず、リカバリ処理は続行されません。処理をキャンセルするか、別のディスクを選択する必要があります。

実際の変更やデータ消去はまだ行われなことに注意してください。この時点では、手順の確認のみが行われます。すべての変更は、ウィザードの【概要】ウィンドウの【実行】がクリックされるまでは行われません。

11.1.6 リカバリするパーティションの種類の変更

パーティションをリカバリする際に、パーティションの種類を変更できます。ただし、ほとんどの場合、その必要はありません。

変更が必要な場合について説明するために、オペレーティング システムとデータのいずれも、損傷したディスクの同じプライマリパーティションに保存されていたと考えてみましょう。

システムパーティションを新しい(または同じ)ディスクにリカバリし、オペレーティング システムをそこから起動する場合は、**[アクティブ]** を選択します。

Acronis True Image HD では、システムパーティションのリカバリ中に起動情報が自動的に修正され、システムパーティションは元のパーティション(またはディスク)にリカバリされない場合でも起動可能になります。

既にパーティションとオペレーティング システムが存在する別のハードディスクにシステムパーティションをリカバリすることは、一般的に、データだけを必要としている場合に行われます。この場合は、パーティションを**論理パーティション**としてリカバリすることで、データのみアクセスします。

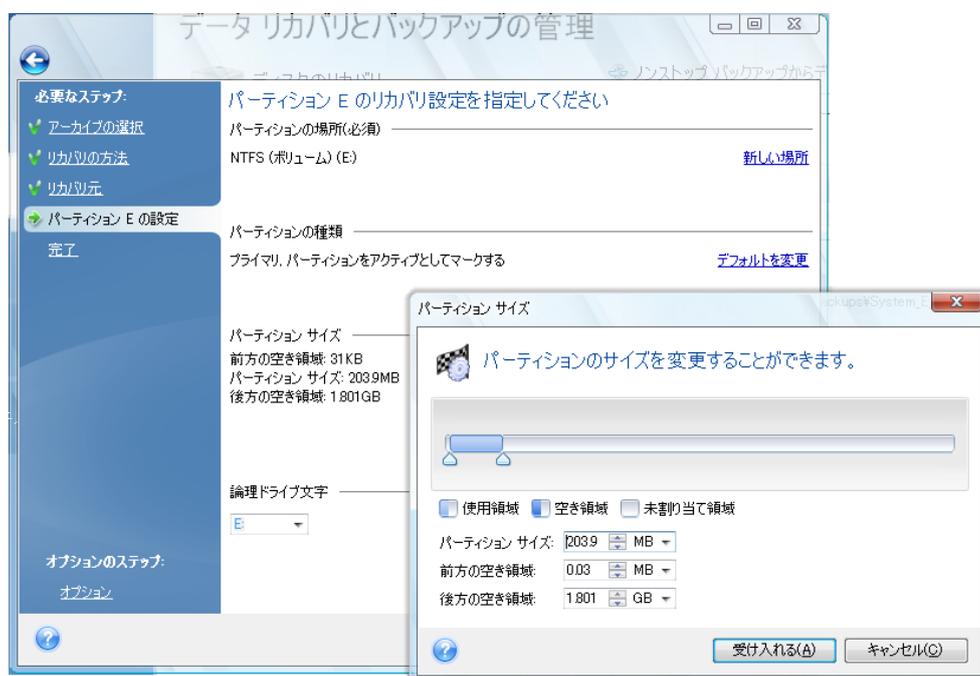
デフォルトでは、元のパーティションの種類が選択されます。

オペレーティング システムがインストールされていないパーティションを **[アクティブ]** に設定すると、コンピュータを起動できなくなります。

11.1.7 リカバリするパーティションのサイズおよび場所の変更

パーティションのサイズと場所を変更するには、画面の水平バー上でパーティションまたはその境界をドラッグするか、該当するフィールドに対応する値を入力します。

この機能を使用すると、リカバリするパーティション間でディスク領域を再配分することができます。この場合、縮小するパーティションを最初にリカバリする必要があります。



この変更方法は、ハードディスクのイメージを作成し、そのイメージをより大きなパーティションにリカバリすることによって、ハードディスクを新しい大容量のハードディスクにコピーする場合に役立ちます。

11.1.8 リカバリされたパーティションへのドライブ文字の割り当て

Acronis True Image HD によってリカバリされたパーティションには、未使用のドライブ文字が割り当てられます。任意のドライブ文字をドロップダウン リストから選択することも、**[自動]** 設定を選択してドライブ文字を自動的に割り当てることもできます。

FAT および NTFS 以外の、Windows がアクセスできないパーティションにはドライブ文字を割り当てないでください。

11.1.9 移行方法

Acronis True Image HD では、復元処理完了後にターゲット ディスクのパーティション レイアウトを選択できます。使用可能なオプションについては、「システムに大容量ハードドライブ (2 TB を超えるもの) を新しく追加する場合」を参照してください。

11.1.10 リカバリ オプションの設定

[完了] ステップで **[オプション]** をクリックすると、リカバリ処理のオプション (リカバリ処理の優先度など) を選択できます。この設定は、現在のリカバリ タスクのみに適用されます。また、デフォルトのオプションを変更することもできます。詳細については、「デフォルトのリカバリ オプションの設定」を参照してください。

11.1.11 リカバリの実行

この時点までは、任意のステップを選択して設定を変更し、作成したタスクに修正を加えることができます。**[キャンセル]** をクリックすると、ディスクに変更は加えられません。**[実行]** をクリックすると、タスクの実行が開始されます。

別のウィンドウにタスクの進行状況が表示されます。**[キャンセル]** をクリックすると、処理は中止されます。ただし、リカバリ先のパーティションが削除され、その領域が未割り当てになることに注意してください。リカバリが失敗した場合にも、同じ結果になります。削除されたパーティションをリカバリするには、再度パーティションをイメージからリカバリしてください。

11.2 デフォルトのリカバリ オプションの設定

データ リカバリ中にデフォルトで使用されるリカバリ オプションを設定するには、**[ツールとユーティリティ]** → **[オプション]** → **[リカバリ オプション]** を選択します。デフォルトのリカバリ オプションは、Acronis True Image HD のインストール中に事前設定した値にいつでも復元することができます。これを行うには、**[オプション]** ウィンドウのツールバーにある **[この値をデフォルトに戻す]** をクリックします。1 つのリカバリ オプションだけをリセットするには、左側のペインでオプションを選択し、**[この値をデフォルトに戻す]** をクリックします。

[すべてデフォルトに戻す] をクリックすると、バックアップやリカバリなどのすべてのデフォルトオプションは事前に設定された値にリセットされます。このため、このボタンを使用する場合は注意が必要です。

11.2.1 ファイルのリカバリ オプション

次のファイル リカバリ オプションを選択できます。

- **セキュリティ設定付きでファイルをリカバリする** - バックアップ時にファイルのセキュリティ設定が保持されている場合（「バックアップのセキュリティ設定 『61ページ』」を参照してください）は、ファイルのセキュリティ設定をリカバリするか、リカバリ先のフォルダのセキュリティ設定をファイルに継承させるかを選択できます。このオプションが有効になるのは、ファイル/フォルダ アーカイブからファイルをリカバリする場合のみです。
- **[リカバリ前にバックアップ アーカイブをベリファイする]** - アーカイブが破損している疑いがある場合に、このオプションをオンにすると、リカバリする前にバックアップをベリファイすることができます。
- **リカバリ後にファイル システムをチェックする** - このパラメータをオンにすると、リカバリ後にファイル システムの整合性をベリファイすることができます。ファイル システムのベリファイを実行できるのは、Windows のディスク/パーティションをリカバリする場合に限られます。ベリファイ対象のファイル システムは、FAT16/32 および NTFS です。リカバリ中にコンピュータの再起動が必要な場合（たとえば、システム パーティションを元の場所にリカバリするとき）は、ファイル システムのチェックは行われません。

11.2.2 ファイル上書きオプション

このオプションは、イメージからのディスクとパーティションのリカバリには適用されません。

デフォルトでは、既存のファイルとフォルダは上書きされますが、最近のファイルとフォルダは上書きしないよう保護されます。

アーカイブのリカバリ時に特定のファイルの種類を保持するための、デフォルトのフィルタを設定できます。たとえば、隠しファイルとフォルダ、システム ファイルとフォルダ、新しいファイルとフォルダ、および選択した条件に一致するファイルを、アーカイブ ファイルで上書きしないようにする場合があります。

条件の指定には、一般的な Windows のワイルドカード文字を使用できます。たとえば、拡張子 .exe を持つすべてのファイルを保護するには、「*.exe」を追加します。**My???.exe** を指定すると、「my」で始まる 5 文字のファイル名が付いた .exe ファイルがすべて保護されます。

[既存のファイルを上書きする] チェックボックスをオフにすると、ハードディスク上のファイルはアーカイブのファイルよりも無条件に優先されます。

11.2.3 リカバリの優先度

デフォルトの設定は **[低]** です。

システム中で実行されているプロセスの優先度は、そのプロセスに割り当てられる CPU やシステム リソースの使用量を決定します。リカバリの優先度を下げることによって、他の CPU タスクが使用できるリソースが増えます。リカバリの優先度を上げると、同時に実行している他のプロセスからリソースを取得するため、リカバリ処理の速度は向上します。優先度変更の効果は、全体的な CPU の使用状況およびその他の要因に応じて異なります。

12 タスク スケジュールの作成

12.1 スケジュールされたタスク

Acronis True Image HD には、定期的なバックアップのスケジュールを設定する機能があります。これにより、データの安全性を高めることができます。

個別にスケジュールされたタスクを複数作成できます。たとえば、進行中のプロジェクトを毎日バックアップし、システム ディスクを週に 1 回バックアップするようなタスクを作成できます。

バックアップ スケジュールを選択する際には、メディアの管理についてよく考慮する必要があります。たとえば、書き込み可能な DVD にバックアップを行う場合は、スケジュールが実行されるときはいつでも空のディスクが挿入されているように準備しておく必要があります。また、不在時に実行されるようなバックアップをスケジュール設定した場合は、常にそのことを忘れずに、必要なメディアをドライブに挿入しておくように準備する必要があります。これに対し、バックアップ先がハードディスクやネットワーク デバイスであり、常時接続しておくことが可能ならば、このような問題は発生しません。

スケジュールされたバックアップ タスクのバックアップ先がリムーバブル ドライブの場合は、デバイスが接続されると自動的にバックアップが開始します。ただし、このような動作が行われるのは、その前にスケジュールされた日時のバックアップの実行に失敗した場合だけです。リムーバブル ドライブは、それ以前のすべてのバックアップに使用されたものと同じでなければなりません。別のリムーバブル ドライブを接続しても、バックアップ処理は開始されません。

新しいタスクのスケジュールを設定するには、次の方法があります。

- バックアップ タスクの作成時に、**[スケジュールの編集...]** をクリックします。または
- バックアップ ウィザードまたはベリファイ ウィザードの **[スケジュール設定]** ステップを実行します。または、
- **[タスクとログ]** 画面のツールバーの **[バックアップ タスクの作成]** または **[検証タスクの作成]** をクリックします。

スケジュールされたタスクを管理するには、サイドバーの **[タスクとログ]** をクリックします。表示される **[タスクの管理]** 画面では、右ペインの **[スケジュールされたタスク]** タブがデフォルトで選択されています。このタブには、すべてのスケジュールされたタスクの名前、ステータス、スケジュール、前回の実行時間、前回の結果、および所有者が一覧表示されます。

デフォルトでは自分のタスクだけが表示されますが、他のユーザーのタスクを表示または管理することもできます。その場合は、メイン プログラム メニューの **[ツールとユーティリティ]** **[オプション]** **[外観]** を選択します。次に、**[フィルタ]** を選択し、**[現在のユーザーが作成したタスクのみを表示する]** チェックボックスをオフにします。

タスクのパラメータを変更するには、パラメータを編集します。方法は作成時と同様ですが、以前選択したオプションがそのまま設定されるので、入力が必要なのは変更される部分のみです。タスクを編集するには、タスクを選択してツールバーの **[編集]** をクリックします。

変更するのがタスク スケジュールのみの場合は、タスクを選択してツールバーの **[スケジュールの変更]** をクリックします。

確認しながらタスクを削除するには、タスクを選択してツールバーで **[削除]** をクリックします。

タスクの名前を変更するには、タスクを選択してツールバーの **[名前の変更]** をクリックし、新しいタスク名を入力します。

選択されているタスクの実行をすぐに開始するには、ツールバーの **[開始]** をクリックします。

タスクがスケジュールされているけれども、しばらくの間は実行する必要がなく、その後で実行する可能性がある場合は、ツールバーの **[無効化]** をクリックしてタスクを無効化しておき、後でそのタスクが必要になったときに再度有効化することができます。そのため、タスクを最初から作成しなおす必要はありません。

複数の類似したタスクを作成する必要がある場合は、タスクを選択してツールバーの **[クローン作成]** をクリックするとタスクのクローンが作成されます。作成されたタスクの名前を変更し、必要な変更を行います。

これまでに説明した操作はどれも、スケジュールされたタスクを右クリックしたときに開くショートカットメニューから選択することもできます。

同じ操作を、スケジュールされていないタスク (**[スケジュールされていないタスク]** タブに表示されます) に対して実行することもできます。スケジュールされていないタスクを編集するときに、何らかのスケジュールオプションを設定すると、そのタスクは **[スケジュールされていないタスク]** タブから **[スケジュールされたタスク]** タブに移動します。

12.2 スケジュールされたタスクの作成

スケジュールされたタスクを作成する手順は、次のとおりです。

- バックアップ タスクまたは検証タスクの作成か編集を実行しているときに、**[スケジュール]** をクリックします。

12.2.1 スケジュール設定

[スケジュール設定] ウィンドウでは、タスクの実行間隔を指定することができます。

次のいずれかを選択します。

- **スケジュールを設定しない** - タスクは保存されますが、自動的に開始されません。後で、**[タスクの管理]** ウィンドウからタスクを開始できます。
- **1 回のみ** 『83ページ』 - タスクは指定された日時に 1 回だけ実行されます。
- **イベント発生時** 『84ページ』 - タスクはイベントの発生時に実行されます。
- **時間単位** - タスクは指定された間隔で定期的に行われます。
- **日単位** - タスクは 1 日に 1 回または数日に 1 回実行されます。
- **週単位** - タスクは 1 週間に 1 回または数週間に 1 回、指定した曜日に実行されます。
- **月単位** 『86ページ』 - タスクは月に 1 回指定した日に実行されます。

注意: グレーで表示されるスケジュール オプションは、Acronis Online Backup および製品の完全バージョンで使用できます。Acronis True Image HD のアップグレードに関する詳細については、製品のツールバーの **[完全バージョンの取得]** をクリックしてください。

認証情報

Windows XP 以降のオペレーティング システムでは、実行タスクを所有しているユーザー名を指定しないと、スケジュールされたタスクは実行できません。

ログイン情報を指定する手順は、次のとおりです。

- **[ユーザー名]** フィールドにユーザー名を入力します。デフォルトでは、このフィールドには現在のユーザー名が表示されます。
- パスワードを入力します。パスワードを入力しないと、スケジュールされたタスクは実行されません。

スケジュールされたタスクの実行を、コンピュータが次に使用中でない状態（スクリーン セーバーが表示されるか、コンピュータがロックされた状態）になるまで延期する場合、**[コンピュータのアイドル時にのみタスクを実行する]** チェックボックスをオンにします。

スケジュールした時刻にコンピュータの電源が入っていない場合はタスクが実行されませんが、実行されなかったタスクを次のシステム起動時に強制的に実行することができます。そのためには、**[実行されなかった場合、コンピュータの起動時にタスクを実行する]** パラメータを選択します。コンピュータが「スリープ」モードまたは「休止」モードから起動した場合、このオプションは機能しません。

USB フラッシュ ドライブまたは外付けハードディスク ドライブへのバックアップを実行するタスクをスケジュールすると、**[実行されなかった場合、デバイスの接続時にタスクを実行する]** チェックボックスと **[現在のデバイスが接続されている場合にのみタスクを実行する]** チェックボックスという、さらに 2 つのチェックボックスがスケジュール画面に表示されます。最初のチェックボックスをオンにすると、スケジュールした時刻に USB ストレージ デバイスが接続されていなかったために実行されなかったバックアップを、デバイスが接続されたときに実行することができます。同じデバイスが接続された場合にのみ、実行されなかったタスクを実行するようにするには、**[現在のデバイスが接続されている場合にのみタスクを実行する]** チェックボックスもオンにします。このチェックボックスをオフにした場合、実行されなかったタスクは、任意の USB ストレージ デバイスが接続されたときに実行されます。

HDD アラーム発生時にタスクを実行する – (Acronis Drive Monitor がインストールされている場合に使用可能) – 有効にすると、タスクに含まれているいずれかのハードディスクの考えられる問題に関するアラームが Acronis Drive Monitor で発生するとすぐにタスクが実行されます。Acronis Drive Monitor は、ハード ドライブの S.M.A.R.T. レポート、Windows のログ、および独自のスクリプトから受け取った情報をベースにしたハード ドライブ状態監視ユーティリティです。

オペレーティング システムによっては、これらのオプションの一部が使用できない場合があります。

回のみの実行パラメータ

回のみの実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **[開始時刻]** (時と分) - タスクの開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。
- **[開始日]** (日、月、年) - カレンダーから日付を選択します。
- スケジュールした時刻にコンピュータの電源が入っていない場合はタスクが実行されませんが、実行されなかったタスクを次のシステム起動時に強制的に実行することができます。このように設定するには、**[実行されなかった場合、コンピュータの起動時にタスクを実行する]** チェックボックスをオンにします。コンピュータが「スリープ」モードまたは「休止」モードから起動した場合、このオプションは機能しません。

- スケジュールされたタスクの実行を、コンピュータが使用中でない状態（スクリーンセーバーが表示される、またはコンピュータがロックされる）になるまで延期するには、**【コンピュータのアイドル時にのみタスクを実行する】** チェックボックスをオンにします。
- **HDD アラーム発生時にタスクを実行する** - （Acronis Drive Monitor がインストールされている場合に使用可能） - 有効にすると、タスクに含まれているいずれかのハードディスクの考えられる問題に関するアラームが Acronis Drive Monitor で発生するとすぐにタスクが実行されます。Acronis Drive Monitor は、ハードドライブの S.M.A.R.T. レポート、Windows のログ、および独自のスクリプトから受け取った情報をベースにしたハードドライブ状態監視ユーティリティです。

イベント発生時の実行パラメータ

イベント発生時のタスクの実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **【このタスクを次のイベント発生時に実行します】** - 次の一覧からイベントを選択します。
 - 【システム起動時】** - オペレーティングシステムの起動時に毎回タスクが実行されます。
 - 【システム シャットダウン時】** - コンピュータのシャットダウン時または再起動時に毎回タスクが実行されます。
 - 【ユーザー ログオン時】** - 現在のユーザーがオペレーティングシステムにログオンするたびにタスクが実行されます。
 - 【ユーザー ログオフ時】** - 現在のユーザーがオペレーティングシステムからログオフするたびにタスクが実行されます。
- 当日そのイベントが最初に発生したときにのみタスクを実行する場合は、**【1 日 1 回のみ】** パラメータを選択します。
- タスクの最初の実行日を指定するには、タスクの **【開始日】** パラメータを設定します。

Windows Vista 以降のオペレーティングシステムの Winlogon サービスは以前の Windows オペレーティングシステムの同サービスとはまったく違うものになっており、タスク実行のスケジュール設定で **【システム シャットダウン時】** および **【ユーザー ログオフ時】** は無効になっています。

時間指定実行パラメータ

タスクを実行する間隔を指定することができます。

- **実行間隔:** - スケジュールしているタスクの実行間隔（時、分、秒）を指定します。たとえば 40 分と入力した場合、タスクは前回のタスク実行開始から 40 分経過するたびに実行されます。
- スケジュールした時刻にコンピュータの電源が入っていない場合はタスクが実行されませんが、実行されなかったタスクを次回のシステム起動時に強制的に実行することができます。このように設定するには、**【実行されなかった場合、コンピュータの起動時にタスクを実行する】** チェックボックスをオンにします。コンピュータが「スリープ」モードまたは「休止」モードから起動した場合、このオプションは機能しません。
- スケジュールされたタスクの実行を、コンピュータが使用中でない状態（スクリーンセーバーが表示される、またはコンピュータがロックされる）になるまで延期するには、**【コンピュータのアイドル時にのみタスクを実行する】** チェックボックスをオンにします。
- **HDD アラーム発生時にタスクを実行する** - （Acronis Drive Monitor がインストールされている場合に使用可能） - 有効にすると、タスクに含まれているいずれかのハードディスクの考えられる問題に関するアラームが Acronis Drive Monitor で発生するとすぐにタスクが実行されます。Acronis Drive

Monitor は、ハード ドライブの S.M.A.R.T. レポート、Windows のログ、および独自のスクリプトから受け取った情報をベースにしたハード ドライブ状態監視ユーティリティです。

タスクの最初の実行日を指定するには、タスクの **【開始日】** パラメータを設定します。

日単位の実行パラメータ

日単位のタスクの実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **開始時刻:** (時と分) - タスクの開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。
- スケジュールした時刻にコンピュータの電源が入っていない場合はタスクが実行されませんが、実行されなかったタスクを次のシステム起動時に強制的に実行することができます。このように設定するには、**【実行されなかった場合、コンピュータの起動時にタスクを実行する】** チェックボックスをオンにします。コンピュータが「スリープ」モードまたは「休止」モードから起動した場合、このオプションは機能しません。
- スケジュールされたタスクの実行を、コンピュータが使用中でない状態(スクリーン セーバーが表示される、またはコンピュータがロックされる)になるまで延期するには、**【コンピュータのアイドル時にのみタスクを実行する】** チェックボックスをオンにします。

HDD アラーム発生時にタスクを実行する - (Acronis Drive Monitor がインストールされている場合に使用可能) - 有効にすると、タスクに含まれているいずれかのハードディスクの考えられる問題に関するアラームが Acronis Drive Monitor で発生するとすぐにタスクが実行されます。Acronis Drive Monitor は、ハード ドライブの S.M.A.R.T. レポート、Windows のログ、および独自のスクリプトから受け取った情報をベースにしたハード ドライブ状態監視ユーティリティです。

次に、実行間隔を選択します。

- **毎日** - タスクは毎日実行されます。
- **すべての平日** - タスクは平日にのみ実行されます。
- **(...) 日に 1 回** - タスクの実行間隔を指定します(何日かごとに 1 回)。

次の間隔でタスクを実行する: (...) 時間 (午前 0 時まで) - 1 日に何度かバックアップを実行する場合に選択します。この機能は、常に大量のデータが変更され、1 日に数回の増分バックアップをスケジュールする場合に便利です。

タスクの最初の実行日を指定するには、タスクの **【開始日】** パラメータを設定します。

週単位の実行パラメータ

週単位のタスクの実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **開始時刻:** (時と分) - タスクの開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。
- スケジュールした時刻にコンピュータの電源が入っていない場合はタスクが実行されませんが、実行されなかったタスクを次のシステム起動時に強制的に実行することができます。このように設定するには、**【実行されなかった場合、コンピュータの起動時にタスクを実行する】** チェックボックスをオンにします。コンピュータが「スリープ」モードまたは「休止」モードから起動した場合、このオプションは機能しません。
- スケジュールされたタスクの実行を、コンピュータが使用中でない状態(スクリーン セーバーが表示される、またはコンピュータがロックされる)になるまで延期するには、**【コンピュータのアイドル時にのみタスクを実行する】** チェックボックスをオンにします。

- **HDD アラーム発生時にタスクを実行する** - (Acronis Drive Monitor がインストールされている場合に使用可能) - 有効にすると、タスクに含まれているいずれかのハードディスクの考えられる問題に関するアラームが Acronis Drive Monitor で発生するとすぐにタスクが実行されます。Acronis Drive Monitor は、ハード ドライブの S.M.A.R.T. レポート、Windows のログ、および独自のスクリプトから受け取った情報をベースにしたハード ドライブ状態監視ユーティリティです。

次に、実行間隔を選択します。

- (...) **週間に 1 回** - タスクを実行する間隔を指定します (例: 2 週間に 1 回 - 2 週間に 1 回タスクを実行します)。

タスクを実行する曜日を選択します。

タスクの最初の実行日を指定するには、タスクの **【開始日】** パラメータを設定します。

月単位の実行パラメータ

月単位のタスクの実行では、次のパラメータを設定することができます。

- **開始時刻 (時と分)** - タスクの開始時刻を設定します。時と分を手動で入力するか、上下の矢印ボタンを使用して開始時刻を設定します。
- スケジュールした時刻にコンピュータの電源が入っていない場合はタスクが実行されませんが、実行されなかったタスクを次のシステム起動時に強制的に実行することができます。このように設定するには、**【実行されなかった場合、コンピュータの起動時にタスクを実行する】** チェックボックスをオンにします。コンピュータが「スリープ」モードまたは「休止」モードから起動した場合、このオプションは機能しません。
- スケジュールされたタスクの実行を、コンピュータが使用中でない状態 (スクリーン セーバーが表示される、またはコンピュータがロックされる) になるまで延期するには、**【コンピュータのアイドル時にのみタスクを実行する】** チェックボックスをオンにします。
- **HDD アラーム発生時にタスクを実行する** - (Acronis Drive Monitor がインストールされている場合に使用可能) - 有効にすると、タスクに含まれているいずれかのハードディスクの考えられる問題に関するアラームが Acronis Drive Monitor で発生するとすぐにタスクが実行されます。Acronis Drive Monitor は、ハード ドライブの S.M.A.R.T. レポート、Windows のログ、および独自のスクリプトから受け取った情報をベースにしたハード ドライブ状態監視ユーティリティです。

次に、実行間隔を選択します。

- **指定曜日** - 週の番号と曜日を選択します (たとえば、第 1 月曜日を選択すると、タスクは毎月第 1 月曜日に実行されます)。
- **指定日** - タスクの実行日を選択します (たとえば、月の 10 日、20 日、および最終日にタスクを実行できます)。

タスクの最初の実行日を指定するには、タスクの **【開始日】** パラメータを設定します。

12.2.2 認証情報

Windows XP 以降のオペレーティング システムでは、実行タスクを所有しているユーザー名を指定しないと、スケジュールされたタスクは実行できません。

ログイン情報を指定する手順は、次のとおりです。

- ユーザー名を **【ユーザー名】** フィールドに入力します。デフォルトでは、このフィールドには現在のユーザー名が表示されます。

- [パスワード] フィールドにパスワードを入力します。パスワードを入力しないと、スケジュールされたタスクは実行されません。

12.3 スケジュールされたタスクの編集

タスクのパラメータを変更するには、**【編集】** コマンドを使用します。

スケジュールされたタスクを編集する手順は、次のとおりです。

- 編集するスケジュールされたタスクを選択します。
- 右クリックし、コンテキスト メニューの **【編集】** を選択します。

12.4 スケジュールされたタスクの名前の変更

タスク名を、より適切な名前に変更することができます。

スケジュールされたタスクの名前を変更する手順は、次のとおりです。

- 名前を変更するスケジュールされたタスクをクリックして選択します。
- そのタスクを右クリックし、コンテキスト メニューから **【名前の変更】** を選択します。
- スケジュールされたタスクに付ける名前を入力します。

12.5 スケジュールされたタスクの削除

スケジュールされたタスクを削除する手順は、次のとおりです。

- 削除するスケジュールされたタスクを選択します。
- そのタスクを右クリックし、コンテキスト メニューから **【削除】** を選択します。
- 操作を確定します。

12.6 スケジュールされたタスクの実行時に必要な認証

Windows XP、Windows Vista、および Windows 7 では、実行されるタスクの所有者となるユーザーの名前を指定しておく必要があります。指定されていない場合は、スケジュールに従って実行することはできません。

13 ブータブルメディアの作成

13.1 Linux ベースのレスキュー メディアの作成

緊急用起動ディスクを使用して、ベアメタル システムまたはクラッシュしたコンピュータで Acronis True Image HD を起動できます。すべてのデータをセクタ単位でバックアップアーカイブにコピーして、Windows 以外のコンピュータのハードディスクをバックアップすることもできます。これには、スタンドアロン版の Acronis True Image HD がインストールされたブータブル メディアが必要になります。

ブータブル メディアは、ブータブル メディア ビルダを使用して作成することができます。このメディアを作成するには、空の CD-R/RW、DVD+R/RW、またはコンピュータの起動に使用可能なその他のメディア (Zip ドライブなど) が必要になります。

Acronis True Image HD には、ブータブル ディスクの ISO イメージをハードディスク上に作成する機能もあります。

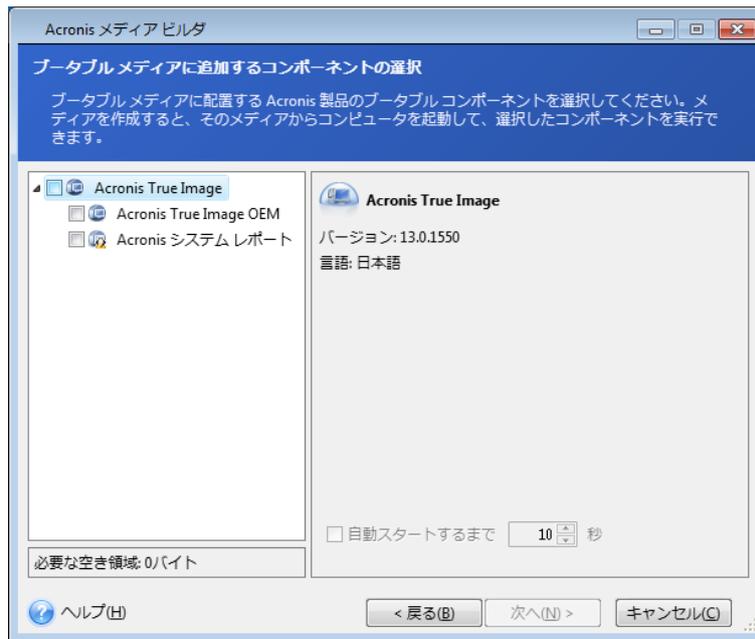
コンピュータに Acronis Disk Director Suite などの他のアクロニス製品がインストールされている場合は、これらのプログラムのスタンドアロン版も同じブータブル ディスクに追加することができます。

インストール時にブータブル メディア ビルダをインストールしなかった場合は、Acronis True Image HD でこの機能を使用することはできません。

ブータブル メディアから起動したときは、Ext2/Ext3、ReiserFS、Linux SWAP ファイルシステムが採用されているディスクやパーティションへのバックアップを行うことはできません。

1. **【ツールとユーティリティ】メニューの【ブータブル レスキュー メディアの作成】** を選択します。 **【スタート】メニューから、【すべてのプログラム】 → 【Acronis】 → 【Acronis True Image HD】 → 【ブータブル レスキュー メディア ビルダ】** を選択して、Acronis True Image HD をロードせずにブータブル レスキュー メディア ビルダを起動することもできます。

2. ブータブル メディアに追加する Acronis プログラムのコンポーネントを選択します。



Acronis True Image HD には、次のコンポーネントがあります。

Acronis True Image OEM 完全版

USB、PC カード(以前の PCMCIA)、SCSI インターフェイス、およびそれらを介して接続されるストレージ デバイスがサポートされます。そのため、このコンポーネントを使用することをお勧めします。

Acronis システム レポート

このコンポーネントを使用すると、Windows および Acronis True Image OEM 完全版で起動できないときにレスキュー メディアから起動した後、システム レポートが生成されます。

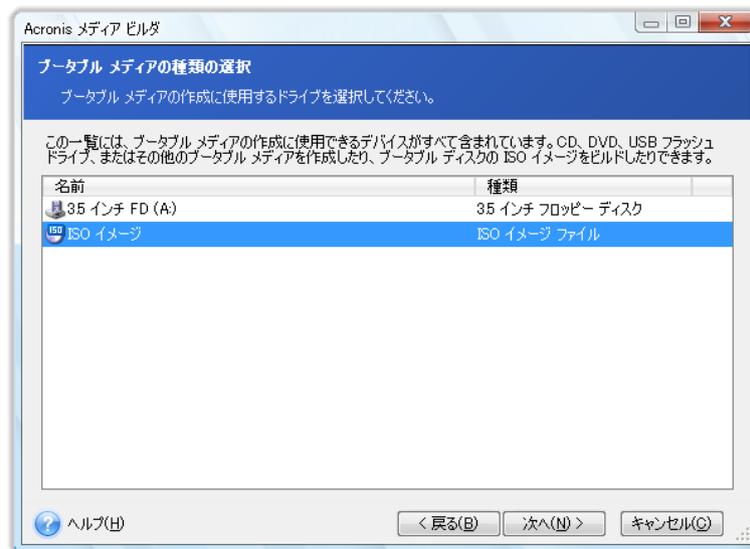
次のウィンドウでは、ブータブル メディアの起動パラメータを設定して、レスキューメディアの起動オプションを構成すると、さまざまなハードウェアとの互換性を向上させることができます。nousb、nomouse、noapic などのオプションが利用できます。使用可能なすべての起動パラメータについては、「起動パラメータ 『152ページ』」を参照してください。 上級ユーザー向けに用意されているパラメータです。 ブータブルメディアからの起動をテスト中にハードウェアの互換性の問題が発生した場合は、アクロニス テクニカル サポートにお問い合わせください。

[自動バックアップ開始まで] パラメータでは、ブート メニューのタイムアウト間隔を指定します。このパラメータが指定されていない場合、ブート メニューが表示され、OS または Acronis コンポーネントのどちらを起動するかが選択されるまで待機します。たとえば、アクロニス製品のレスキュー メディアに対してこのパラメータを **10 秒**に設定すると、ブート メニューが表示されてから 10 秒後にスタンドアロン版の Acronis True Image HD が起動します。

アクロニス製品の他のコンポーネントについては、それぞれのユーザーズ ガイドを参照してください。

3. 作成するブータブル メディアの種類 (CD-R/RW、DVD+R/RW、または 3.5 インチ フロッピー ディスク)を選択します。 BIOS にこの機能がある場合は、リムーバブル USB フラッシュ ドライブなどの他のブータブル メディアを作成できます。 ブータブル ディスクの ISO イメージを作成することもできます。

フロッピー ディスクを使用する場合は、一連のフロッピー ディスクに対して一度に 1 つのコンポーネント（たとえば Acronis True Image HD 完全版）しか書き込むことができません。別のコンポーネントを書き込むには、ブータブル メディア ビルダをもう一度実行してください。



1. CD、DVD、その他のリムーバブル メディアに作成する場合は、空のメディアを挿入します。プログラムによってメディアの容量が判別されます。ブータブル ディスクの ISO イメージの作成を選択した場合は、作成する ISO イメージのファイル名と保存先のフォルダを指定します。
2. 次に、(ISO または CD/DVD を選択しなかった場合は)必要となる空フロッピー ディスクの枚数が計算されるので、それらを準備します。準備が整ったら、**[実行]** をクリックします。

ブータブル メディアを作成したら、メディアに必要な事項を記入して安全な場所に保管してください。

新しいバージョンのプログラムで作成されたバックアップは、前のバージョンのプログラムとは互換性がない可能性があることに注意してください。このため、Acronis True Image HD をアップグレードした場合は必ず新しいブータブル メディアを作成することをお勧めします。また、スタンドアロン版の Acronis True Image HD をご使用の場合は、レスキューメディアから起動したときに Windows XP 以降のオペレーティング システムで利用可能な暗号化機能を使用して暗号化されたファイルやフォルダをリカバリすることはできませんので、注意してください。詳細については、「ファイル レベルのセキュリティ設定 『61ページ』」を参照してください。これに対し、Acronis True Image HD の暗号化機能を使用して暗号化されたアーカイブのバックアップはリカバリすることができます。

14 アーカイブの参照およびイメージのマウント

Acronis True Image HD には、アーカイブの内容を管理する機能として、イメージのマウントとイメージの参照が用意されています。

イメージを仮想ドライブとしてマウントすると、物理ドライブであるかのようにアクセスすることができます。これにより、次のことが可能になります。

- 固有のドライブ文字を持つ新しいディスクがドライブ一覧に表示される
- Windows エクスプローラやその他のファイル マネージャを使用して、物理ディスクまたはパーティションに保存されているかのように、イメージの内容を参照できる
- 実在するディスクと同じように仮想ディスクを使用（ファイルやフォルダを開く、保存、コピー、移動、作成、削除）することができる 必要に応じて、読み取り専用モードでイメージをマウントすることもできます。

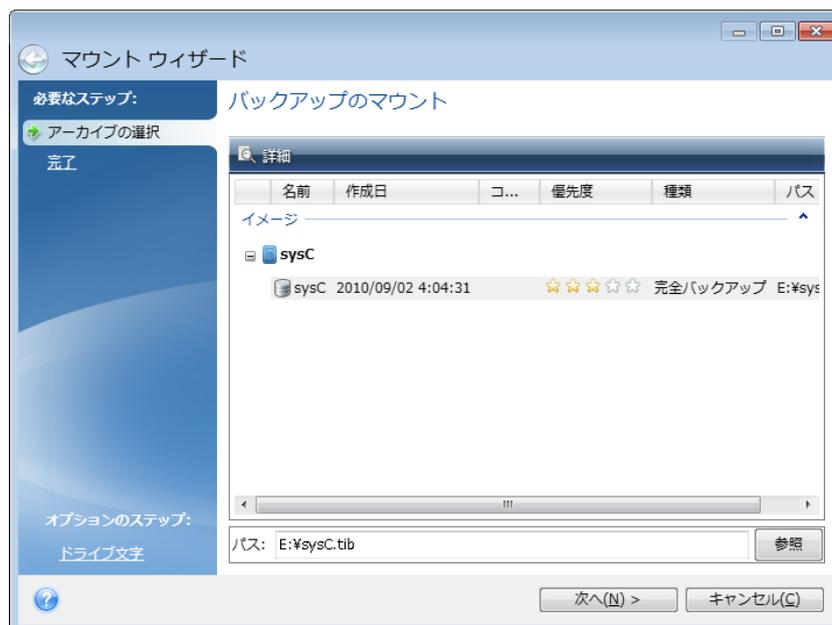
この章で説明した処理は、FAT および NTFS でファイル システムでのみサポートされます。

ファイル アーカイブとディスク/パーティション イメージには、どちらもデフォルトで「.tib」拡張子が付いていますが、マウントできるのはイメージのみであることにご注意ください。ファイル アーカイブの内容を表示するには、参照処理を使用してください。参照とマウントの処理の概要は次のとおりです。

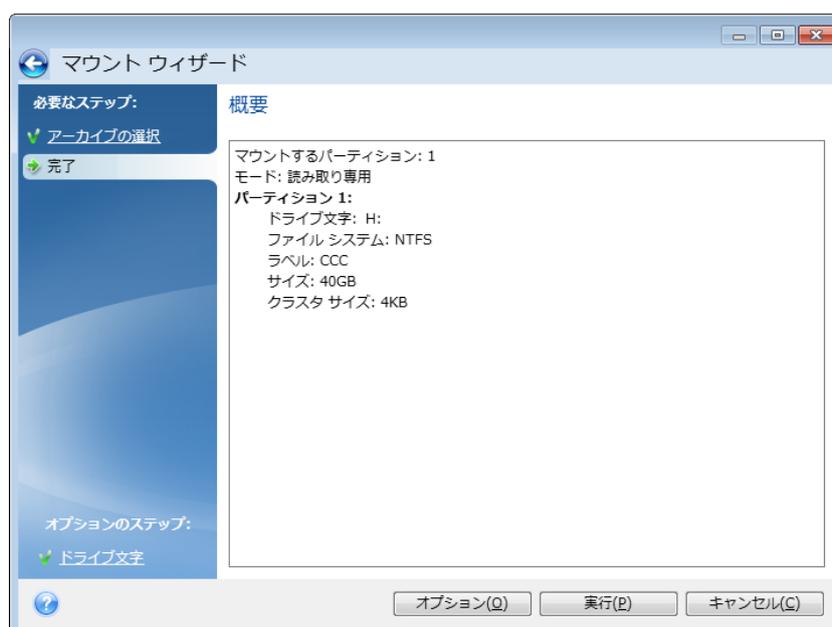
	参照	イメージのマウント
アーカイブの種類	ディスクまたはパーティション イメージ	パーティション イメージ
ドライブ文字の割り当て	いいえ	はい
アーカイブの変更	いいえ	いいえ
ファイルの抽出	はい	はい

14.1 イメージのマウント

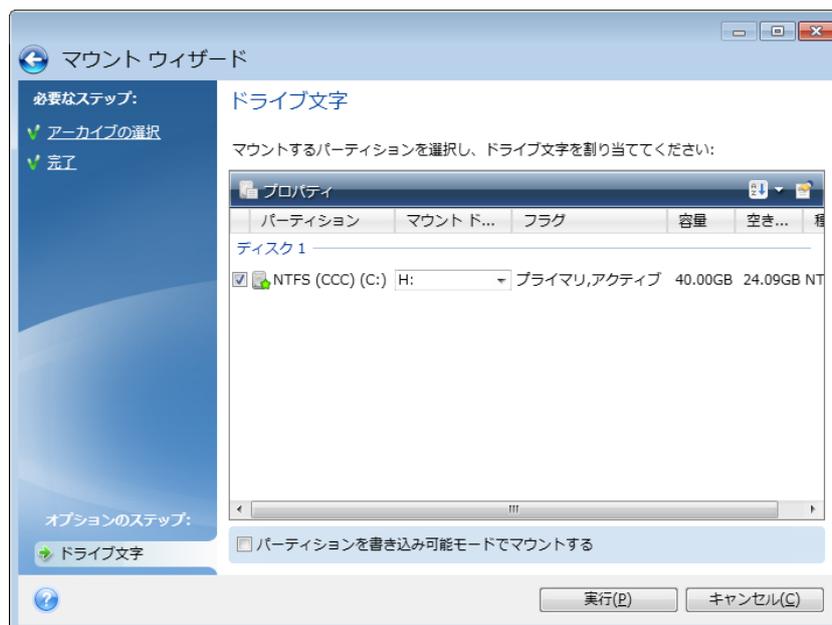
1. メイン メニューで [ツールとユーティリティ]  [イメージのマウント] を選択するか、または [データ リカバリとバックアップの管理] 画面でイメージ アーカイブを右クリックしてショートカット メニューで [イメージのマウント] を選択して、マウントウィザード を起動します。
2. マウントするアーカイブを選択します。



3. 仮想ディスクとしてマウントするパーティションを選択します。（ディスクが 1 つのパーティションで構成されている場合を除き、ディスク全体のイメージをマウントすることはできません）。イメージに複数のパーティションが含まれている場合、デフォルトでは、すべてのパーティションがマウント対象として選択され、ドライブ文字が自動で割り当てられています。マウントするパーティションに異なるドライブ文字を割り当てる場合は、**[オプション]** をクリックします。



仮想ディスクに割り当てるドライブ文字を、**[マウント ドライブ文字]** ドロップダウンリストから選択することもできます。パーティションをマウントしない場合は、ドロップダウン リストから **[マウントしない]** を選択するか、該当するパーティションのチェックボックスをオフにします。



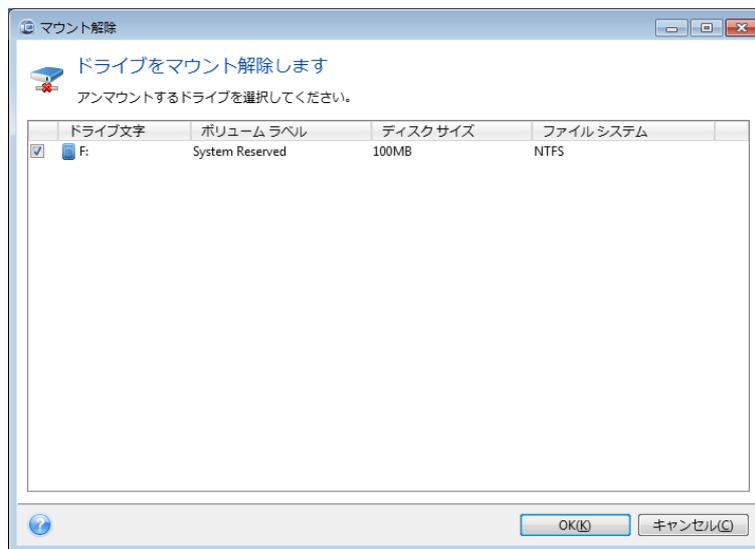
4. 設定が完了したら **【実行】** をクリックし、選択したパーティション イメージを仮想ディスクとして接続します。
5. イメージが接続されると、Windows エクスプローラが起動し、仮想ディスクの内容が表示されます。これで、ファイルまたはフォルダが実際のディスク上にあるかのように作業することができます。

14.2 イメージのアンマウント

仮想ディスクの維持にはかなりのシステム リソースが消費されるため、必要な操作がすべて終了したら、仮想ディスクをマウント解除することをお勧めします。ディスクのアンマウントを行わない場合、このディスクはコンピュータの電源をオフにすると消滅します。

仮想ディスクの接続を切断するには、**【ツールとユーティリティ】** → **【イメージのアンマウント】** を選択し、アンマウントするディスクを指定してから **【OK】** をクリックします。

複数のパーティションがマウントされている場合は、デフォルトですべてのパーティションがアンマウントの対象に選択されます。マウントされているドライブの接続をすべて切断することも、マウントしておく必要がなくなったドライブだけ切断することもできます。



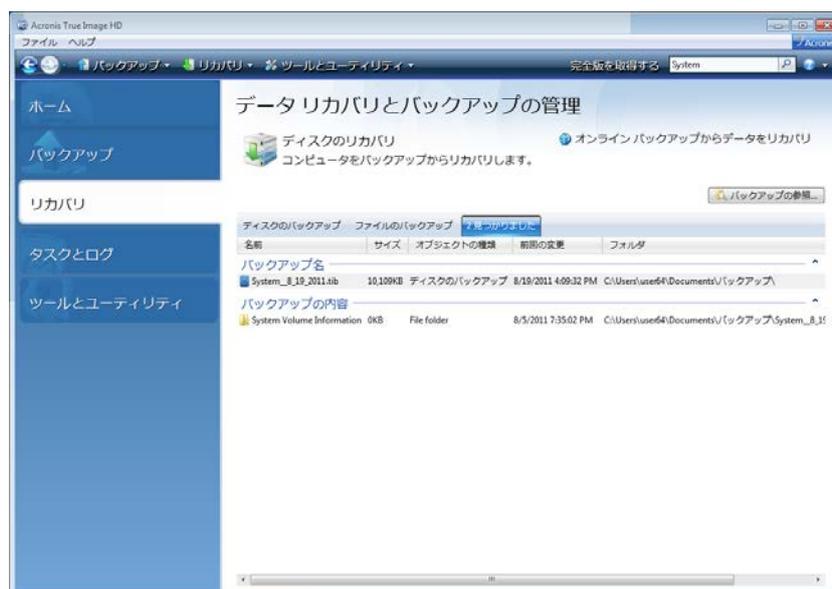
Windows エクスプローラでディスク アイコンを右クリックし、[アンマウント] を選択して、この操作を行うこともできます。

15 バックアップアーカイブとその内容の検索

15.1 検索

Acronis True Image HD では、バックアップアーカイブを参照できるだけでなく、tib アーカイブ自体と tib アーカイブ内のファイルの検索、アーカイブについてのコメント内のフルテキスト検索が可能です。これにより、Acronis True Image HD の使用や、バックアップアーカイブからのファイルのリカバリに必要な情報が見つけやすくなります。データを検索する方法は、次のとおりです。

1. 検索文字列を Acronis True Image HD ウィンドウ右上の [検索] フィールドに入力して虫眼鏡のアイコンをクリックすると、**[データ リカバリとバックアップの管理]** 画面が表示されます。ウィンドウの該当タブに検索結果が出力されます。



2. デフォルトでは、Acronis True Image HD が情報を検索できるすべてのソースで検索が実行されます。**[バックアップ名]** および **[バックアップの内容]** で該当する領域を指定して、目的の情報ソースを選択できます。

Acronis True Image HD は、ネットワーク共有、Acronis オンラインストレージ、および Windows で **[リムーバブルストレージがあるデバイス]** として認識されるデバイスでの検索は実行できません。

- **[バックアップ名]** 領域には、tib アーカイブの検索結果がアーカイブファイル名で表示されます。ファイル名をダブルクリックすると、対応するアーカイブが Windows エクスプローラで開かれ、そのアーカイブの内容を調べることができます。アーカイブのファイル名を右クリックしてショートカットメニューの適切な項目を選択すると、アーカイブを検証したりリカバリしたりできます。ショートカットメニューには、tib アーカイブの場合は **[リカバリする]**、**[マウント]** (イメージバックアップ用)、**[検証]**、**[移動]**、**[削除]**、**[参照]**、**[コメントの編集]**、および **[詳細]** ボタンが含まれます。
- **[バックアップの内容]** 領域には、tib アーカイブ内でのファイルとフォルダの検索結果が表示されます。ファイル名をダブルクリックすると、そのファイルが開きます。ファイル名を右クリックしてショートカットメ

ニューで [リカバリする] を選択すると、ファイルをリカバリすることができます。また、このショートカット メニューからファイルやそのファイルを含む親フォルダを開くこともできます。

検索結果の理解に役立つよう、検索機能で使用されるアルゴリズムについて以下に説明します。

1. tib アーカイブにあるファイルを検索する際には、ファイル名の全部または一部を入力します。一般的な Windows のワイルドカード文字を使用することもできます。たとえば、アーカイブにあるすべてのバッチ ファイルを検索するには、「*.bat」と入力します。「my???.exe」と入力すると、ファイル名が 5 文字の「my」で始まるすべての .exe ファイルを検索できます。検索では大文字と小文字が区別されないため、「Backup」と「backup」は同じ検索文字列とみなされます。また、入力した検索条件に該当するファイルが 100 個に達すると、検索が停止されます。検索結果に必要なファイルが含まれていない場合は、検索条件を調整する必要があります。

1 つのファイルが複数のバックアップに含まれており、変更されていない場合は、最も古いバックアップ ファイルでのみ、そのファイルが検索結果に表示されます。変更されたことのあるファイルの場合は、そのファイルの**変更されたバージョン**が含まれるバックアップ ファイルがすべて検索結果に表示されます。

2. バックアップ アーカイブに追加されたコメントの検索方法は異なります。最も大きな違いは、Windows のワイルドカード文字として「*」と「?」を使用できないことです。この場合、フルテキスト検索が行われるため、これらの文字を利用すると、コメント内でこれらの文字が含まれているものがすべて検索されるだけです（存在する場合）。フルテキスト検索は、以下の規則に従って実行されます。
 - 検索条件は、スペースまたは論理演算子（「AND」、「OR」、「NOT」）（大文字であることに注意）で区切られたキーワードで構成されます。
 - 使用できる論理演算子は 1 つだけです（検索文字列の最初の演算子）。それ以外は、キーワードと見なされるか、無視されます。
 - スペースで区切られたキーワードで検索する場合、すべてのキーワードが含まれた結果のみが表示されます。

[バックアップ名] 領域には、検索条件に一致するコメントを含むアーカイブ ファイルが表示されます。アーカイブを参照するには、対象のアーカイブをダブルクリックします。

15.2 Windows サーチと Google デスクトップの統合

Acronis True Image HD には、Google デスクトップと Windows サーチ (WDS) 用のプラグインが用意されています。コンピュータ上でこれらの検索エンジンを使用する場合、使用する検索エンジンが Acronis True Image HD によって検出され、tib バックアップ アーカイブのインデックスを作成するのに適したプラグインがインストールされます。バックアップのインデックスを作成すると、バックアップ アーカイブの検索が高速化されます。インデックスが作成されると、Google デスクトップまたは Windows サーチのデスクバーのクエリ フィールドにファイル名を入力するだけで、Acronis True Image HD を起動せずにアーカイブの内容を検索できます。検索の結果はブラウザ ウィンドウに表示されます。検索結果を使用して、以下のことを行えます。

- 任意のファイルを選択し、開いて参照したり、ファイル システムの（アーカイブ以外の）任意の場所に保存したり、元の場所に戻す。
- どのアーカイブに指定したファイルが保存されているか確認し、そのアーカイブをリカバリする。

Google デスクトップでは、[クイック検索] ウィンドウを利用できます。このウィンドウには、コンピュータからの検索に対する関連性が最も高い結果が表示されます。データを入力するにつれて結果が変化するため、コンピュータ上の必要なものがある場所にすばやくアクセスできます。Windows サーチも、類似する機能を提供します。

Google デスクトップと Windows サーチには、バックアップ アーカイブ内のファイル名のインデックス作成機能だけでなく、Acronis True Image HD の tib アーカイブに含まれる多数のファイルのフルテキスト インデックスの作成機能も用意されており、この機能を使用してファイルの内容を検索できます。

バックアップ アーカイブに含まれるファイルのフルテキスト インデックスが作成されるのは、Google デスクトップと Windows サーチにより認識されるファイルの種類だけです。認識されるデータとしては、テキスト ファイル、Microsoft Office ファイル、Microsoft Office Outlook や Microsoft Outlook Express のすべてのアイテムなど、さまざまなものがあります。

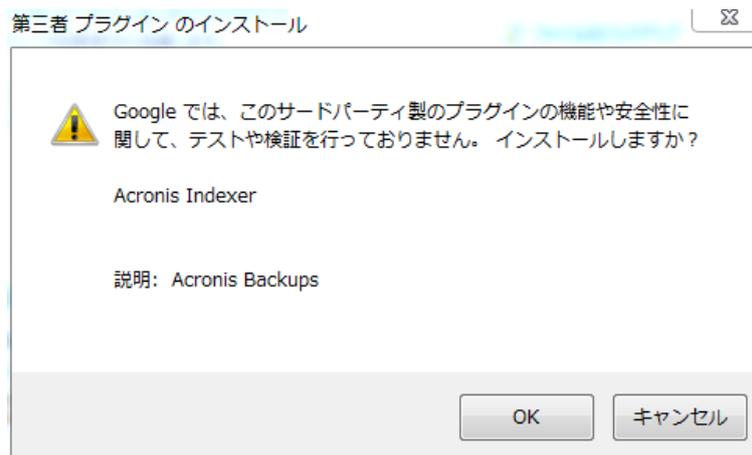
Google デスクトップおよび Windows サーチは Acronis Secure Zone にアクセスできないため、これらの検索エンジンを使用してゾーン内のアーカイブを検索したり、インデックスを作成したりすることはできません。

15.2.1 Google デスクトップと Acronis True Image HD の組み合わせ

Google デスクトップを所有していない場合は、Google のウェブサイトから無料でダウンロードできます。[Google デスクトップ] をクリックし、ダウンロードとインストールの手順に従います。

tib アーカイブ内のファイル検索に Google デスクトップを利用するための手順は、次のとおりです。

1. プラグインをインストールするには、サイドバーで **[ツールとユーティリティ]** を選択します。右側ペインで **[検索設定]** をクリックし、[デスクトップ検索オプション] ウィンドウで該当するチェックボックスをオンにします。次のウィンドウが表示されます。



2. プラグインがインストールされていることを確認します。システムトレイにある Google デスクトップのアイコンを右クリックし、コンテキストメニューから [オプション] を選択します。Google デスクトップにより、ブラウザに [設定] ウィンドウが表示されます。[インデックス作成のプラグイン] 領域で [Acronis Indexer (Acronis バックアップ)] が選択されていることを確認します。



3. システムトレイの Google デスクトップのアイコンを再度右クリックし、[インデックスの作成] → [インデックスの再作成] の順に選択します。表示される確認ウィンドウで [はい] をクリックします。Google デスクトップにより、新しいコンテンツがすべて既存のインデックスに追加されます。

Google デスクトップによりコンピュータのハードディスク上にあるすべての tib ファイルのインデックスが作成され、そのインデックス情報がインデックス データベースに追加されるまでには、多少の時間がかかります。所要時間は tib アーカイブとそれに含まれるファイル数によって異なります。

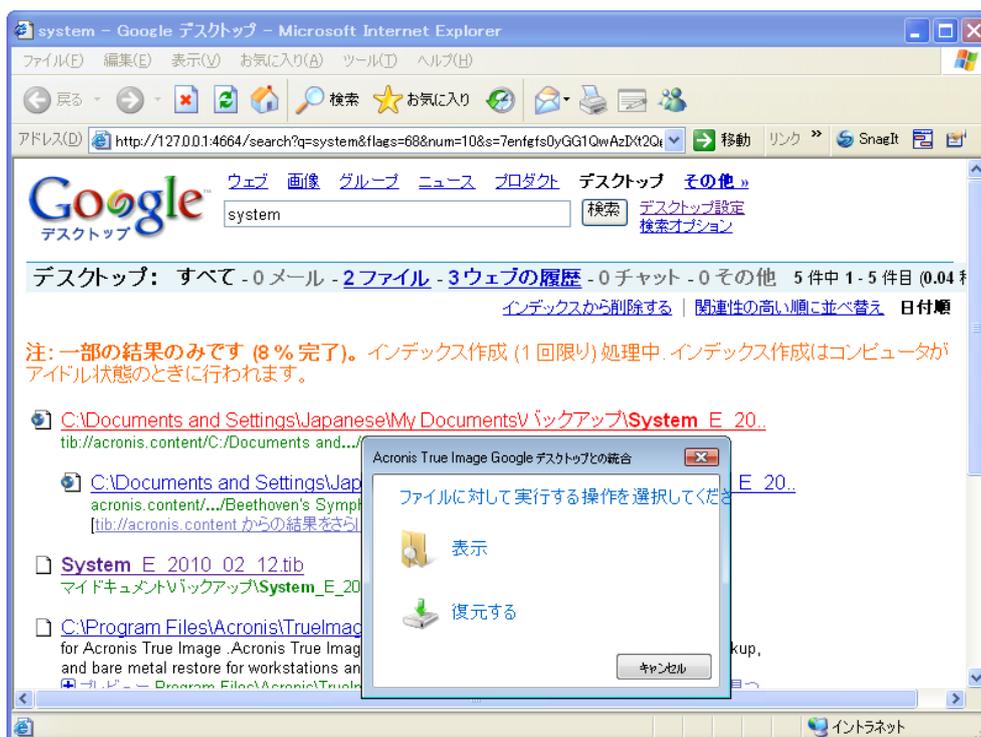
たとえば 1 時間後などに、バックアップしたことを把握しているファイルの名前をクエリ フィールドに入力して、Google デスクトップによって tib アーカイブのインデックスが作成されたかどうか確認します。Google デスクトップでインデックスの作成を完了している場合は、ファイルが見つかった tib アーカイブが表示されます。



検索結果をすべて表示するには、[すべての結果] をクリックします。次のスクリーン ショットのような検索結果が表示されます。



ブラウザ ウィンドウで任意のファイル バージョンに対応する行をクリックすると、**[開く]** と **[リカバリする]** の 2 つのオプションのみが表示された小さいダイアログが開きます。



[開く] を選択すると、このファイルの種類に対応するアプリケーションが起動され、そのファイルが開かれます。 **[リカバリする]** を選択すると、Acronis True Image HD が起動し、ファイルを任意の場所にリカバリすることができます。

15.2.2 Windows Search と Acronis True Image HD の組み合わせ

デスクトップ検索機能が組み込まれているいずれかのエディションの Windows Vista または Windows 7、あるいは Windows デスクトップ サーチ 3.0 以降を使用している場合、Windows Search で tib ファイルをサポートすることができます。

Windows Search をインストールしていないが使用したい場合は、Microsoft のウェブサイトから Windows Search 4.0 を無料でダウンロードできます。ダウンロードするには、**[Windows Search 4.0]** をクリックします。ダウンロードしたファイルをダブルクリックしてインストール手順に従います。

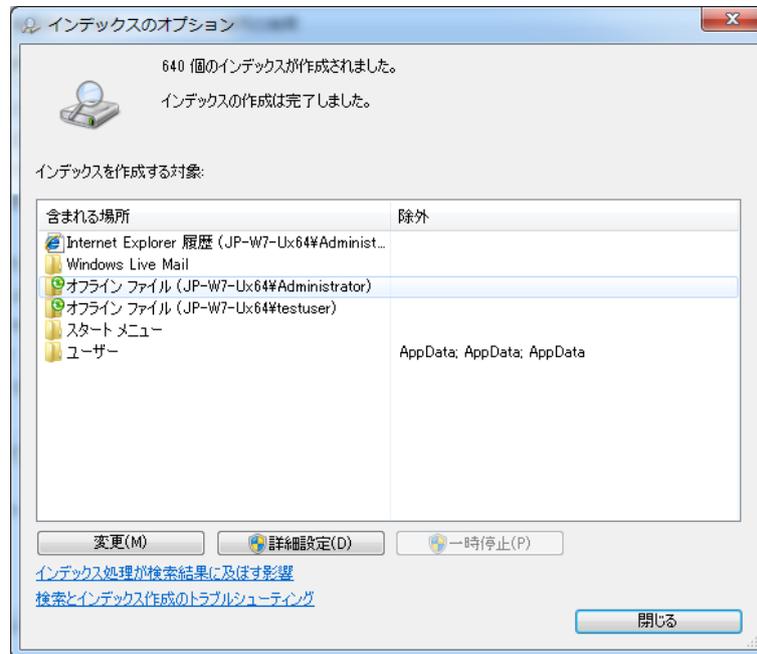
Windows Search は、zip ファイル コンテンツのインデックス作成には対応していません。

Windows Search を使用するための手順は、次のとおりです。

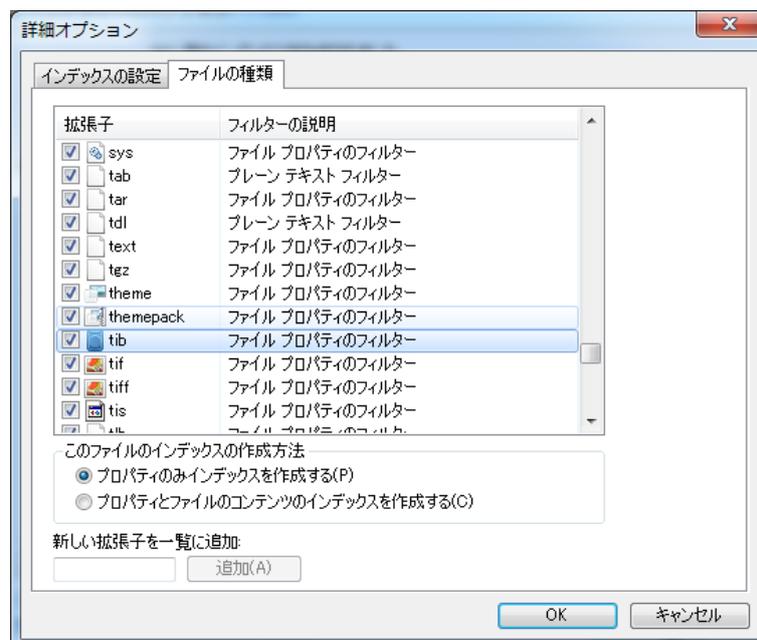
1. プラグインを登録するには、サイドバーで **[ツールとユーティリティ]** を選択します。右側ペインで **[検索設定]** をクリックし、**[デスクトップ検索オプション]** ウィンドウで該当するチェックボックスをオンにします。プラグインが正常に登録されると、Acronis True Image HD によって「プラグインの登録に成功しました」という情報が記載されたウィンドウが表示されます。
2. tib のサポートが有効になっていることを確認します。システムトレイにある Windows Search アイコンを右クリックし、コンテキストメニューで **[Windows デスクトップ サーチのオプション...]** を選

択します。次のウィンドウが表示されます。[含まれる場所]の一覧に「tib://...」という項目が表示されていることを確認します。

Windows Vista で [インデックスのオプション] ウィンドウを開くには、コントロール パネルを開いてから [インデックスのオプション] アイコンをダブルクリックします。Windows Vista のインデックスのオプションでは内容や外観が多少異なりますが、以下の説明の大部分は Windows Vista にも当てはまります。

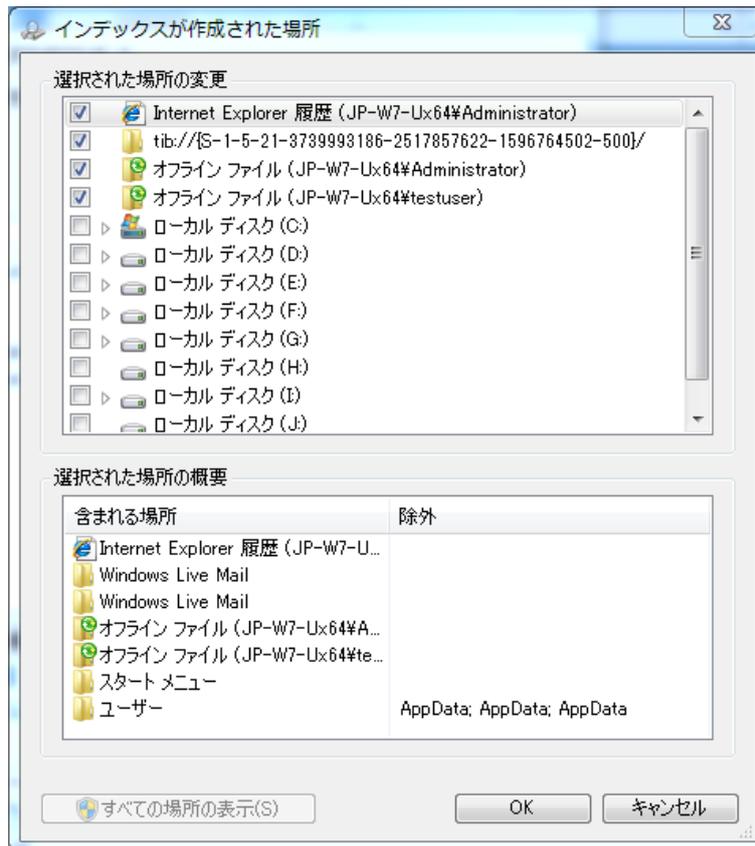


3. [詳細設定] をクリックして [ファイルの種類] タブを選択し、tib 拡張子が選択されており、[フィルタの説明] フィールドに「.tib IFilter」が表示されていることを確認します。[プロパティとファイルのコンテンツのインデックスを作成する] を選択します。



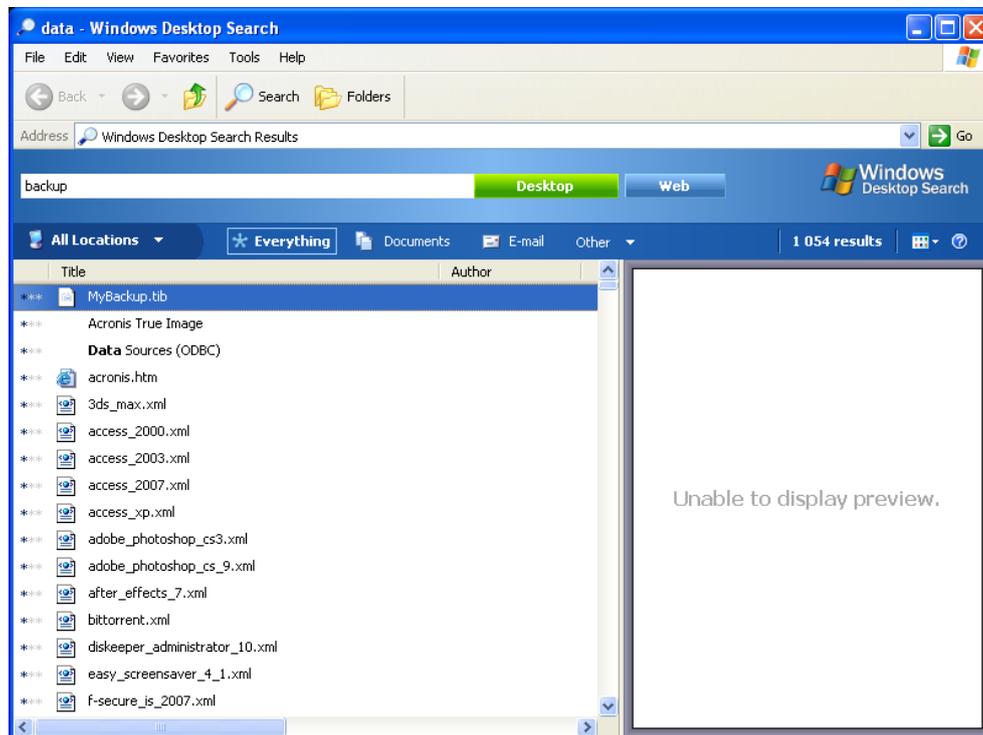
4. [OK] をクリックし、[インデックスのオプション] ウィンドウで、tib バックアップアーカイブが保存されているディスクが [含まれる場所] の一覧に表示されていることを確

認めます。そのディスクが含まれていない場合、TIB ファイルのインデックスは作成されません。ディスクを追加するには、**[変更]** をクリックし、表示されたウィンドウでそのディスクを選択します。

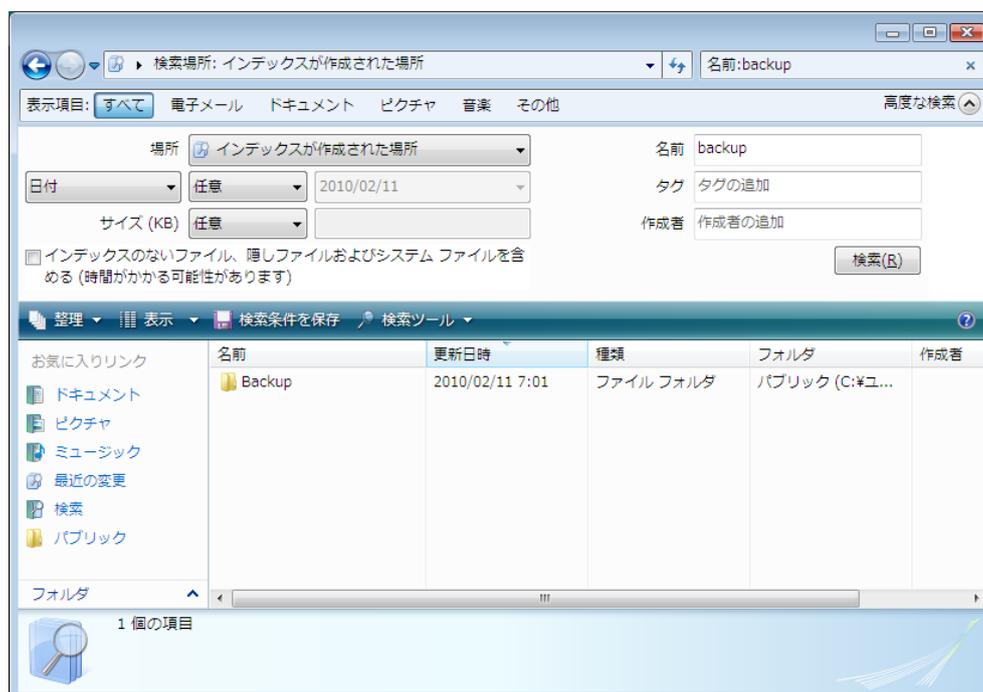


バックアップをネットワーク共有に保存している場合も、Windows Search でインデックスを作成できます。必要な作業は、その共有を [含まれる場所] の一覧に追加することだけです。入力するには、**[詳細オプション]** の **[UNC の場所の追加]** タブを選択して、適切な UNC パスを [UNC パスの追加] に入力します。

Windows Search によりコンピュータのハードディスク上にあるすべての tib ファイルのインデックスが作成され、そのインデックス情報がインデックス データベースに追加されるまでには、多少の時間がかかります。所要時間は tib アーカイブとそれに含まれるファイル数によって異なります。インデックスの作成が完了すると、デスクトップ サーチにより tib バックアップ アーカイブ内のファイルを検索できるようになります。WDS および Windows Vista の検索エンジンは同様に機能しますが、検索結果の表示方法は異なります。



Windows Search の検索結果



Windows Vista の検索結果

16 その他の操作

16.1 バックアップ アーカイブのベリファイ

ベリファイの手順では特定のバックアップからデータをリカバリできるか確認します。次のように、選択したバックアップによってベリファイ対象が異なります。

- 完全バックアップを選択すると、プログラムはその完全バックアップのみをベリファイします。
- 増分バックアップを選択すると、プログラムは最初の完全バックアップ、選択した増分バックアップ、および選択した増分バックアップ以前に作成された一連のバックアップがあれば、これをすべてベリファイします。

この情報は、たとえば、完全バックアップおよび一連の増分バックアップで構成されるバックアップ アーカイブが破損していることが分かった場合に役立ちます。アーカイブのトラブルシューティングを行う手順は、次のとおりです。最初に完全バックアップをベリファイします。これが破損している場合は、アーカイブ全体が使用できません。破損していない場合は、増分バックアップを古いものから順にベリファイします。問題となっている増分バックアップが見つかるまで続けます。破損している増分バックアップ以降の増分バックアップはすべて使用できませんが、少なくともそれ以前のバックアップからのデータのリカバリは可能です。

このようなベリファイ作業は、**ベリファイ ウィザード**を使用して行います。

1. アーカイブをベリファイするには、サイドバーで **[リカバリ]** をクリックします。
2. ベリファイするアーカイブを選択し、ツールバーで **[ベリファイ]** をクリックします。
3. **[実行]** をクリックすると、ベリファイ処理が開始されます。ベリファイが完了すると、結果ウィンドウが表示されます。**[キャンセル]** をクリックすると、ベリファイをキャンセルできます。

16.2 タスクとログの表示

Acronis True Image HD ではタスクとログの画面が提供されており、操作ログを参照することができます。ログには、たとえばバックアップの作成や検証結果（失敗の場合の理由を含む）についての情報が表示されます。

Acronis True Image HD のほとんどの処理では独自のエントリがログに記述されますが、イメージのマウント/アンマウントとブータブル メディアの作成ではログは提供されません。

また、Acronis オンライン バックアップの処理については一部の情報のみがログに含まれます。これらの機能の処理についてのその他の情報は、独自のログに記述されます。このログはアクロニスのサポート スタッフが、これらの機能の問題をトラブルシューティングするのに役立てることを目的としているため、ユーザーは使用できません。ログは、Acronis システム レポートに含まれています。

[タスクとログ] 画面を開くには、サイドバーの **[タスクとログ]** をクリックします。デフォルトでは、**[ログ]** タブが選択された状態で画面が開きます。このタブには、選択した日付のログが表示されます。その日付のログがない場合は、該当するメッセージが表示されます。

カレンダーの色のマークは、エラーが発生した完了タスクと正常に完了したタスクがある日付についての情報を示します。現在の日付は、太字で強調表示されています。スケジュールされたタスクでマークされている日付をクリックすると、その日付にスケジュールされているタスクが表示されます。

カレンダーの両側にある左右の矢印のボタンを使用すると、カレンダーに表示される月を変更できます。数か月前または数か月後に移動した場合、【今日】 ボタンをクリックすると、現在の月および日付にすばやく戻れます。

過去の日付をクリックすると【ログ】 タブに移動し、選択した日付のログが表示されます。その日付のログがない場合は、該当するメッセージが表示されます。

【ログ】 タブを選択すると、上側ペインにはカレンダー、下側ペインにはログの内容が表示されます。



特定の期間のログを確認するには、【表示期間】の領域で【開始日:】および【終了日:】フィールドの右向き矢印をクリックして期間を選択します。【開始日:】フィールドの矢印をクリックすると、ポップアップ カレンダーが開くので、任意の日付をダブルクリックして期間の開始日を設定できます。次に、同じように【終了日:】フィールドに終了日を入力します。ポップアップ カレンダーの月の名前の部分にある左右の矢印を使用して、月や年を変更することができます。また、目的の期間の開始日と終了日を直接そのフィールドに入力することもできます。ログをすべて表示する場合は、【すべて表示】 ボタンをクリックします。

ログのエントリを削除するには、エントリを選択してツールバーの【削除】 ボタンをクリックします。ログのエントリをすべて削除するには、【すべて削除】 ボタンをクリックします。また、【保存】 ボタンをクリックしてログ エントリをファイルに保存することもできます。すべてのログをファイルに保存するには、【すべて保存】 をクリックします。

ログに表示されたいずれかのステップがエラーで終了した場合、対応するログには赤い円内に白い「x」のマークが付けられます。

右側の 3 つのボタンはメッセージのフィルタ処理を制御します。赤い円内に白い「x」のマークはエラー メッセージをフィルタし、黄色の三角に感嘆符のマークは警告をフィルタし、青い丸に「i」のマークは情報メッセージをフィルタします。

現在のステップの詳細を見やすく表示するため、カレンダー ペインの右上部にある上向き矢印をクリックしてカレンダーを非表示にすることができます。これにより、ログの領域が広がります。カレンダーを再度表示するには、カレンダー ペインの右上にある下向きの矢印をクリックします。

16.3 バックアップ アーカイブの管理

古いバックアップや不要になったバックアップを削除して新しいバックアップのために領域を空けるなど、バックアップ アーカイブの管理をする必要が生まれることがあります。Acronis True Image HD でバックアップ アーカイブを作成すると、アーカイブの情報がメタデータ情報データベースに保存されるので、バックアップ アーカイブの管理（たとえば、バックアップ アーカイブの削除や移動）を行うときは、Windows エクスプローラではなく、必ず Acronis True Image HD のツールを使用してください。バックアップ アーカイブの管理を行うには、サイドバーの [リカバリする] を選択して、[データ リカバリとバックアップの管理] 画面を開きます。

[ディスクのバックアップ] タブに表示されるのはイメージ バックアップです。



希望するバックアップ アーカイブを右クリックして開くショートカット メニューで、バックアップに対して次の処理を実行できます。

- **参照** - 「アーカイブの参照およびイメージのマウント 『91ページ』」を参照してください。
- **リカバリする** - 「リカバリ ウィザード - 詳細情報 『74ページ』」を参照してください。
- **ベリファイ** - 「バックアップ アーカイブの検証 『104ページ』」を参照してください。
- **イメージのマウント** (イメージの場合のみ) - 「イメージのマウント」を参照してください。
- **コメントの編集** - バックアップ作成時に付けられたコメントの編集や、スケジュールに従って無人で実行されたバックアップのコメントの追加が可能です。
- **名前の変更** - バックアップ アーカイブまたは個々のバックアップの名前を変更します (バックアップの名前の変更が反映されるのは Acronis True Image HD のメタデータ データベースだけで、バックアップ ファイル名は変更されません)。

- **移動** - 「バックアップ アーカイブの移動 『107ページ 』」を参照してください。
- **削除** - 「バックアップ アーカイブの削除 『107ページ 』」を参照してください。
- **詳細** - 選択されているバックアップの詳細情報が表示されます。

16.4 バックアップ アーカイブの削除

不要になったバックアップやバックアップ アーカイブは削除することができます。Acronis True Image HD でバックアップ アーカイブを作成すると、アーカイブの情報がメタデータ情報データベースに保存されるので、不要なアーカイブ ファイルを Windows エクスプローラで削除しても、そのアーカイブに関する情報はデータベースからは削除されず、Acronis True Image HD からはそのアーカイブがまだ存在しているものと見なされます。その結果、既に存在していないバックアップに対してもプログラムが処理を実行しようとして、エラーが発生します。このため、必要のなくなったバックアップやバックアップ アーカイブを削除するときは、必ず Acronis True Image HD のツールを使用してください。バックアップ アーカイブ全体を削除するには、そのアーカイブを選択してツールバーで **[削除]** をクリックするか、バックアップ アーカイブの完全バックアップを右クリックしてショートカットメニューで **[削除]** を選択します。次の画面が表示されます。



[削除] をクリックすると、バックアップ アーカイブがハードディスクからだけでなく、メタデータ情報データベースからも削除されます。

16.5 バックアップ アーカイブの移動

Acronis True Image HD でバックアップ アーカイブを別の場所に移動できるようになりました。これは、新しいバックアップのための領域を空けたいが、以前のバックアップ アーカイブを、たとえばネットワーク共有など、別の場所で保持したい場合に役立ちます。他にも、バックアップ アーカイブを保持するのに使用しているディスクをリカバリする場合があります。バックアップ アーカイブがリカバリ対象のハードディスクと同じハードディスクにある場合、プログラムではリカバリできません。バックアップ アーカイブを他のハードディスクに移動させる必要があります。

1. サイドバーで **[リカバリする]** をクリックしてから、移動させるアーカイブを選択します。

2. アーカイブを移動させるには、**[データ リカバリとバックアップの管理]** 画面でアーカイブを選択します。Acronis True Image HD では常にアーカイブ全体が移動するので、アーカイブが複数のバックアップで構成されている場合はどのバックアップでも選択できます。
3. 選択を完了したら右クリックし、ショートカット メニューで **[移動]** を選択します。
4. 移動が完了すると、**[データ リカバリとバックアップの管理]** 画面の **[パス]** の列でアーカイブのパスが変更されます。

17 新しいディスクへのシステムの転送

17.1 一般情報

コンピュータのユーザーの多くが、ハードディスクの容量不足を経験します。データ用の領域がなくなった場合は、次の章で説明しているようにデータ ストレージ専用別のディスクを追加することができます。

しかし、ハードディスクにオペレーティング システムやインストール済みアプリケーション用の十分な領域がないと、ソフトウェアの更新や新しいアプリケーションのインストールを行うことができなくなります。この場合は、システムを大容量のハードディスクに移行する必要があります。

システムを移行するには、まずコンピュータにディスクを取り付けなければなりません（詳細については「ハードディスクと起動順 『145ページ』」を参照してください）。コンピュータに別のハードディスク用のベイがなければ、ハードディスクを一時的に CD ドライブの場所に取り付けるか、または USB を使用して外付け型のターゲット ディスクに接続します。それができない場合は、ディスク イメージを作成してより大きなパーティションを持つ新しいハードディスクにリカバリすることで、ハードディスクのクローンを作成します。

自動と手動の 2 つの移行モードを使用できます。

自動モードでは、いくつかの簡単な操作を行うだけで、パーティション、フォルダ、およびファイルを含むすべてのデータを新しいディスクに移行することができます。元のディスクがブータブル(起動用)ディスクだった場合は、新しいディスクがブータブルになります。

元のディスクと新しいディスクの違いは、新しいディスクのパーティションの方が大きいという点だけです。その他は、インストールされたオペレーティング システム、データ、ディスク ラベル、設定、ソフトウェアを含みすべて同じになります。

自動モードでは、データの移行のみが実行されます。つまり、元のディスクのレイアウトを新しいディスクへ複製する処理が行われるだけです。その他の処理を行う場合は、クローン作成パラメータに関する追加の設定を行う必要があります。

手動モードでは、さまざまなデータ転送に対応できます。パーティションとデータの移行方法を次から選択することができます。

- 現状のまま
- 新しいディスク領域を元のディスクのパーティションに比例して配分
- 新しいディスク領域を手動で配分

プログラムの画面では、破損したパーティションの左上の隅に、赤い丸に白い「x」のマークが付きます。クローン作成を開始する前に、適切なオペレーティング システム ツールを使用して、ディスクにエラーがないかどうかを調べ、エラーがあれば修正する必要があります。

現在のバージョンの Acronis True Image HD では、ダイナミック ディスクのクローン作成はサポートされていません。

移行方法を選択する前に、ソース ハード ドライブとターゲット ディスクについて、特定の情報を確認しておく必要があります。

1. ハードウェアが UEFI をサポートしているかどうか

UEFI は比較的新しい標準であるため、すべてのシステムでサポートされているわけではありません。また Windows Vista SP1 より前の 32 ビット Windows および 64 ビット Windows では、UEFI での起動がサポートされていません。

また移行を開始する前に、現在、オペレーティング システムが BIOS と UEFI のどちらで起動されているかを確認する必要があります。システムで UEFI がサポートされているかどうかを確認する場合、および、UEFI からの起動を有効または無効にする方法を確認する場合は、「統合拡張可能ファームウェア インターフェイス」セクションを参照してください。

2. オペレーティング システムが GPT をサポートしているかどうか

ターゲット ディスクの容量が 2 TB よりも大きい場合、2 TB を超えるディスク領域を使用するには、ディスクを GPT スタイル 『117ページ』に変換する必要があります。また、MBR パーティション スタイルの場合、Windows では、アクセス可能な容量は最大 2 TB になります。

一部のオペレーティング システムは GPT をサポートしていないため、ソース パーティションのオペレーティング システムが GPT をサポートしていることを確認します。オペレーティング システムが GPT をサポートしているかどうかを確認するには、トピックの「パーティション レイアウト 『117ページ』」を参照してください。

3. ターゲット ディスク サイズが 2 TB よりも大きいかどうか

ターゲット ハード ドライブが 2 TB よりも大きい場合、使用可能なオプションの説明については、表 1 『117ページ』を参照してください。

システムを移行するハード ドライブが 2 TB よりも小さい場合、使用可能なオプションの説明については、表 2 『120ページ』を参照してください。

17.2 セキュリティ

転送の実行中にコンピュータの電源が切れた場合や、誤って【リセット】が押された場合は、転送処理は未完了となるため、ハードディスクのパーティション作成とフォーマットまたはクローン作成をもう一度行う必要があります。

元のディスクは読み取り専用で、パーティションやサイズが変更されるわけではないので、データが失われることはありません。システム転送手順を実行しても、元のディスクは一切変更されません。手順の完了後に、古いディスクをフォーマットするか、含まれているデータを完全に消去することをお勧めします。これらのタスクには、Windows のツールまたは Acronis DriveCleanser を使用します。

ただし、元のディスクのデータはすぐには削除しないことをお勧めします。データが新しいディスクに正しく転送されて、そのディスクからコンピュータが正常に起動し、すべてのアプリケーションが動作していることを確認するまでは、削除しないでください。

17.3 転送の実行

転送を効率的に行うには、転送先（新しい）ドライブをコンピュータに取り付けてから、転送元ドライブを別の場所（たとえば外付けの USB エンクロージャ）に取り付けます。特にラップトップ コンピュータの場合は、このとおりにすることをお勧めします。

クローンの作成を開始するには、メイン プログラム メニューの **[ツールとユーティリティ]** → **[ディスクのクローン作成]** の順に選択します。

ステップごとの説明については、「ディスクのクローン作成 『112ページ』」セクションを参照してください。

18 ディスク管理

Acronis True Image HD には、多機能で使いやすいハードディスク ユーティリティがあります。新しいディスクの追加ウィザードを使用すると、コンピュータに新しいハードディスクを容易に追加できます。拡張容量マネージャでは、2 TB を超えるハードディスク領域を割り当てることができます。SSD のトリミング ウィザードでは、ソリッド ステート ドライブ (SSD) での書き込み操作の速度を改善できます。



新しいディスクの追加

新しいディスクの追加ウィザードを使用すると、コンピュータに新しいハードディスク ドライブを容易に追加できます。パーティションを作成しフォーマットして、このハードディスク ドライブを使用できるようにします。

[新しいディスクの追加] 項目をクリックすると、新しいディスクの追加ウィザードが起動します。



拡張容量マネージャ

拡張容量マネージャ 『28ページ』により、2 TB を超えるハードディスク領域全体を割り当てて使用できるようになります。

[ディスクの拡張容量] 項目をクリックすると、拡張容量マネージャ ウィザード 『28ページ』が起動します。



Trim SSD

Windows Vista 以前で動作しているソリッド ステート ドライブ (SSD) で書き込み操作の速度の自然な低下を緩和するには、SSD のトリミング ウィザード 『132ページ』を使用します。

SSD のトリミング ウィザードを起動して、マシンに接続されている SSD ストレージ デバイスのパフォーマンスを最適化するには、**[Trim SSD]** 項目をクリックします。

18.1 ディスクのクローン作成

オペレーティング システムやインストールされたアプリケーション用の領域が不足すると、ソフトウェアを更新できなくなります。この場合は、システムを大容量のハードディスクに移行する必要があります。

Acronis True Image HD では、あるディスクのデータをすべて別のデータに転送する(ディスクのクローン作成)手順を簡単に実行できます。

ディスクのクローンを作成する手順は、次のとおりです。

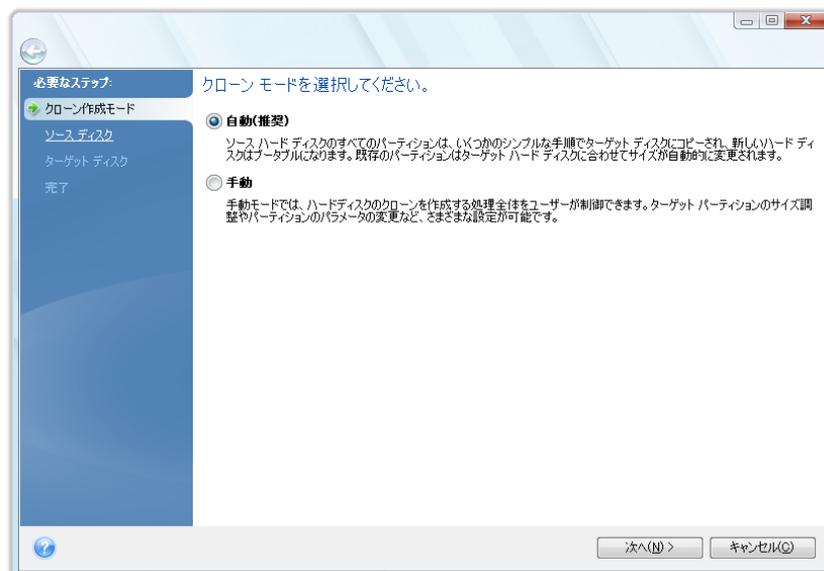
- サイドバーの **[ツールとユーティリティ]** をクリックして **[ディスクのクローン作成]** を選択するか、ツールバーの **[ツールとユーティリティ]** をクリックして **[ディスクのクローン作成]** を選択します。
- **ディスクのクローン作成ウィザード**のステップを順に実行します。
 - クローン作成モードの選択

- ソース ディスクの選択
- ターゲット ディスクの選択
- 移行方法
- 手動レイアウト
- クローン作成の概要

18.1.1 クローン作成モードの選択

使用可能な移行モードには次の 2 種類があります。

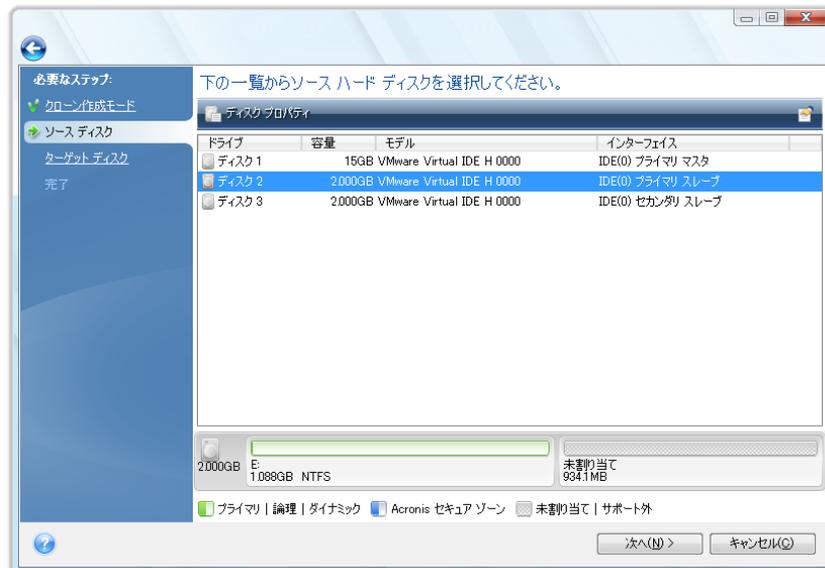
- **【自動】**（ほとんどの場合は自動モードの使用をお勧めします）-自動モードでは、いくつかの簡単な操作を行うだけで、選択したデータを新しいディスクに移行することができます。元のディスクがブータブル（起動用）ディスクだった場合は、新しいディスクがブータブルになります。
- **【手動】** -手動モードではデータ移行の柔軟性は同じですが、新しいディスクのパーティションのレイアウト、種類、属性をより制御できます。たとえば手動モードは、ディスク パーティションのレイアウトを変更したり、パーティション ラベルを再割り当てしなくてはならない場合に便利です。



パーティションが作成されているディスクと作成されていないディスクの 2 つが検出されると、プログラムはパーティションが作成されているディスクをソース ディスク、作成されていないディスクをターゲット ディスクとして自動的に認識するため、その後の 2 つの手順は省略されます。

18.1.2 ソース ディスクの選択

このウィンドウに表示される情報（ディスク番号、容量、ラベル、パーティション、およびファイル システムの情報）を参照して、移行元と移行先を決定することができます。パーティションを持つディスクが複数検出されたときは、ソース ディスク（つまり、古い方のデータ ディスク）を指定するためのウィンドウが表示されます。



移行元ディスクを選択し、**[次へ]** をクリックして次に進みます。

現在のバージョンの Acronis True Image HD では、ダイナミック ディスクのクローン作成はサポートされていません。

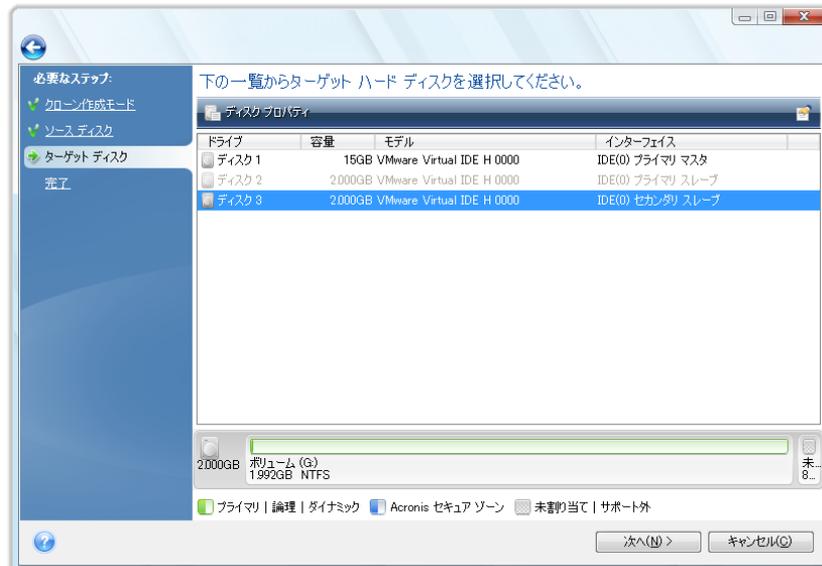
ディスクとパーティション情報の表示

- [項目] - 表示する項目を選択します。項目の境界をマウスでドラッグすると、項目の幅を変更できます。
- [ディスク プロパティ] (オブジェクトを右クリックすると表示されるコンテキスト メニューからもアクセス可能) - 選択したパーティションまたはディスクのプロパティのウィンドウを開きます。

このウィンドウは 2 つのペインで構成されています。左側のペインにはプロパティのツリーが、右側のペインには選択したプロパティの詳細な説明が表示されます。ディスク情報にはディスクの物理的なパラメータ（接続の種類、デバイスの種類、サイズなど）が表示されます。パーティション情報にはパーティションの物理的なパラメータ（セクタ、位置など）と論理的なパラメータ（ファイル システム、空き領域、割り当てられているドライブ文字など）の両方が表示されます。

18.1.3 ターゲット ディスクの選択

コピー元（ソース）のハードディスクを選択後、ディスク情報のコピー先（ターゲット）のハードディスクを選択します。前のウィンドウでソースとして選択したディスクはグレー表示になり、選択できなくなっています。



ターゲット ディスクを選択し、**[次へ]** をクリックして先に進みます。

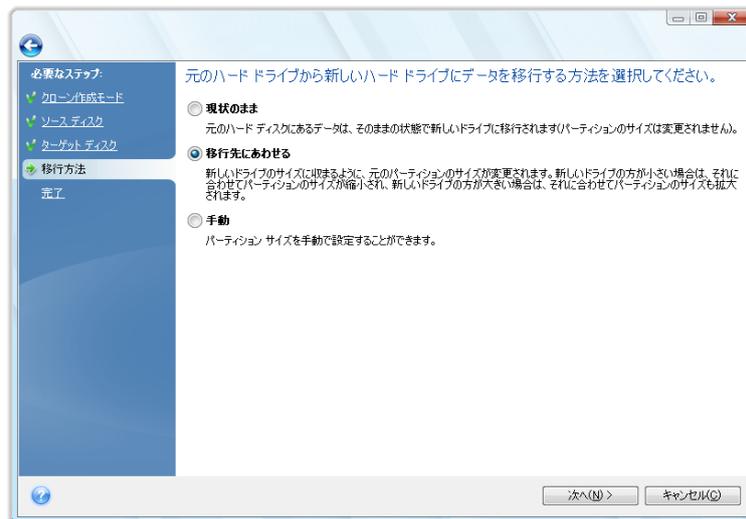
いずれかのディスクにパーティションが作成されていない場合は、プログラムが自動的にそのディスクを移行先として認識するため、この手順は省略されます。

18.1.4 移行方法

Acronis True Image HD で使用できるデータ転送方法には、次のものがあります。

- **[現状のまま]** - 古いパーティション 1 つにつき 1 つの新しいパーティションが、同一のサイズ、種類、ファイル システム、ラベルで作成されます。使用されない領域は未割り当てになります。
- **[移行先にあわせる]** - 新しいディスクの領域は、各パーティションの元の大きさに比例して配分されます。

- **[手動]** - 新しいサイズとその他のパラメータを指定できます。



[現状のまま] を選択すると、サポートされていないファイル システムや破損したファイル システムも転送されます。

18.1.5 移行方法

Acronis True Image HD では、クローン作成処理完了後にターゲット ディスクのパーティション レイアウトを選択できます。「パーティション レイアウト 『117ページ』」を参照してください。

ソースおよびターゲット ハード ドライブのパラメータに応じて、該当する使用可能なオプションを表で確認できます。ターゲット ディスクが 2 TB よりも大きい場合は表 1 『117ページ』、ターゲット ディスクが 2 TB 未満の場合は表 2 『120ページ』を参照してください。

移行方法を選択する前に、ソース ハード ドライブとターゲット ディスクについて、特定の情報を確認しておく必要があります。

1. ハードウェアが UEFI をサポートしているかどうか

UEFI は比較的新しい標準であるため、すべてのシステムでサポートされているわけではありません。また Windows Vista SP1 より前の 32 ビット Windows および 64 ビット Windows では、UEFI での起動がサポートされていません。

また移行を開始する前に、現在、オペレーティング システムが BIOS と UEFI のどちらで起動されているかを確認する必要があります。システムで UEFI がサポートされているかどうかを確認する場合、および、UEFI からの起動を有効または無効にする方法を確認する場合は、「統合拡張可能ファームウェア インターフェイス」セクションを参照してください。

2. オペレーティング システムが GPT をサポートしているかどうか

ターゲット ディスクの容量が 2 TB よりも大きい場合、2 TB を超えるディスク領域を使用するには、ディスクを GPT スタイル 『117ページ』に変換する必要があります。また、MBR パーティション スタイルの場合、Windows では、アクセス可能な容量は最大 2 TB になります。

一部のオペレーティング システムは GPT をサポートしていないため、ソース パーティションのオペレーティング システムが GPT をサポートしていることを確認します。オペレーティング システムが GPT をサポートしているかどうかを確認するには、トピックの「パーティション レイアウト 『117ページ』」を参照してください。

3. ターゲット ディスク サイズが 2 TB よりも大きいかどうか

ターゲット ハード ドライブが **2 TB よりも大きい**場合、使用可能なオプションの説明については、表 1 『117ページ』 を参照してください。

システムを移行するハード ドライブが **2 TB よりも小さい**場合、使用可能なオプションの説明については、表 2 『120ページ』 を参照してください。

パーティション レイアウト

パーティション レイアウトによって、オペレーティング システムがハード ドライブ上のパーティションを整理する方法が決まります。

- **MBR (マスター ブート セクタ)** : ディスクのプライマリ パーティション テーブルを格納するための 512 バイトのブート セクタ。ディスクの第 1 セクタです。

MBR は標準的なパーティション スキームです。ほとんどのハード ドライブで使用されています。MBR の主な制約としては、ハードディスクのサイズを最大 2 TB までしかサポートしていないことが挙げられます。そのため、大容量ハード ドライブを使用しても 2 TB を超える領域を使用できません。
- **GPT (GUID パーティション テーブル)** : MBR よりも新しい、標準的なハードディスク用パーティション テーブル レイアウト。

GPT では最大 9.4 ZB (9.4 × 10²¹ バイト) までのディスク/パーティション サイズが可能です。

次の表は、GPT ディスクの読み取りや GPT ディスクからの起動を、どのオペレーティング システムがサポートしているかを示しています。

	GPT ディスクを読み取り可能	GPT ディスクから起動可能
Windows XP x32	×	×
Windows XP x64	○	×
Windows Vista x32	○	×
Windows Vista x64	○	×
Windows Vista x64 SP1 以降	○	○
Windows 7 x32	○	×
Windows 7 x64	○	○

表 1: ターゲット ディスクが 2 TB を超えている

下の表は、ソース ディスクを大容量ハードディスク (2 TB を超えるもの) に移行する場合に使用可能なオプションを示しています。

ソース ディスクが MBR の場合、ターゲット ディスクを MBR のままにするか、Acronis True Image HD を使用して GPT に変換するかを選択する必要があります。

各オプションの長所と短所は、お使いのシステムのパラメータによって異なります。多くは、ターゲット ディスクのブータビリティと大容量ディスクの領域全体を使用できるかどうかに関係しています。

	システムは BIOS 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)	システムは UEFI 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)
<p>ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしていない</p>	<p>クローン作成後、パーティション スタイルは MBR のままとなります。クローン作成したオペレーティング システムに Acronis Bus ドライバがインストールされます。また、MBR は 2 TB を超えるハード ドライブをサポートしていないため、2 TB を超えるディスク領域は使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、パーティション スタイルを GPT に変更するか、または処理完了後に Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 拡張容量マネージャを使用して、2 TB を超えるディスク領域を Windows ディスク管理ツールで認識できるようにする必要があります。</p>	<p>次のいずれかの移行方法を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ ソース パーティションを変更せずにコピーする <p>パーティション スタイルは MBR のままとなります。処理完了後、UEFI からオペレーティング システムを起動できない場合があります。クローン作成したオペレーティング システムに Acronis Bus ドライバがインストールされます。また、MBR は 2 TB を超えるハード ドライブをサポートしていないため、2 TB を超えるディスク領域は使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、パーティション スタイルを GPT に変更するか、または処理完了後に Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 拡張容量マネージャを使用して、2 TB を超えるディスク領域を Windows ディスク管理ツールで認識できるようにする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ パーティション スタイルを GPT に変換する <p>ターゲットのパーティションが GPT スタイルに変換されます。お使いのオペレーティング システムは UEFI をサポートしていないため、システム ディスクではないディスクとして使用できません。すべてのディスク領域を使用できます。</p>

<p>ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしている</p>	<p>パーティション スタイルは移行後も MBR のままとなります。クローン作成したオペレーティング システムに Acronis Bus ドライバがインストールされます。MBR は 2 TB を超えるハード ドライブをサポートしていないため、2 TB を超えるディスク領域は使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、パーティション スタイルを GPT に変更するか、または処理完了後に Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 拡張容量マネージャを使用して、2 TB を超えるディスク領域を Windows ディスク管理ツールで認識できるようにする必要があります。</p>	<p>ターゲット ディスクのパーティション スタイルは自動的に GPT に変換されます。このディスクは、UEFI 起動用として使用できます。また、すべてのディスク領域を使用できます。</p>
<p>ソース ディスクは MBR であり、OS は Windows 以外または OS がない</p>	<p>次のいずれかの移行方法を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ ソース パーティションを変更せずにコピーする <p>パーティション スタイルは MBR のままとなります。MBR は 2 TB を超えるハード ドライブをサポートしていないため、2 TB を超えるディスク領域は使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、パーティション スタイルを GPT に変更するか、または処理完了後に Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 拡張容量マネージャを使用して、2 TB を超えるディスク領域を Windows ディスク管理ツールで認識できるようにする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ パーティション スタイルを GPT に変換する <p>処理完了後、パーティション スタイルは GPT に変換されます。ソース ディスクに Windows オペレーティング システムがインストールされていないため、ターゲット ディスクを起動用として使用できません。すべてのディスク領域を使用できます。</p>	<p>次のいずれかの移行方法を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ ソース パーティションを変更せずにコピーする <p>パーティション スタイルは MBR のままとなります。MBR は 2 TB を超えるハード ドライブをサポートしていないため、2 TB を超えるディスク領域は使用できません。すべてのディスク領域を使用するには、パーティション スタイルを GPT に変更するか、または処理完了後に Acronis True Image HD を再起動し、Acronis 拡張容量マネージャを使用して、2 TB を超えるディスク領域を Windows ディスク管理ツールで認識できるようにする必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ パーティション スタイルを GPT に変換する <p>ターゲットのパーティションが GPT スタイルに変換されます。ソース ディスクに Windows オペレーティング システムがインストールされていないため、ターゲット ディスクを起動用として使用できません。また、すべてのディスク領域を使用できます。</p>

ソース ディスクは GPT であり、OS は UEFI をサポートしている	パーティション スタイルは移行後も GPT のままとなります。お使いのオペレーティング システムは GPT からの BIOS 起動をサポートしていないため、処理完了後、システムは BIOS から起動できなくなります。すべてのディスク領域を使用できます。	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは GPT のままとなり、ターゲット ディスクは UEFI 起動が可能となります。すべてのディスク領域を使用できます。
ソース ディスクは GPT であり、OS は Windows 以外または OS がない	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは GPT のままとなり、ターゲット ディスクは起動できません。すべてのディスク領域を使用できます。	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは GPT のままとなり、UEFI ではターゲット ディスクは起動できません。すべてのディスク領域を使用できます。

表 2: ターゲット ディスクが 2 TB 未満

下の表は、ソース ディスクを 2 TB 未満のハードディスクに移行する場合に使用可能なオプションを示しています。

ソース ディスクが MBR の場合、ターゲット ディスクを MBR のままにするか、Acronis True Image HD を使用して GPT に変換するかを選択する必要があります。

各オプションの長所と短所は、お使いのシステムのパラメータによって異なります。多くは、ターゲット ディスクのブータビリティに関係しています。

	システムは BIOS 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)	システムは UEFI 起動である (Windows または Acronis ブータブル メディア)
ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしていない	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは MBR のままとなり、ターゲット ディスクは BIOS 起動が可能となります。すべてのディスク領域を使用できます。	処理完了後、パーティション スタイルは MBR のままとなります。お使いのオペレーティング システムではサポートされていないため、UEFI 起動はできません。
ソース ディスクは MBR であり、OS は UEFI をサポートしている	この処理は、パーティション レイアウトにもディスクのブータビリティにも影響しません。パーティション スタイルは MBR のままとなり、ターゲット ディスクは BIOS 起動が可能となります。すべてのディスク領域を使用できます。	ターゲットのパーティションが GPT スタイルに変換され、ターゲット ディスクの UEFI 起動が可能になります。すべてのディスク領域を使用できます。

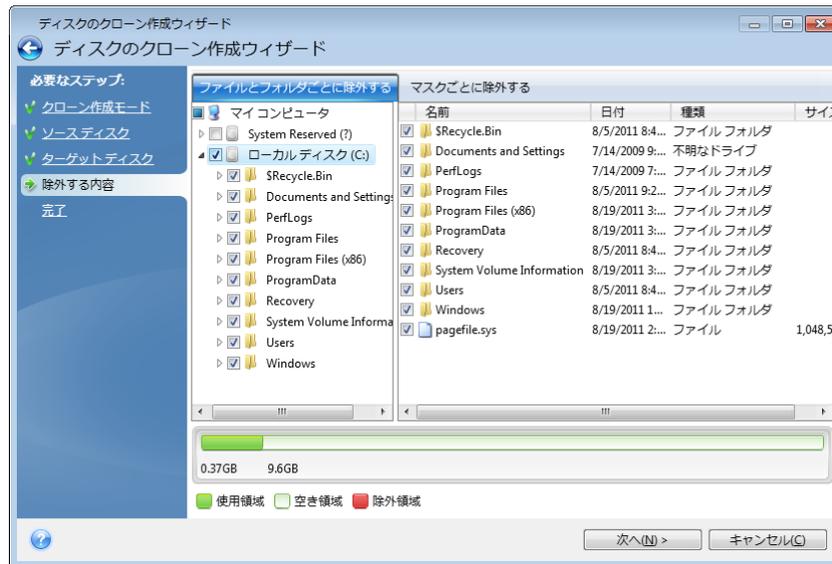
<p>ソース ディスクは MBR であり、OS は Windows 以外または OS がない</p>	<p>次のいずれかの移行方法を選択できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ ソース パーティションを変更せずにコピーする <p>パーティション スタイルは MBR のままとなります。システムに Windows オペレーティング システムが搭載されていないため、ターゲット ディスクは起動できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ パーティション スタイルを GPT に変換する <p>お使いのオペレーティング システムは GPT からの BIOS 起動をサポートしていないため、ターゲット ディスクは GPT スタイルに変換され、システム ディスクではないディスクとして使用されます。</p>	<p>次のいずれかの移行方法を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▪ ソース パーティションを変更せずにコピーする ▪ パーティション スタイルを GPT に変換する <p>パーティション スタイルは MBR のままとなります。システムに Windows オペレーティング システムが搭載されていないため、ターゲット ディスクは起動できません。</p> <p>お使いのシステムに Windows オペレーティング システムが搭載されていないため、ターゲットのパーティションは GPT スタイルに変換され、システム ディスクではないディスクとして使用されます。</p>
<p>ソース ディスクは GPT であり、OS は UEFI をサポートしている</p>	<p>処理完了後、パーティション スタイルは GPT のままとなります。お使いのオペレーティング システムは GPT からの BIOS 起動をサポートしていないため、システムは BIOS から起動できなくなります。</p>	<p>処理完了後、パーティション スタイルは GPT のままとなり、オペレーティング システムは UEFI 起動が可能となります。</p>
<p>ソース ディスクは GPT であり、OS は Windows 以外または OS がない</p>	<p>処理完了後、パーティション スタイルは GPT のままとなります。お使いのオペレーティング システムは GPT からの BIOS 起動をサポートしていないため、システムは BIOS から起動できなくなります。</p>	<p>処理完了後、パーティション スタイルは GPT のままとなります。お使いのシステムには Windows オペレーティング システムが搭載されていないため、システムは起動できません。</p>

18.1.6 除外する項目の指定

[除外する内容] セクションでは、ディスクのクローンに組み込まないファイルおよびフォルダの除外を設定できます。

1. 除外する項目の一覧を作成するには、次のうちいずれかを実行します。
 - **[ファイルとフォルダごとに除外する]** タブで、一般的なファイル ブラウザを使用し、ファイルおよびフォルダを選択します。
 - **[マスクごとに除外する]** タブでそれぞれのファイルおよびフォルダ(フル パスが必要)の名前を入力するか、一般的なワイルドカード文字 * および ? を使用してパターンを定義します。右側の **[追加]**、**[編集]**、**[削除]**、**[すべて削除]** の各ボタンを使用し、リストの項目のセットを制御します。

この 2 つの方法を組み合わせることができます。たとえばファイル マスクを定義し、ファイル ブラウザで特定の項目を選択します。



NTFS ハード リンクがあるファイルを選択するか、いずれかの方法で指定して除外する場合は、このハード リンクも選択するか指定してクローンから除外する必要があることに注意してください。このようにしないと、ファイルは除外されず、クローン作成後にターゲット ディスクに表示されます。

注意: ファイルを除外すると、除外した項目のサイズが計算され、クローンを作成するデータがターゲット ディスクに適合するかどうかを確認されます。この処理の完了には最大で数分かかることがあります。

2. 次のステップに進むには、**[次へ]** をクリックします。

空き領域が不十分であるという注意メッセージ

操作を実行するのに十分な空き領域がターゲット ハードドライブにないという注意メッセージが表示されることがあります。考えられる理由は次のとおりです。

- ソース ディスクからクローンを作成するデータの量が、ターゲット ディスクの使用可能容量を超えています。この問題を解決するには、クローンからより多くの項目を除外して **[次へ]** をクリックします。必要に応じて、この注意メッセージが表示されなくなるまで、この操作を数回繰り返します。
- サポートされていないファイル システムがソース ディスクにあり、ターゲット ディスクより大きくなっています。この場合、ターゲット ディスクのサイズはソース ディスクのサイズと同じかそれ以上であることが必要であり、さらに項目を除外しても意味がありません。
- サポートされているファイル システムとサポートされていないファイル システムの両方を含むパーティションがソース ディスクにはあります。サポートされているファイル システムを含むパーティションからクローンが作成されるデータの量とサポートされていないファイル システムを含むパーティションのサイズを足したものより、ターゲット ディスクの容量は小さくなります。この場合は、さらに項目を除外すると効果が上がることがあります。

除外の例

ソース ディスクのファイルとフォルダは、個別に、およびパターンに従って一括してクローンから除外できます。このようなパターンは、ファイル名かフォルダ名、または一般的なワイルドカード文字によって定義したファイル マスクにすることができます。

* - 0 以上の文字で置き換えられます。

? - 正確に 1 文字で置き換えられます。

必要に応じて、セミコロンで区切って複数の基準を同一行に入力できます。たとえば、.gif および .bmp の拡張子を持つすべてのファイルを除外する場合は、「*.gif;*.bmp」と入力します。

次の表では、除外の例をいくつか挙げて説明します。

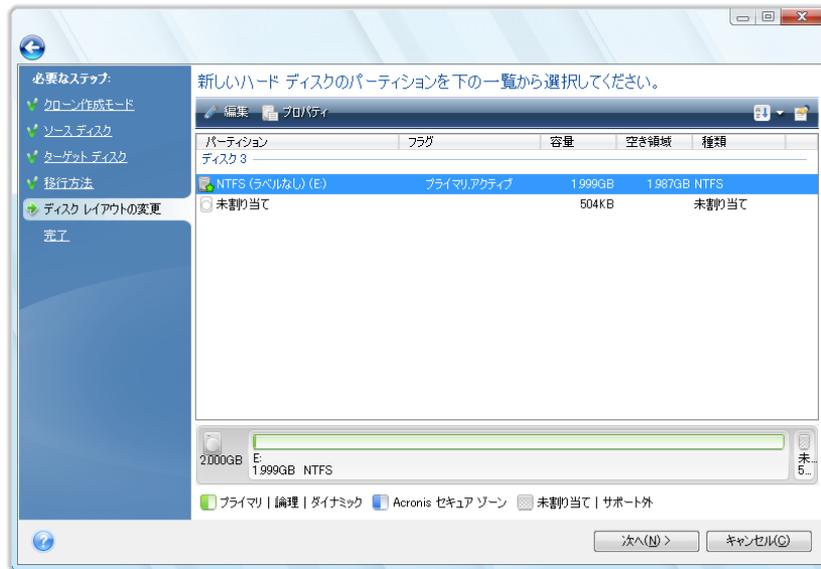
パターン	例	説明
名前	F.log	「F.log」という名前のファイルをすべて除外します。
	F	「F」という名前のフォルダをすべて除外します。
ファイルパス	C:\Finance\F.log	C:\Finance フォルダに置かれている「F.log」という名前のファイルを除外します。
フォルダパス	C:\Finance\F\	C:\Finance\F というフォルダを除外します（ディスクを表す文字および末尾のバックスラッシュ (\) から始まるフル パスを指定）。
マスク (*)	*.log	.log 拡張子の付いたファイルをすべて除外します。
	F*	「F」で始まる名前のファイルとフォルダをすべて除外します（フォルダ F、F1、ファイル F.log、F1.log など）。
マスク (?)	F???.log	「F」で始まる 4 文字の名前の .log ファイルをすべて除外します。

マスクのワイルドカードはファイル名またはフォルダ名の一部のみを表し、ファイル パスの一部を置き換えることはできません。サブフォルダは、バックスラッシュ「\」を使用して常に明示的に指定する必要があります。たとえばディレクトリ C:\Program Files\Acronis\TrueImageHome\ にある、ファイル名に「Qt」を含むすべてのファイルを除外するには、*\Prog*\Acr*\True**Qt*.??? という行を使用できます。

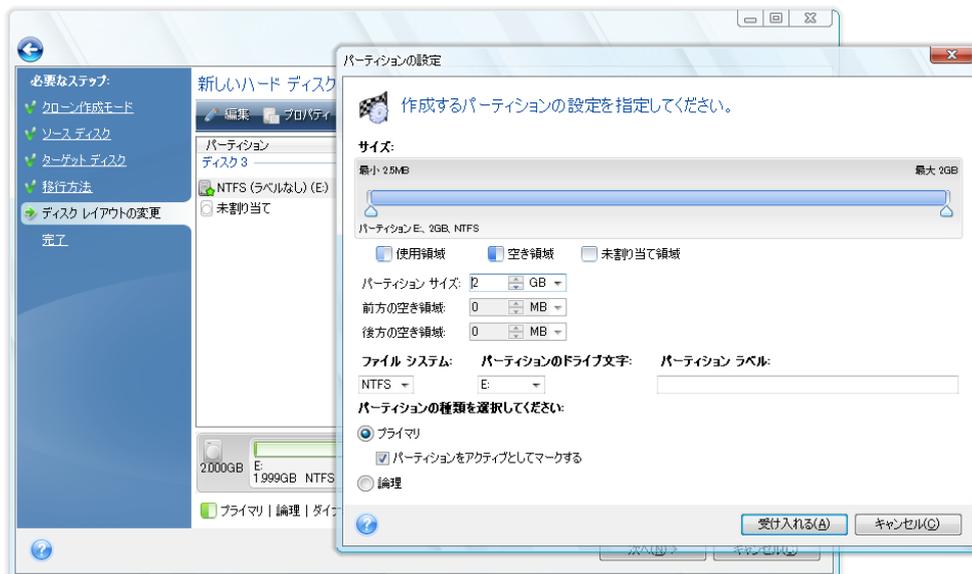
18.1.7 手動レイアウト

移行方法として [手動] を選択した場合は、新しいディスクのパーティションのサイズを変更できます。デフォルトでは、ソース ディスクとターゲット ディスクの容量の比率に応じて、サイズが変更されます。このウィンドウには、移行元のハードディスクを表す四角形と、各ディスクのパーティションおよび未割り当て領域、および新しいディスク レイアウトが表示されます。

ハードディスク番号とともに、ディスク容量、ラベル、ボリューム、およびファイル システム情報が表示されます。ボリュームの種類(プライマリ、論理、および未割り当ての領域)は、それぞれ異なる色で表示されます。



既存のボリュームのサイズ、ボリュームの種類、ドライブ文字またはラベルを変更するには、ボリュームを右クリックして **[編集]** を選択し、開いたウィンドウでパラメータを設定します。

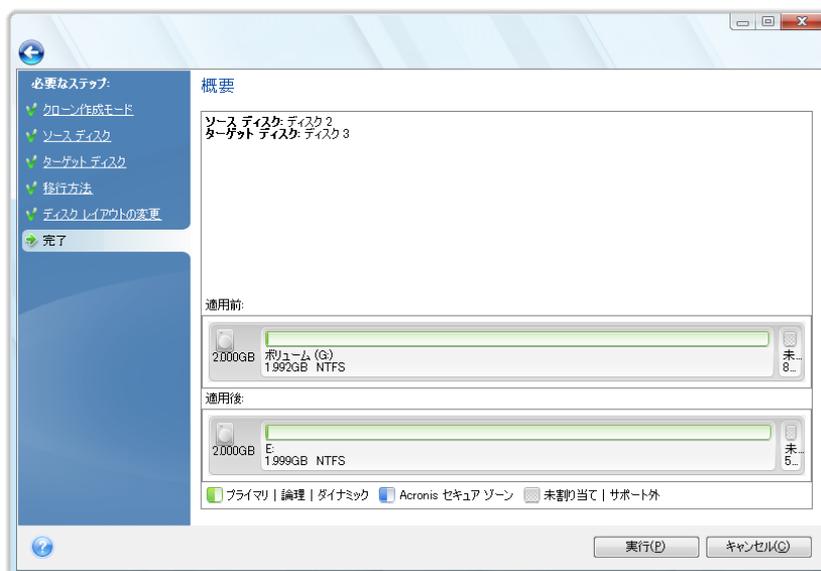


[次へ] をクリックすると、クローン作成の概要ウィンドウに進みます。

ご注意ください。 このウィンドウの **[戻る]** をクリックすると、選択されたサイズと位置の変更内容がすべてリセットされるため、もう一度指定し直す必要があります。

18.1.8 クローン作成の概要

ディスクのクローン作成の概要には、実行する操作の簡単な説明の一覧、およびクローンから除外されるファイル、フォルダ、ファイル マスクの一覧が含まれています。



- **【実行】** をクリックすると、ディスクのクローン作成が開始します。
- 処理をキャンセルしてメイン プログラム ウィンドウに戻るには、**【キャンセル】** をクリックします。

現在アクティブになっているオペレーティング システムが含まれているディスクのクローン作成の場合は、再起動が必要になります。**【実行】** をクリックした後に、再起動を要求するメッセージが表示されます。

再起動後に自動的に稼働しない場合は、コンピュータを手動で再起動し、ブート中にブート メニューを入力して **【Acronis ローター】** オプションを選択します。この操作によって稼働します。

クローン作成元のディスクがシステム ディスクではない場合、および OS が含まれていても現在アクティブになっていない場合は、コンピュータの再起動は不要です。**【実行】** をクリックすると、元のディスクから新しいディスクへのクローン作成処理が開始し、別のウィンドウに進行状況が表示されます。

18.2 新しいハードディスクの追加

ハードディスクにデータ（家族の写真や動画など）を保存するための十分な空き領域が存在しない場合は、古いハードディスクを新しい大容量のハードディスクに交換するか（新しいディスクへのデータ転送については前章で説明しています）、古いハードディスクをシステム用として残し、データ保存専用の新しいハードディスクを追加します。コンピュータに別のハードディスクを追加する空きベイが存在する場合は、ハードディスク ドライブを追加する方が、ハードディスクのクローンを作成するよりも簡単です。

新しいハードディスクを追加するには、まずコンピュータにハードディスクを取り付ける必要があります。

新しいハードディスクを追加する手順は、次のとおりです。

- サイドバーで [ホーム] の項目をクリックし、[ツールとユーティリティ] に移動して、[新しいディスクの追加] を選択します。または、ツールバーの [ツールとユーティリティ] をクリックし、[新しいディスクの追加] を選択します。
- **新しいディスクの追加ウィザード**のステップに従います。
 - ターゲット ハードディスク
 - 初期化オプション
 - 新しいパーティションの作成
 - 新しいパーティションの設定
 - ディスクの追加の概要

新しいハードディスクに既にパーティションが存在する場合は、まず、そのパーティションを削除する必要があります。追加したハードディスクにパーティションが含まれている場合、注意メッセージが表示されます。追加したハードディスク上の既存のパーティションを削除するには、[OK] をクリックします。

18.2.1 ターゲット ハードディスク

コンピュータに追加したハードディスクを選択します。複数のハードディスクを追加した場合は、そのうちの 1 台を選択し、[次へ] をクリックして先に進みます。後で、新しいディスクの追加ウィザードを起動し、別のディスクを追加することもできます。

システムにインストールしたすべてのハードディスクのディスク名、ディスク ドライブのモデル、ディスク容量、ファイル システム、インターフェイスなどのプロパティを表示することもできます。

18.2.2 初期化方法の選択

Acronis True Image HD は、MBR と GPT の両方のパーティション スキームをサポートしています。このウィザードのステップでは、新しいディスクに適用するパーティション レイアウトを選択できます。

- **MBR (マスター ブート セクタ)**: パーティションのサイズが最大 2.19 TB (2.19×10^{12} バイト) に制限される古いパーティション スキーム。
これは、ハード ドライブが 2 TB よりも大きい場合、新しいディスクを追加しても、超過した領域にはパーティションが作成されないということです。領域全体を割り当てるには、Acronis 拡張容量マネージャを実行する必要があります。
- **GPT (GUID パーティション テーブル)**: ディスクとパーティションの最大サイズとして、9.4 ZB (9.4×10^{21} バイト) まで対応できる新しいパーティション スキーム。

GPT は新しいパーティション スキームであり、MBR の使用目的に応えながら、さらに優れた機能性を発揮します。オペレーティング システムが GPT ディスクをサポートしており、他の方法を使用すべき理由が特になければ、GPT レイアウトで新しいディスクを初期化することをお勧めします。

32 ビット バージョンの Windows XP を使用している場合、GPT の初期化方法は使用できず、[初期化オプション] のステップは表示されません。

必要な初期化方法を選択したら、[次へ] をクリックします。

18.2.3 新しいパーティションの作成

ハードディスクの空き領域を使用するには、パーティションが作成されている必要があります。パーティショニングは、ハードディスクの空き領域を論理領域に分割する処理です。論理領域はそれぞれ独立したディスクとして機能することができ、固有のドライブ文字とファイル システムなどが割り当てられます。ハードディスクを複数の論理領域に分割しない場合でも、パーティションの作成は必要です。そのハードディスク全体を 1 つとして扱うつもりであることを、オペレーティング システムに認識させるためです。

ディスクに未割り当ての領域がない場合は、パーティションを作成できません。

新しいパーティションを作成する手順は、次のとおりです。

- パーティションを選択してウィンドウ上部の **[新しいパーティションの作成]** をクリックするか、パーティションを右クリックしてコンテキスト メニューの **[新しいパーティションの作成]** を選択します。
- 作成するパーティションについて、以下の設定を指定します。
 - 新しいパーティションのサイズ
 - 新しいパーティションのファイル システム
 - パーティションの種類
 - パーティションのドライブ文字とラベル

パーティションの設定

作成するパーティションについて次の設定を行います。

サイズ

作成するパーティションのサイズと位置を変更できます。

パーティションのサイズを変更する手順は、次のとおりです。

- パーティションの境界にマウス カーソルを置きます。パーティションの境界上にマウス カーソルを置くと、両側に矢印が付いた縦の二重線に変化します。
- マウスの左ボタンを押してパーティション境界をドラッグすると、パーティションのサイズを拡大または縮小できます。

パーティションのサイズを手動で設定することもできます。その場合は、サイズを **[パーティション サイズ]** フィールドに直接入力してください。

パーティションの場所を変更する手順は、次のとおりです。

- パーティションにマウス カーソルを置きます。マウス カーソルが、十字カーソルに変化します。
- **[前方の空き領域]** フィールドと **[後方の空き領域]** フィールドの値が目的のサイズになるまで、マウスの左ボタンを押したままパーティションをドラッグします。各フィールドに値を直接入力して、手動で設定することもできます。

論理ドライブを作成する場合は、作成されるパーティションの直前に、システムが使用するための未割り当て領域が確保されます。プライマリ パーティションのみ、または論理パーティションとプライマリ パーティションを作成する場合は、システムが使用する未割り当て領域は確保されません。

この未割り当ての領域が不要な場合は、後でプライマリ ディスクの領域に変換することもできます。

ファイル システム

作成するパーティションのファイル システムの種類を選択したら、**[次へ]** をクリックして次に進みます。パーティションごとにファイル システムの種類を変えることもできます。

パーティションをフォーマットしないままにするか、または次のファイル システムの種類から選択することができます。

- **[FAT16]** は、DOS ネイティブのシステムです。ほとんどのオペレーティング システムはこのファイル システムを認識します。ただし、ディスク ドライブのサイズが 4 GB を超える場合は、FAT16 でフォーマットすることはできません。
- **[FAT32]** は、FAT ファイル システムの 32 ビット版で、最大 2 TB のボリュームをサポートします。
- **[NTFS]** は、Windows NT、Windows 2000、Windows XP、および Windows Vista のネイティブのファイル システムです。これらのオペレーティング システムを使用している場合に選択してください。Windows 95/98/Me および DOS からは、NTFS パーティションにアクセスできないことに注意してください。
- **[Linux Ext2]** は、Linux ネイティブのファイル システムです。十分に高速ですが、ジャーナリング ファイル システムではありません。
- **[Linux Ext3]** は、Red Hat Linux Version 7.2 で正式に導入された、Linux のジャーナリング ファイル システムです。Ext2 との上位および下位互換性があります。複数のジャーナリング モードを備え、32 ビットおよび 64 ビット アーキテクチャの双方で、プラットフォームに依存しない幅広い互換性を実現します。
- **[Linux ReiserFS]** は、Linux のジャーナリング ファイル システムです。一般的に Ext2 より信頼性が高く高速です。Linux のデータ パーティションにはこれを選択します。

パーティションの種類

ハードディスクの空き領域を使用するには、パーティションが作成されている必要があります。パーティショニングは、ハードディスクの空き領域を論理領域に分割する処理です。論理領域はそれぞれ独立したディスクとして機能することができ、固有のドライブ文字とファイル システムなどが割り当てられます。ハードディスクを複数の論理領域に分割しない場合でも、パーティションの作成は必要です。そのハードディスク全体を 1 つとして扱うつもりであることを、オペレーティング システムに認識させるためです。

作成するパーティションの種類を選択します。新しいパーティションの種類を「プライマリ」または「論理」として指定することができます。

- **プライマリ** - このパーティションからコンピュータを起動できるようにする場合は、このパラメータを選択します。それ以外の場合は、論理ドライブとして作成することをお勧めします。各ドライブを、4 つのプライマリ パーティションだけにするか、または 3 つのプライマリ パーティションと 1 つの拡張パーティションにすることができます。

注意: 複数のプライマリ パーティションがある場合に、アクティブになるのは一度に 1 つだけです。他のプライマリ パーティションは隠しパーティションとなり、オペレーティング システムからはアクセスできなくなります。

- **パーティションをアクティブとしてマークする** - アクティブなパーティションは、オペレーティング システムの読み込みに使用されます。オペレーティング システ

ムがインストールされていないパーティションをアクティブに選択すると、コンピュータを起動できなくなります。

- **論理** - このパーティションにオペレーティング システムをインストールして起動する予定がない場合は、このパラメータを選択します。論理ドライブは、パーティション分割されて独立した単位として割り当てられた物理ディスクの一部ですが、それぞれ別のドライブとして機能します。

注意: 論理ドライブを作成する場合は、作成されるパーティションの直前に、システムが使用するための未割り当て領域が確保されます。プライマリパーティションのみ、または論理パーティションとプライマリパーティションを作成する場合は、システムのための未割り当て領域は確保されません。この未割り当ての領域が不要な場合は、後でプライマリディスクの領域に変換することもできます。

ドライブ文字

作成するパーティションに割り当てるドライブ文字を、ドロップダウン リストから選択します。**【自動】**を選択すると、アルファベット順で最初の未使用のドライブ文字が割り当てられます。

パーティション ラベル

パーティション ラベルは、パーティションを簡単に識別できるように割り当てる名前です。たとえば、オペレーティング システムがインストールされているパーティションは System、アプリケーションのパーティションは Program、データが保存されているパーティションは Data、などのように名前を付けます。パーティション ラベルは、オプションの属性です。

作成するパーティションのラベルを入力し、**【確定】**をクリックして次に進みます。

18.2.4 新しいディスクの追加の概要

新しいディスクの追加の概要には、パーティション（ディスク）に対して実行される処理の簡単な説明の一覧が表示されます。

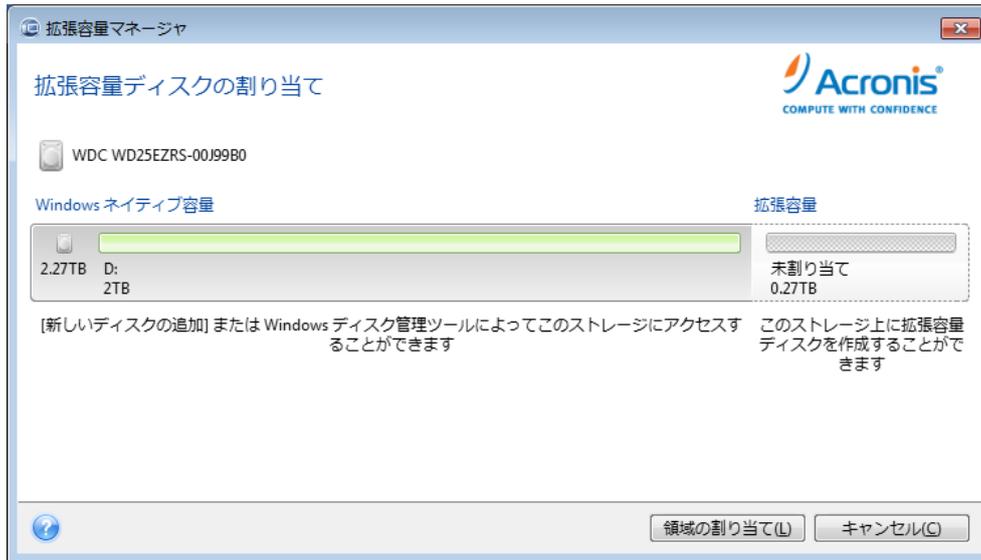
- **【実行】** をクリックすると、新しいパーティションの作成処理が開始されます。
- 処理をキャンセルしてメイン プログラム ウィンドウに戻るには、**【キャンセル】** をクリックします。

【実行】 ボタンをクリックする前に、**【戻る】** ボタンおよび **【次へ】** ボタンをクリックして **【新しいディスクの追加ウィザード】** ウィンドウ間を移動し、設定を変更することができます。

18.3 Acronis 拡張容量マネージャ

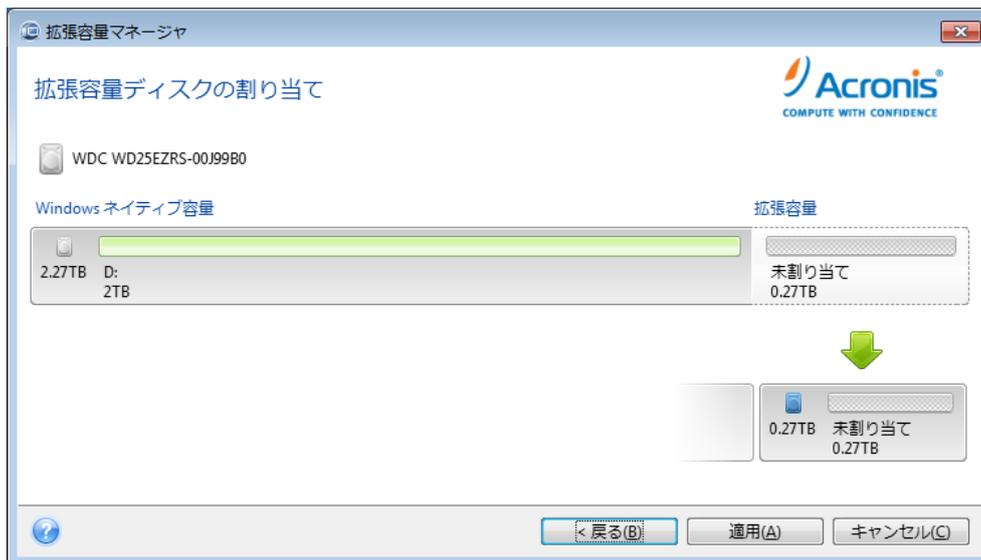
Acronis 拡張容量マネージャにより、ご使用のオペレーティング システムで大容量ディスクを MBR パーティション スタイルでサポートできるようになります。その結果、2 TB を超える領域が使用可能になります。この空き領域は個別のディスクとして認識され、通常の物理ハードディスクと同様にオペレーティング システムやアプリケーションからアクセスできます。

Acronis 拡張容量マネージャ ウィザードには、2 TB を超えるハードディスク(未割り当てまたは MBR パーティション スタイル)がすべて表示されます。ここでは、どのディスク領域が Windows によって認識および割り当てられるのかを確認できます。ウィザードでは、この領域を **Windows ネイティブ容量** と呼びます。



2 TB を超える領域は、**[拡張容量]** と表示されます。**拡張容量ディスク**を有効にすると、オペレーティング システムがこの領域を認識するようになり、ディスク管理処理が可能になります。

[領域の割り当て] をクリックすると、次のステップで割り当てることができるディスク領域が表示されます。



[適用] ボタンをクリックすると、拡張容量ディスクが物理ディスクにエミュレートされます。物理ディスクが 4 TB を超えており、ホスト オペレーティング システムが GPT パーティション レイアウトをサポートしていない場合は、複数の MBR 拡張容量ディスクが出現します。

これらの拡張容量ディスクはブータブルではありませんのでご注意ください。多くのプロパティは物理ディスクと同じです。

領域を割り当てたら、拡張容量ディスクを一時的にオフにすることができます。オフにするには、**[拡張容量ディスクを一時的にオフにする]** をクリックします。これにより、拡張容

量ディスクはディスク管理ツールで表示されなくなりますが、ディスク領域は割り当てられたままなので、表示されていないパーティションは後で有効にすることができます。



拡張容量ディスクを削除するには、**[拡張容量ディスクの削除]** をクリックし、次のステップで **[適用]** ボタンをクリックします。ディスクはシステムから削除され、その結果、2 TB を超えるディスク領域にはアクセスできなくなります。この領域を後で割り当てるには、拡張容量マネージャを再起動する必要があります。



18.3.1 Acronis 拡張容量マネージャが起動しない場合

次のいずれかの理由により、Acronis 拡張容量マネージャが起動しない場合があります。

- 2 TB を超える MBR パーティション スタイルのハード ドライブがシステムにない - **新しいディスクの追加** ツールを使用して、ハード ドライブ上の領域全体の割り当てと管理を実行できます。
- システムに大容量ディスクはあるが、まだ初期化されていない
- ディスクのセクタ サイズが 512 kB を超えている

18.4 SSD のトリミング

SSD のトリミングウィザードではソリッド ステート ドライブ (SSD) での書き込み操作の速度を改善し、パフォーマンスの低下を緩和できます。この問題は、SSD の集中的な使用または長期にわたる使用の結果として自然に発生し、SSD がデータの上書きと削除を行う方法から生じます。

従来のハード ドライブと同じように、SSD からファイルを削除すると、データ セルは消去されず、「使用可能」というフラグが付きます。オペレーティング システムで、後からこのようなセルに書き込み操作を行う場合、ストレージ デバイスの観点から考えると、その操作は実際には上書き操作になります。従来のハードドライブの場合、これは空のセルに書き込むようなものです。ところが SSD セルは例外であり、新しい書き込み操作を実行する前に消去をする必要があります。ハードウェアの制限のため、SSD での消去操作は常に 512 KB のブロックに影響します。このため、以前削除した 60 KB のデータを別の 60 KB のデータで上書きする必要がある場合、ブロック全体の内容が SSD から読み取られてキャッシュに保存されてから、ブロックは実際に消去されます。次に、必要なデータが、キャッシュされたブロック内で変更されます。最後に、ブロック全体が SSD に書き戻されます。このため、書き込みのパフォーマンスは大幅に低下する結果となります。この問題を避けるため、ストレージ デバイスで空のセルが使用可能である限り、新しいデータは常に新しい場所に保存されます。そのうち SSD に空のセルがなくなると、すべての書き込み操作により、上記の「読み取って消去して修正して書き込む」というサイクルが始まります。

SSD のトリミング ウィザード では、削除としてマークされたデータが完全にパーズされ、データ セルが空になって新しい書き込み操作用に準備されます。

注意: このユーティリティでは標準的な TRIM コマンドで、使用されなていない消去可能なデータのブロックについて SSD に通知します。これをサポートするために必要なファームウェアが SSD にあることを確認してください。

SSD のトリミング

警告: この操作は取り消すことができません。操作が完了すると、データのリカバリは不可能になります。

Acronis True Image HD による SSD のトリミングは、Windows Vista 以前を使用している場合に限って合理的に動作します。Windows 7 では標準的な TRIM コマンドが最初からサポートされ、データが削除されるとすぐにセルが消去されます。

SSD をトリミングする手順は次のとおりです。

1. サイドバーまたはツールバーで **[ツールとユーティリティ]** をクリックし、**[SSD のトリミング]** を選択します。
ウィザードが開きます。
2. 使用可能なドライブの一覧から、トリミングする SSD を選択して **[次へ]** をクリックします。
3. 概要ページを読み、**[実行]** をクリックします。
4. Windows でこのウィザードを実行した場合は、要求されたときに **[再起動]** をクリックします。
再起動後、スタンドアロンの Linux ベース環境では動作が自動的に進みます。操作が完了すると、Windows はこのウィザードによって再び起動されます。

19 セキュリティとプライバシーのツール

Acronis True Image HD には、ハードディスク ドライブ全体または個々のパーティションのデータを確実に消去するためのツールが含まれています。

これらのツールを使用すると、機密情報のセキュリティだけでなく、コンピュータを使用するときのプライバシーも守ることができます。ユーザー自身が知らずに残している操作の履歴(さまざまなシステム ファイルに残されている記録)も消去できるからです。このような操作履歴には、ユーザー名やパスワードが含まれている可能性があります。

ツールとその用途は次のとおりです。

- 特定のパーティションやディスク上のデータを**確実に消去してリカバリ不可能にする**には、**Acronis DriveCleanser** を実行します。

19.1 Acronis DriveCleanser

オペレーティング システムの多くは、安全にデータを消去するツールがないため、削除されたファイルのリカバリも、単純なアプリケーションで簡単に実行できます。ディスク全体を再フォーマットしても、機密データが完全に消去されたことは保証されません。

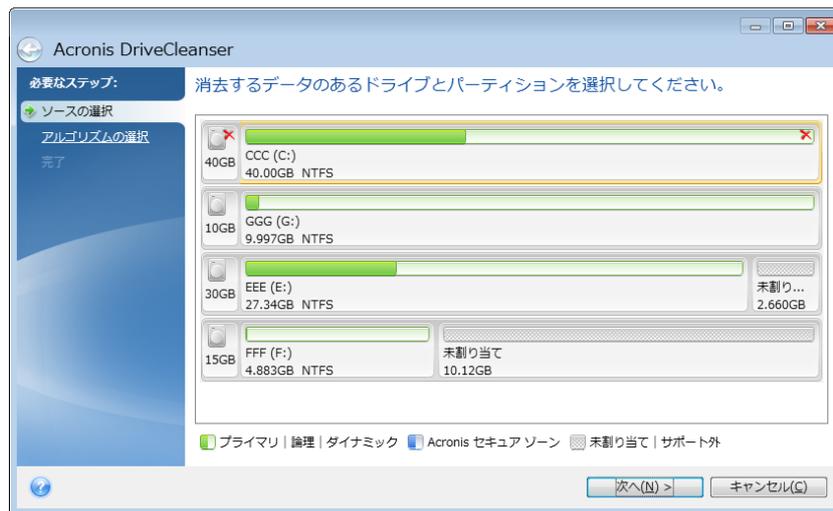
Acronis DriveCleanser を使用すれば、選択されたハードディスクまたはパーティション上のデータを確実にかつ永久的に消去することができます。データ消去の方法にはさまざまなものがあり、消去するデータの重要性に応じて適切な方法を選択できます。

Acronis DriveCleanser を起動するには、メイン プログラム メニューの **[ツールとユーティリティ]**  **[Acronis DriveCleanser]** を選択します。Acronis DriveCleanser では、次の処理を実行できます。

- 選択されているハードディスクまたはパーティションのデータを、あらかじめ設定された方法を使用して消去する
- ユーザー定義(カスタム)の消去方法を作成して、ハードディスクのデータを消去する

Acronis DriveCleanser は、**ウィザード形式でハードディスクに対するすべての処理を順に指定**できるようになっています。データの消去は、ユーザーがウィザードの概要ウィンドウで **[実行]** をクリックするまでは行われません。どの時点でも、前のステップに戻って他のディスクやパーティションまたはデータ消去方法を選択することができます。

データを消去するハードディスク パーティションを選択します。



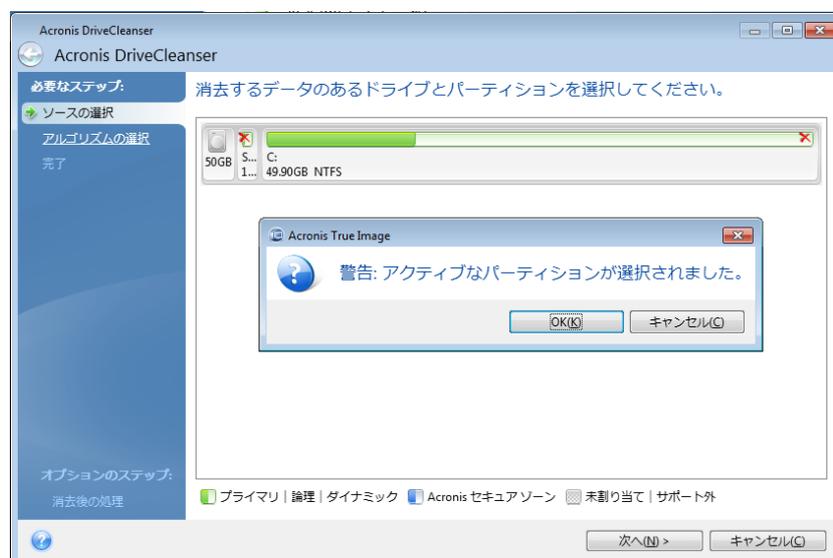
消去するパーティションを決定するには、該当する四角形を選択します。パーティションが選択されたことを示す赤いマークが右上に表示されます。

データを消去する対象として、ハードディスク全体や複数のハードディスクを選択することができます。選択するには、ハードウェアに対応する四角形(デバイス アイコン、ディスク番号、および容量が表示されています)をクリックします。

複数のパーティションを同時に選択でき、パーティションが存在するハードディスク ドライブまたはディスクがそれぞれ異なっていてもかまいません。また、ディスクの未割り当て領域を選択することもできます。

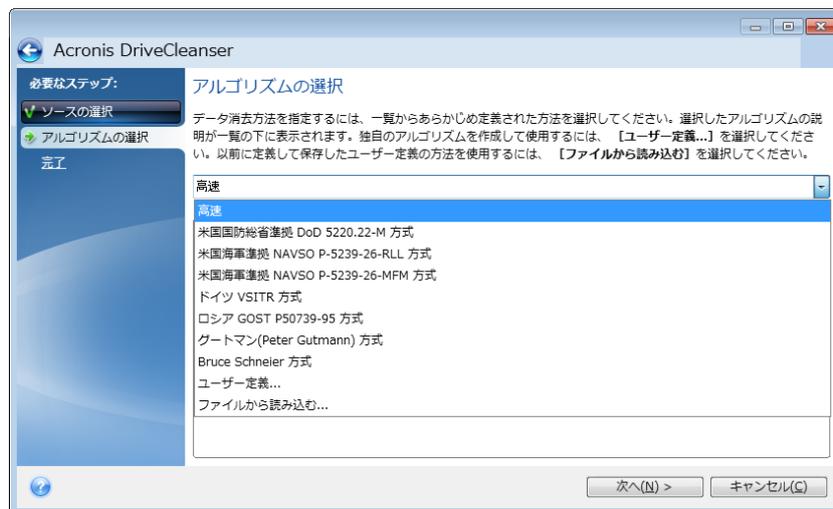
続行するには、**[次へ]** をクリックしてください。

選択されたディスクやパーティションにシステムのディスクまたはパーティションが含まれている場合は、警告ウィンドウが表示されます。



この場合は注意が必要です。警告ウィンドウの **[OK]** をクリックしてから、概要ウィンドウの **[実行]** をクリックすると、Windows オペレーティング システムが格納されているシステム パーティションの内容が消去されます。

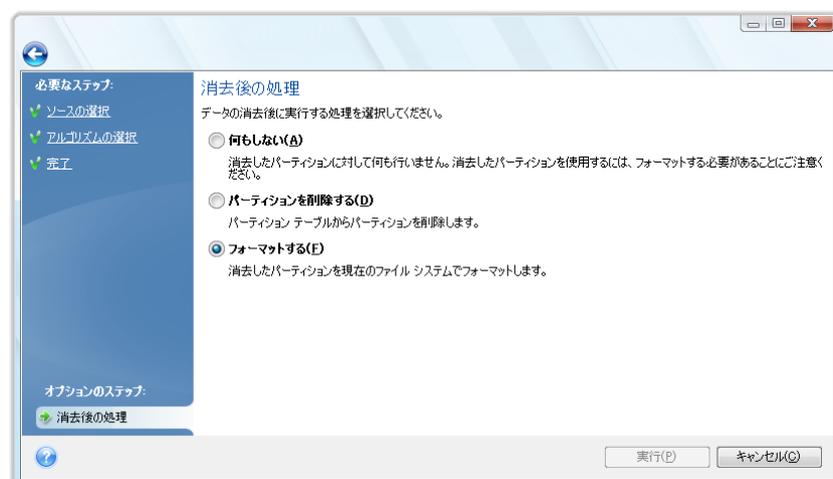
Acronis DriveCleanser では、一般的に使用されているさまざまなデータ消去方法が活用されています。消去方法の説明については、このマニュアルの「ハードディスクの消去方法『149 ページ』」を参照してください。独自のデータ消去方法を作成する場合は、[カスタム...] を選択して「データを消去するユーザー定義消去方法の作成」に進みます。



ディスク消去方法を選択または作成したら、[次へ] をクリックして次に進みます。Acronis DriveCleanser の画面に、データ消去タスクの概要が表示されます。[実行] をクリックする前に、[選択されているパーティションを完全に消去する] ボックスを選択する必要があります。[オプション] をクリックすると、データ消去対象として選択されているパーティションでの消去後の処理を選択できます。これは、デフォルトの処理である [フォーマットする] が適切でない場合に行います。

[消去後の処理] ウィンドウでは、次の 3 つのいずれかを選択できます。

- 何もしない - 下で選択されている方法を使用してデータの消去のみを行います。
- パーティションを削除する - データを消去して、パーティションを削除します。
- フォーマットする - データを消去して、パーティションをフォーマットします (デフォルト)。



この例では、[フォーマットする] が選択されています。このオプションを選択すると、パーティションのデータが消去されて、パーティションが再フォーマットされます。

この先に進む前に、作成済みのタスクに変更を加えることができます。 消去後の処理を選択した後で **[実行]** をクリックすると、タスクの実行が開始します (**[実行]** ボタンをクリックできない場合は、サイドバーの **[完了]** をクリックしてから **[選択されているパーティションを完全に消去する]** ボックスを選択すると、**[実行]** ボタンがクリック可能になります)。 選択されたパーティションまたはディスクの内容を消去するのに必要なすべての処理が自動的に実行されます。 消去が終了すると、そのことを示すメッセージが表示されます。

Acronis DriveCleanser のもう 1 つの便利な機能として、ハードディスクまたはパーティションにデータ消去方法を適用した結果の表示があります。 データが消去されたディスクまたはパーティションの状態を見るには、サイドバーの **[ツールとユーティリティ]** を選択します。 右ペインの Acronis DriveCleanser 領域に、**[ハード ドライブの現在の状態を表示する]** リンクがあります。 このリンクをクリックしてから、どのパーティションのデータ消去の結果を表示するかを選択します。 DriveCleanser に統合されている Acronis ディスク エディタが、読み取り専用モードで開きます。

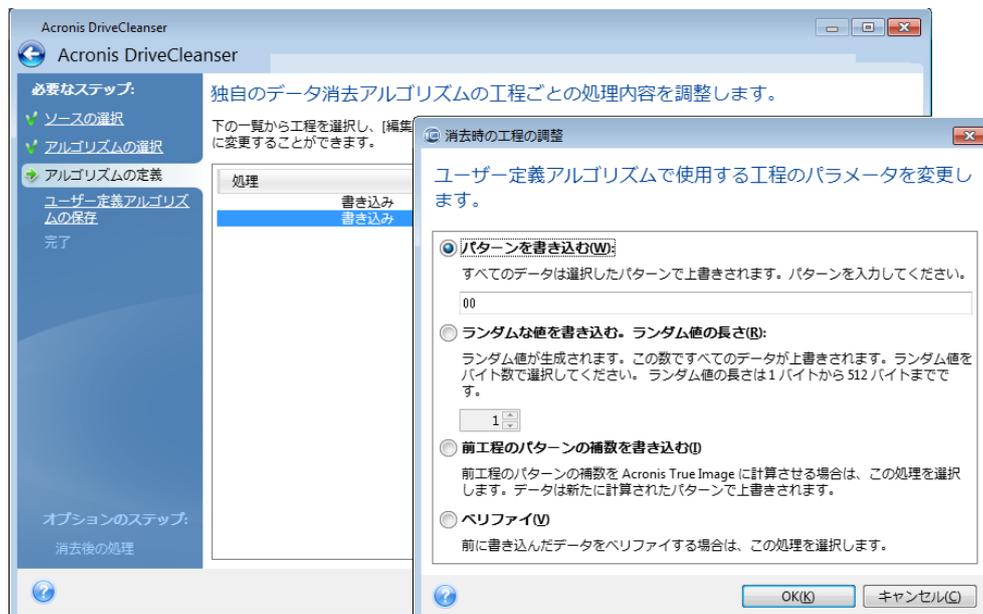
前述の消去方法は、機密データを消去するレベルがそれぞれ異なっています。 このため、表示される消去結果も、データ消去方法によって異なります。 実際に表示されるのは、0 またはランダムな記号で埋められたディスクのセクタになります。



19.2 データを消去するユーザー定義消去方法の作成

Acronis DriveCleanser には、ハードディスク データのユーザー独自の消去方法を作成する機能が用意されています。 さまざまなレベルのデータ消去方式があらかじめ定義されていますが、ユーザー独自の消去方法を作成することも選択できます。 この機能は、確実なディスク消去の方法で使用されている原則を十分に理解したうえで使用してください。

ハードディスクのデータ消去方法を独自に作成するには、**[アルゴリズムの選択]** ウィンドウのドロップダウン リストで **[ユーザー定義]** を選択します。このオプションを選択すると、新しい必須ステップが DriveCleanser ウィザードに追加され、実際のセキュリティ要件に合わせてデータ消去アルゴリズムを作成することができます。



作成した独自のアルゴリズムを保存しておくことができます。この機能は、作成したアルゴリズムを再び使用する予定がある場合に便利です。

アルゴリズムを保存するには、ファイル名を指定し、保存するフォルダを左ペインのツリーで選択します。

ユーザー定義の各消去方法は、ファイル名をつけて別々のファイルに保存されます。新しい消去方法を既存のファイルに書き込むと、既存のファイルの内容は消去されます。

Acronis DriveCleanser の実行時に作成して保存したデータ消去アルゴリズムを後で使用するには、次の手順を実行します。

- **[アルゴリズムの選択]** ウィンドウのドロップダウン リストから **[ファイルから読み込む...]** を選択し、データ消去アルゴリズム パラメータのファイルを選択します。デフォルトでは、作成したファイルの拡張子は *.alg になっています。

20 トラブルシューティング

セクションの内容

全般.....	138
インストールの問題点.....	139
バックアップとベリファイの問題.....	139
リカバリの問題.....	141
リカバリ後のシステム起動の問題.....	142
その他の問題.....	143

20.1 全般

以降のセクションは、Acronis True Image HD のインストールおよび使用中に発生した問題のトラブルシューティングに役立ちます。トラブルシューティングの章には、他の情報とともに、アクロニス製品の問題の解決に役立つ アクロニス サポート ナレッジ ベース (KB) の資料へのリンクが含まれています。該当するトラブルシューティングのセクションにお客様の問題の解決策が示されていない場合は、リンクをクリックして KB にアクセスし、検索機能を使用して、問題に関連するキーワードを入力してください。トラブルシューティングの章では最も一般的な問題が扱われているため、お客様の特有の問題を解決するには、KB が役立つ場合があります。また、アクロニスのサポートセンターは随時新しい資料を KB に追加しています。問題の解決策が KB で見つからなかったり、推奨された解決策が役に立たない場合は、Acronis Customer Central までお気軽にお問い合わせください。

アクロニスのサポート担当者は、お客様にシステム レポートの提供を求めることがあります。レポートを作成するには、[ヘルプ] メニューで [システム レポートの生成] を選択し (Windows でプログラムを起動できる場合)、レポートを保存し、Acronis Customer Central に送信します。Windows を起動できない問題が発生している場合は、アクロニスのレスキュー メディアから起動し、Acronis True Image HD のスタンドアロン版で、[ヘルプ] メニューの同じ項目を選択してレポートを作成します。

また、ウィザードが開かれていたり、タスクが実行されていたり、エラー メッセージが表示されている場合でも、Windows および Acronis True Image HD のスタンドアロン版で Ctrl キーを押しながら F7 キーを押して、システム レポートの作成を開始することもできます。

さらに、レスキュー メディアに Acronis システム レポート ツールを追加できるようになりました。このツールを使用すると、Windows と Acronis True Image OEM (完全版) の両方で起動できない場合にレスキューメディアから起動した後、システム レポートを作成することができます。この場合、レポートの保存に使用する USB フラッシュ ドライブを用意する必要があります。

問題の原因は外付けハードディスクの接続の緩みなど、単純なことである場合がよくあります。この章で説明している他の解決策を試す前に、問題が次のいずれかの原因により発生していないかどうかを確認してください。

- 外付けドライブへの接続の緩み
- 低品質な接続ケーブル

外付け USB ハード ドライブを使用している場合は、次の点についても確認してください。

- ハブを経由してドライブに接続している場合は、PC の背面のコネクタに直接接続する

- PC に接続されている他の USB デバイスとの競合を避けるために、すべての USB デバイスの接続を外す(マウスとキーボードを除く)

20.2 インストールの問題点

Acronis True Image HD をインストールできないときは、次の解決方法を試してください。

1. インストール時に [現在のユーザーにのみインストール] を選択した場合は [このコンピュータを共有するすべてのユーザーにインストール] を選択してみてください。[このコンピュータを共有するすべてのユーザーにインストール] を選択した場合は [現在のユーザーのみにインストール] を選択してみてください。
2. インストール ファイルを起動するときに、ファイルを右クリックして [管理者として実行] を選択するという方法を使用します。
3. Vista のビルトイン Administrator アカウントにログインして、次の手順でプログラムをインストールします。
 - a. [スタート] → [すべてのプログラム] の順にクリックし、[アクセサリ] フォルダを開きます。
 - b. [コマンド プロンプト] 項目を右クリックして [管理者として実行] を選択します。
 - c. 開いたウィンドウで、次のコマンドを入力します。

```
net user administrator /active:yes
```

「administrator」と「/active:yes」の間にはスペースがあることに注意してください。
 - d. 現在のアカウントをログオフして、Administrator アカウントにログインします。
 - e. アプリケーションのインストールをもう一度実行します。

以上のことを試しても解決できない場合は、Acronis サポート ナレッジ ベースの記事を参照して問題のトラブルシューティングを行っててください。この記事には、具体的な手順が記載されています。「Acronis ソフトウェアのインストールに関するトラブルシューティング」を参照してください。

20.3 バックアップとベリファイの問題

- 1) バックアップまたはベリファイで問題が発生した場合は、初めに、Acronis True Image HD のビルドが最新であることを確認してください。これは、アクロニスのアカウントからダウンロードできます。アクロニスは常に製品の向上を目指しており、最新のビルドでは、バグの修正やハードウェア互換性の強化が行われている可能性があります。
- 2) データのバックアップ時またはバックアップ アーカイブの検証時にエラーが発生した場合は、原因としてハードディスクのエラーや不良セクタが考えられます。したがって、ソース ディスクとターゲット ディスク(バックアップ時に問題が発生した場合)またはバックアップ アーカイブのストレージ ディスク(バックアップ アーカイブのベリファイ時にエラーが発生した場合)のチェックを実行してください。ディスクをチェックするには、Windows の chkdsk ユーティリティを次の手順で実行します。
 - コマンド プロンプトを開きます([スタート]→[ファイル名を指定して実行]→cmd)
 - chkdsk DISK: /r と入力します。DISK: は、チェックするパーティションのドライブ文字です(たとえば「D:」)。C: ドライブをチェックする場合は、PC の再起動が必要になることがあります。
- 3) エラーの原因として、RAM モジュールの欠陥が考えられます。PC のメモリ モジュールをテストするには、テストに使用するメディアの種類に応じて、次のいずれかをダウンロードします。

- memtest アーカイブ (フロッピー ディスクの場合)
- memtest アーカイブ (USB フラッシュ ドライブの場合)
- memtest アーカイブ (CD の場合)

アーカイブの圧縮を解除して、メモリ テスト プログラムの入ったブータブル メディアを作成します。手順については、アーカイブ内の README.txt を参照してください。

4) 次に挙げる症状に該当する場合は、その解決方法を試してみてください。

RPC サーバーが利用できない

バックアップ タスクが手動で開始されたときに、「エラー #1722 - RPC サーバーを利用できません」というエラーが返されます。このような場合は、<http://kb.acronis.com/content/1521> をクリックして、アクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「RPC Server is Unavailable (Error Code: 1722)」(RPC サーバーが利用できない (エラー コード: 1722)) に記載されている解決方法を試してみてください。

ネットワーク バックアップの問題

Windows のネットワーク共有へのバックアップに関する問題のトラブルシューティング手順については、<http://kb.acronis.com/content/1684> をクリックして、アクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Troubleshooting Network Backup Issues in Windows」(Windows でのネットワーク バックアップ問題のトラブルシューティング) を参照してください。

マップされたドライブへのバックアップに失敗することがある

マップされたドライブへのイメージの保存に成功したりしなかったりする理由と、この問題を回避する方法については、<http://kb.acronis.com/content/1545> をクリックして、アクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Saving an Image to a Mapped Drive from an Acronis True Image Task Fails Sporadically」(Acronis True Image タスクからマップされたドライブへのイメージの保存が度々失敗する) を参照してください。

USB フラッシュ ドライブにバックアップするときの「次のボリュームを挿入してください」というメッセージ

Acronis True Image HD では、USB フラッシュ ドライブはリムーバブル メディアとして扱われます。FAT32 でフォーマットされている場合は、1 ファイルあたり 4 GB というサイズの制限があります。したがって、バックアップのサイズがこれよりも大きいときは、バックアップが自動的に 4 GB のボリュームに分割され、次のボリュームのための次のメディアが挿入されるまでバックアップ処理が停止します。[OK] をクリックすると、バックアップ処理が続行されます。メッセージが再度表示された場合は、同じ操作を、バックアップが完了するまで繰り返してください。詳細については、<http://kb.acronis.com/content/1805> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Acronis True Image Asks to Insert Next Volume When Backing Up to USB Flash Drive」(USB フラッシュ ドライブにバックアップするときに Acronis True Image から次のボリュームを挿入するよう求められる) を参照してください。

NTFS 圧縮パーティションのバックアップに関する問題

Acronis True Image では、NTFS 圧縮パーティションのバックアップに失敗することがあります。このようなパーティションの扱いについては、いくつかの制限があるからです。可能であれば、パーティションの圧縮を解除してからバックアップしてください。詳細につ

いては、<http://kb.acronis.com/content/1811> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Acronis True Image Fails to Back Up a Compressed Partition」(Acronis True Image が圧縮パーティションのバックアップに失敗する)を参照してください。

Acronis True Image HD の画面にバックアップが破損していると表示される

破損したバックアップのトラブルシューティングおよび問題解決の方法については、<http://kb.acronis.com/content/1517> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Troubleshooting Issues with Corrupt Backups」(破損したバックアップに関する問題のトラブルシューティング)を参照してください。

20.4 リカバリの問題

障害後のシステムまたはデータのリカバリは、Acronis True Image HD で実行される最も重要な処理です。バックアップ データをリカバリできなければ、バックアップ プログラムに価値はありません。リカバリで問題がある場合は、次の操作を試してください。

- 1) 最初に、Acronis True Image HD が最新のビルドであることを確認します。これは、アクロニスのアカウントからダウンロードできます。
- 2) 外付けドライブからイメージをリカバリする場合は、そのイメージを他のストレージにコピーしてリカバリを再度試行します。問題がハードウェアに関するものである可能性があります。
- 3) Windows でリカバリを試した場合は、レスキュー メディアで起動してリカバリ手順を再度試します。
- 4) データ パーティションのバックアップの場合は、パーティションをマウントすることで、少なくとも一部のファイルおよびフォルダをリカバリできる可能性があります。
- 5) 以上の方法で問題が解決しない場合は、このセクションで問題の解決方法が提示されているか確認します。

スタンドアロン版の Acronis True Image HD でバックアップを含むネットワーク共有が見つからない場合

Acronis True Image のスタンドアロン版を使用していて目的のネットワーク共有を見つけられない場合は、いくつかの原因が考えられます。<http://kb.acronis.com/content/1550> をクリックして、アクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Standalone Version of Acronis True Image Cannot Find Network Share with an Image Archive」(スタンドアロン版の Acronis True Image でイメージ アrchiveを含むネットワーク共有が見つからない場合)を参照してください。

レスキュー メディアで起動した後にネットワーク共有にログオンできない場合

イメージ アrchiveのあるネットワークにスタンドアロン版の Acronis True Image HD でログオンできず、ユーザー名とパスワードを何度も要求される場合の解決方法については、<http://kb.acronis.com/content/1551> をクリックして、アクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Standalone Version of Acronis True Image Recovery Wizard Keeps Asking for User Name and Password When Trying to Restore an Image from a Network Share」(ネットワーク共有からイメージをリカバリする際に、スタンドアロン版の Acronis True Image のリカバリ ウィザードでユーザー名とパスワードが何度も要求される場合)を参照してください。

Microsoft Outlook の電子メールのバックアップをリカバリした後に新しいユーザー プロファイルが作成される場合

解決策については、<http://kb.acronis.com/content/1804> をクリックして、アクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Restoring E-Mail Backup of Microsoft Outlook Creates a New Profile」（Microsoft Outlook 電子メールのバックアップをリカバリすると新しいプロファイルが作成される場合）を参照してください。

リカバリしたファイルやフォルダにアクセスできない場合

Acronis True Image でファイルやフォルダをリカバリした後、これらにアクセスしようとすると「アクセスは拒否されました」というメッセージが表示される場合があります。この問題を解決するには、<http://kb.acronis.com/content/1520> をクリックして、アクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Access Denied to Files or Folders Restored with Acronis True Image」（Acronis True Image で復元したファイルやフォルダへのアクセスが拒否される場合）を参照してください。

20.5 リカバリ後のシステム起動の問題

システムがバックアップ時に起動可能であれば、リカバリ後も起動可能と考えるのは当然です。しかし、オペレーティング システムの起動に使用するために保存されている情報が、リカバリの時点で最新ではなくなっている可能性があります。特に、パーティションのサイズ、場所、またはリカバリ先のドライブが変更された場合です。Acronis True Image HD でリカバリを実行すると、Windows ローダが自動的に更新されます。他のローダも修復される場合がありますが、ローダを再度アクティブ化する必要がある場合もあります。特に、デュアル ブート構成の Linux のボリュームをリカバリするときは、Linux が正しく起動されるようにするために、修正プログラムの適用や設定の変更が必要になることがあります。次に示すのは、オペレーティング システムのリカバリ後に起動できなくなったときにユーザーによる追加の操作が必要となる一般的な状況をまとめたものです。

別のハードディスク ドライブ (HDD) から起動するようにコンピュータの BIOS が構成されている

解決策: オペレーティング システムが存在する HDD から起動するように BIOS を構成します。

BIOS のブート シーケンス設定メニューが 2 つ存在することもあります。1 つはブート デバイス優先順位を設定するもので、もう 1 つは HDD ブート順序を設定するものです。

Windows がダイナミック ボリュームにリカバリされたが、このボリュームは「起動可能」に設定できない

解決策: ベーシック ボリュームまたはシンプル ダイナミック ボリュームに Windows をリカバリします。

システム パーティションのリカバリ先ディスクに MBR が存在しない

システム パーティションのリカバリ先として、MBR が存在しないディスクを指定した場合は、システム パーティションと共に MBR をリカバリするかどうかをたずねるメッセージが表示されます。システムを起動可能にする必要がない場合のみ、MBR をリカバリしないことを選択してください。

解決策: 対応するディスクの MBR と共にパーティションを再度リカバリします。

「NTLDR is missing」というエラー メッセージが表示され、Windows が起動しない

解決策: Windows XP を Acronis True Image HD でリカバリした後に「NTLDR is missing」というエラーが発生した場合にシステムを起動可能にする方法については、<http://kb.acronis.com/content/1759> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベース記事「Windows Fails to Boot With "NTLDR is missing"」（「NTLDR is missing」が表示され、Windows が起動しない）を参照してください。

20.6 その他の問題

Acronis True Image HD をインストールすると共有フォルダにアクセスできなくなる場合

Acronis True Image HD をコンピュータにインストールした後にマシン上のローカル共有フォルダにアクセスできなくなる理由を確認するには、<http://kb.acronis.com/content/1554> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Shared Folders Cannot be Accessed after Installation of Acronis True Image」（Acronis True Image のインストール後に共有フォルダにアクセスできない場合）を参照してください。

Acronis True Image HD が Windows でハードディスクを認識しない場合

アクロニス製品が Windows でハードディスクが見つからないと報告する場合、原因はおそらくサードパーティのソフトウェアがハードディスクへのアクセスをブロックしているためです。詳細については、<http://kb.acronis.com/content/1515> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Acronis Product Does Not Detect Hard Disks in Windows」（アクロニス製品が Windows でハードディスクを検出しない場合）を参照してください。

Acronis True Image HD と Windows BitLocker

BitLocker で暗号化されたシステムをバックアップおよびリカバリするには、アクロニスのレスキュー メディアから起動してからセクタ単位のイメージを作成する必要があります。詳細については、<http://kb.acronis.com/content/1734> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Compatibility of Acronis True Image with Windows Vista BitLocker」（Acronis True Image と Windows Vista BitLocker の互換性）を参照してください。

Windows でのディスクのクローン作成処理が再起動後に中断する場合

アクロニス製品が Windows のネイティブ モードで再起動するが、クローン作成処理が数秒で終了し、クローンが作成されません。この問題に対応するには、<http://kb.acronis.com/content/1757> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Acronis Product Fails to Clone After Reboot」（再起動後にアクロニス製品でクローンを作成できない場合）を参照してください。

スタンドアロン版の Acronis True Image HD は、ハード ドライブや NIC カードを検知しません。

これは、リカバリ環境には適切なドライバがないためです。この問題は次の方法で解決できます。

- Acronis システム レポートを作成し、必要なドライバを含むレスキュー メディアの iso ファイルを提供するよう Acronis Customer Central に依頼します。
- 必要なドライバを含む、Windows ベースのリカバリ環境を作成します。<http://kb.acronis.com/content/1506> にある「Working with Acronis True Image Plug-In for BartPE」（BartPE 用 Acronis True Image プラグインの使用）を参照してください。

パーティションの解析時に複数の「セクタ ... から読み取ることができませんでした」というエラー メッセージが表示される場合

問題を解決するには、chkdsk の実行およびアクロニスのドライバの更新を行います。詳細については、<http://kb.acronis.com/content/1514> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Multiple "Failed to read from sector..." Error Messages During Partition Analysis」（パーティション解析中に複数の「セクタ ... から読み取ることができませんでした」というエラー メッセージが表示される場合）を参照してください。

ハード ドライブのクローンの容量が間違っている場合

ドライブのクローンの容量が元のドライブとは異なるはずだが同じになっている場合、問題の原因はホスト保護領域です。詳細については、<http://kb.acronis.com/content/1710> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「HPA Makes the Cloned Drive Display Wrong Capacity」（HPA が原因でドライブのクローンの容量が正しく表示されない場合）を参照してください。

マウントされたイメージ アrchiveを参照していると「アクセスは拒否されました」というメッセージが表示される場合

マウントされたイメージ内のフォルダを参照しようとするこのメッセージが表示される理由、およびその解決方法については、<http://kb.acronis.com/content/1549> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「When Trying to Explore Certain Folders of a Mounted Image Archive, Access Denied Message Appears」（マウントされたイメージ アrchiveの特定フォルダを参照しようとする、「アクセスは拒否されました」というメッセージが表示される場合）を参照してください。

複数の CD/DVD に分割されたイメージのマウントに失敗する場合

分割されたイメージのマウントに関する問題の説明は、<http://kb.acronis.com/content/1546> にあるアクロニス サポートのナレッジ ベースの記事「Mounting an Image Spanned over Several CD or DVD Discs Fails」（複数の CD または DVD ディスクに分割されたイメージのマウントに失敗する場合）を参照してください。

Acronis True Image HD の起動に時間がかかる場合

この問題を解決する方法は、次のとおりです。

- Acronis True Image HD が最新のビルドであることを確認します。
- 最新のアクロニスのドライバをインストールします。最新のドライバがない場合は、Acronis Customer Central に依頼します。
- Distributed Link Tracking Client サービスを無効にします。
- アクロニスの実行ファイルを、ウイルス対策ソフトウェアが信頼できるアプリケーションのリストに追加します。
- 必要がなければ Vista リカバリ ポイントを削除します。

21 ハードディスクと起動順

21.1 BIOS での起動順の並び替え

BIOS には、コンピュータの初期構成を行うためのセットアップ ユーティリティが組み込まれています。セットアップ ユーティリティを開始するには、コンピュータの電源をオンにした直後に開始される POST (power-on self test) シーケンス中に、特定のキーの組み合わせ (Del、F1、Ctrl+Alt+Esc、Ctrl+Esc キーなど、BIOS によって異なります) を押す必要があります。通常は起動テスト中に、必要なキーの組み合わせを示すメッセージが表示されます。このキーの組み合わせを押すと、BIOS に組み込まれているセットアップ ユーティリティのメニューが表示されます。

メニューの外観、メニューに表示される項目と項目名は、BIOS の製造元によって異なります。コンピュータのマザーボード用の BIOS の製造元として最もよく知られているのは、Award/Phoenix と AMI です。また、標準的なセットアップ メニューの項目に関しては BIOS ごとの違いはほとんどありませんが、拡張(または高度な)セットアップの項目は、コンピュータおよび BIOS バージョンによって大幅に異なります。

BIOS メニューでは、特に**起動順**を調整することができます。**起動順**の管理は、AMI BIOS、AWARD BIOS、およびハードウェアの大手メーカーなど、BIOS バージョンごとに異なります。

コンピュータ BIOS では、オペレーティング システムをハードディスクからだけでなく、CD-ROM、DVD-ROM、およびその他のデバイスからも起動できます。レスキュー メディア(CD、DVD、または USB スティック)デバイスを最初の起動デバイスにするなど、起動順の変更が必要になることがあります。

コンピュータに C:、D:、E:、および F: というドライブ文字が割り当てられた複数のハードディスクがある場合は、オペレーティング システムをディスク E: から起動するように起動順を変更することができます。この場合、起動順を E:、CD-ROM:、A:、C:、D: のように設定する必要があります。

これは、起動順の一覧にある最初のデバイスから起動が実行されることを意味するものではありません。単に、オペレーティング システムの起動がこのデバイスで**最初の試行**であることを意味します。ディスク E: にオペレーティング システムがない場合や、E: がアクティブでない場合もあります。この場合、BIOS は一覧に記載された次のデバイスを照会します。

BIOS は、IDE コントローラに接続されている順序 (プライマリ マスタ、プライマリ スレーブ、セカンダリ マスタ、セカンダリ スレーブの順) に従ってディスクに番号を付け、次に SCSI ハードディスクに番号を付けます。

BIOS セットアップで起動順を変更した場合、この順序どおりではなくなります。たとえば、起動をハードディスク E: から実行するよう指定した場合、通常的环境では 3 番目になるハードディスク(一般的には IDE ハードディスクのセカンダリ マスタ)から番号付けが開始されます。

コンピュータにハードディスクを設置し、BIOS で構成すると、コンピュータ (またはマザーボード) はそのディスクの存在と主なパラメータを「認識」するようになります。ただし、オペレーティング システムがハードディスクを処理するためにはまだ十分ではありません。さらに、新しいディスク上にパーティションを作成し、Acronis True Image HD を使用してそのパーティションをフォーマットする必要があります。「新しいハードディスクの追加」を参照してください。

21.2 コンピュータへのハードディスク ドライブの設置

21.2.1 一般的な IDE ハードディスク ドライブの設置方法

新しい IDE ハードディスクを設置するには、以下の手順に従います（開始前にはコンピュータの電源を切ってください）。

1. 新しいハードディスクのコントローラ ボードにジャンパを適切に取り付け、ハードディスクをスレーブに設定します。通常、ハードディスク ドライブには、ジャンパを正しく取り付ける方法が示された図が貼られています。
2. コンピュータを開き、新しいハードディスクを特殊なホルダの付いた 3.5 インチまたは 5.25 インチ スロットに挿入します。ディスクをネジでしっかり固定します。
3. 電源ケーブルを新しいハードディスクに差し込みます（黒 2 本、黄 1 本、赤 1 本から成る 4 芯ケーブル。このケーブルは決まった向きでしか取り付けられませんが）。
4. 40 芯または 80 芯のフラット データ ケーブルをハードディスクとマザーボードのソケットに差し込みます（差し込みに関する規則については後述します）。ハードディスク ドライブのコネクタ部分またはコネクタの付近には 1 番ピンを表す印が付いています。ケーブルの一端は、1 番ピン用に芯が 1 本だけ赤くなっています。ケーブルがコネクタに正しく差し込まれていることを確認してください。また、ケーブルの多くは、1 方向にしか差し込めないようになっています。
5. コンピュータの電源を入れ、コンピュータの起動時に画面に表示されるキーを押して BIOS のセットアップを開始します。
6. 設置したハードディスクを **type**、**cylinder**、**heads**、**sectors**、**mode**（または **translation mode**）などのパラメータを設定して構成するか（パラメータの情報はハードディスクのケースに記載されています）、あるいは BIOS の IDE 自動検出ユーティリティを使用して自動的に構成します。
7. Acronis True Image HD のコピーが格納されている場所に応じて、起動順を A:、C:、CD-ROM などに設定します。起動ディスクがある場合は、このディスクが順番の最初になるように設定します。CD から起動する場合は、起動順が CD-ROM から始まるようにします。
8. BIOS の設定を終了し、変更を保存します。Acronis True Image HD は、マシンの再起動後に自動的に起動します。
9. Acronis True Image HD を使用し、ウィザードの質問に答えてハードディスクを構成します。
10. 作業が完了したらコンピュータの電源を切り、ディスクを起動用にする場合は、ディスクのジャンパをマスターの位置に設定します（ディスクを追加のデータ ストレージとして設置する場合は、スレーブの位置のままにします）。

21.2.2 マザーボードのソケット、IDE ケーブル、電源ケーブル

マザーボードには、ハードディスクを接続できるスロットが 2 つ（プライマリ IDE およびセカンダリ IDE）があります。

IDE (Integrated Drive Electronics) インターフェイスを持つハードディスクは、マークの付いた 40 芯または 80 芯のフラット ケーブル（ケーブルの芯のうち 1 本は赤です）でマザーボードに接続します。

各ソケットにハードディスクを 2 台接続できます。つまり、この種類のハードディスクを合計 4 台まで接続できます（各 IDE ケーブルにはプラグが 3 つあり、2 つはハードディスク、1 つはマザーボードのソケットに接続します）。

IDE ケーブル プラグは通常、一定の方向でしかソケットに接続できないよう設計されています。一般的に、ケーブル プラグにあるピン穴のうちの 1 つは閉じられており、この閉じられた穴に対応するピンがマザーボードのソケットから取り外されています。このため、ケーブルを間違った方向に差し込むことはできません。

また、ケーブルのプラグに突起があり、ハードディスクおよびマザーボードのソケットにくぼみがある場合もあります。これも、ハードディスクとマザーボードを接続する方向を間違えないための工夫です。

以前はこのような設計のプラグがなかったため、IDE ケーブルはマークの付いた芯が電源ケーブルに最も近くなるようにハードディスクのソケットに接続する、つまりマークの付いた芯をソケットの 1 番ピンに接続するという経験則がありました。マザーボードにケーブルを接続する場合も同様のルールを使用していました。

間違った方向でケーブルをハードディスクまたはマザーボードに接続しても、必ずしもディスクやマザーボードの電子部分が損傷するわけではありません。BIOS によるハードディスクの検出や初期化が行われただけです。

一部の、特に古い型のハードディスクには、接続方法を誤るとドライブの電子部分が損傷するものもあります。

ここでは、すべての種類のハードディスクについては説明しません。現在、最も一般的に使用されているのは IDE または SCSI インターフェイスを持つハードディスクです。IDE ハードディスクとは異なり、SCSI ハードディスクは PC に 6 台から 14 台まで接続できます。ただし、これらを接続するには特別な SCSI コントローラ(ホスト アダプタ)が必要です。SCSI ハードディスクは通常はパーソナル コンピュータ(ワークステーション)では使用されませんが、サーバーでよく見られます。

IDE ケーブルの他に、4 芯の電源ケーブルをハードディスクに接続する必要があります。このケーブルも、一定の方向でしか差し込むことができません。

21.2.3 ハードディスク ドライブとジャンパの構成

コンピュータではハードディスク ドライブをマスタまたはスレーブとして構成できます。構成は、ジャンパと呼ばれるハードディスク ドライブの特別なコネクタを使用して行います。

ジャンパは、ハードディスクの電子回路基板上、またはハードディスクとマザーボードを接続する特別なソケットのいずれかにあります。

通常は取り付け位置の説明がドライブに貼られています。典型的なマークは、**DS**、**SP**、**CS**、**PK** です。

それぞれのジャンパ位置は、次に示すハードディスクの特定の設置モードに対応します。

- **DS** - マスタ/工場出荷値
- **SP** - スレーブ (またはジャンパは不要)
- **CS** - マスタ/スレーブのケーブル セレクト: ハードディスクの用途は、マザーボードとの物理的な位置関係によって決定されます。
- **PK** - ジャンパのパーキング位置: 既存の構成でジャンパが不要な場合に、ジャンパを配置できる位置です。

ジャンパをマスタの位置に設定したディスクは、BIOS (Basic Input/Output System) によって起動用として扱われます。

同じケーブルに接続した複数のハードディスクのジャンパは**マスタ/スレーブのケーブル セレクト**の位置に配置できます。この場合、BIOS は、IDE ケーブルに接続されているディスクの中で、マザーボードに近いほうのディスクを「マスタ」と見なします。

残念ながら、ハードディスクのマークは標準化されていません。ご使用のハードディスクのマークが上述のものとは異なる場合もあります。さらに、旧式のハードディスクの場合は、1 つではなく 2 つのジャンパによって用途が定義されることがあります。ハードディスクをコンピュータに設置する前に、マークについてよく確認してください。

ハードディスクをマザーボードに物理的に接続し、ハードディスクが機能するようジャンパを正しく設定しただけではまだ不十分です。マザーボードの BIOS で、ハードディスクを適切に構成する必要があります。

21.2.4 SATA ハード ドライブの取り付け

最近製造されたコンピュータのほとんどは、ハード ドライブのインターフェイスとして SATA を使用しています。一般的に、SATA ハード ドライブの方が IDE ドライブよりも取り付けは簡単です。SATA の場合は、マスタ スレーブ ジャンパを設定する必要がないからです。SATA ドライブに使用されるインターフェイス ケーブルは細く、コネクタは 7 ピンキー付きです。そのため、コンピュータ内部の空気が流れやすくなります。SATA ドライブへの電力供給には、15 ピン コネクタが使用されます。SATA ドライブの中には、従来の 4 ピン電源コネクタ (Molex) をサポートするものもあります。Molex と SATA のどちらのコネクタを使用してもかまいませんが、両方を同時に使用すると、ハード ドライブが壊れるおそれがあります。また、SATA 電源コネクタ付き電源リード線の空きがあることも必要です。SATA ポートを持つシステムのほとんどは、SATA 電源コネクタを少なくとも 1 個は備えています。SATA 電源コネクタがない場合は、Molex/SATA 変換アダプタが必要です。SATA 電源コネクタがあっても既に使用されている場合は、リード線を分岐させる Y アダプタを使用します。

21.2.5 新しい内部 SATA ドライブを設置するための手順

1. コンピュータに付属している資料を参照し、使用されていない SATA ポートを見つけます。新しい SATA ドライブを SATA コントローラ カードに接続する場合は、カードを取り付けます。SATA ドライブをマザーボードに接続する場合は、利用可能なマザーボード ジャンパ (該当する場合) を有効にします。大部分のハードディスク キットには SATA インターフェイス ケーブルと固定用ネジが付いています。SATA インターフェイス ケーブルの片側をマザーボードの SATA ポートかインターフェイス カードに接続し、もう一方をドライブに接続します。
2. 次に、電源リードを差し込むか、または Molex-to-SATA アダプタを使用します。
3. ドライブを準備します。SATA 300 ハードディスク ドライブを設置する場合、コンピュータ(または SATA ホスト アダプタ)の資料を参照し、SATA 300 ドライブがサポートされていることを確認します。SATA 300 ドライブがサポートされていない場合は、ドライブのジャンパ設定を変更する必要があることがあります(ドライブのマニュアルを参照してください)。SATA 150 ハードディスク ドライブの場合は設定を変更する必要はありません。
4. コンピュータの電源を入れ、新しいドライブについての起動メッセージを確認します。見つからない場合は、コンピュータの CMOS 設定プログラムを起動し、使用中のポートで SATA を有効化する(あるいは、単に SATA を有効化する)ための BIOS 構成メニューのオプションを探します。マザーボードに付属する資料で、該当する BIOS 固有の説明を確認します。

5. オペレーティング システムによって SATA ドライブが認識されなければ、使用している SATA コントローラに適したドライバが必要です。ドライバが認識された場合はステップ 8 に進みます。
通常は、マザーボードか SATA コントローラの製造元のウェブサイトから最新のドライバ バージョンを入手するのが最善の方法です。
SATA コントローラ ドライバのコピーをダウンロードしたら、そのドライバ ファイルをハードディスク ドライブの既知の場所に格納します。
6. 元のハードディスクから起動します。
オペレーティング システムによって SATA コントローラが検出され、適切なソフトウェアがインストールされるはずですが、ドライバ ファイルへのパスの入力が必要になることがあります。
7. SATA コントローラおよび接続している SATA ハードディスクが、オペレーティング システムに正しく検出されることを確認します。 それには、デバイス マネージャにアクセスします。
通常、SATA コントローラはデバイス マネージャの SCSI および RAID コントローラ セクションに表示され、ハードディスクはディスク ドライブ セクションに表示されません。
デバイス マネージャで SATA コントローラと SATA ハードディスクが黄色の感嘆符付きで表示される場合、およびその他の方法でエラー表示される場合は問題があります。
8. コンピュータにハードディスクを設置し、BIOS で構成すると、コンピュータがハードディスクの存在と主なパラメータを「認識」するようになります。 ただし、オペレーティング システムがハードディスクを処理するためにはまだ十分ではありません。 さらに、新しいディスク上にパーティションを作成し、Acronis True Image HD を使用してそのパーティションをフォーマットする必要があります。「新しいハードディスクの追加」を参照してください。 その後 SATA コントローラから起動するように BIOS を構成し、SATA ハードディスク ドライブから起動してみて成功することを確認します。

21.3 ハードディスクの消去方法

情報をハードディスクから削除するときに、安全ではない手段（たとえば Windows での単純な削除）を使用すると、その情報は簡単にリカバリできてしまいます。 特殊な機器を使用すれば、繰り返し上書きされた情報でもリカバリできます。 したがって、確実なデータ消去の重要性は、これまでになく強まっています。

磁気メディア（ハードディスク ドライブなど）の**情報の確実な消去**とは、専門家が既知のあらゆるツールとリカバリ方法を使用してもデータをリカバリできないようにすることです。

このことをもう少し具体的に説明しましょう。ハードディスクに格納されるデータは、1 と 0 の 2 進数のシーケンスとなっており、このことはディスクの部分ごとに磁化を変化させるという方法で表現されます。

一般的に言って、ハードディスクに書き込まれた 1 はハードディスク コントローラによって 1 として読み取られ、0 は 0 として読み取られます。ただし、0 に 1 を上書きすると、ある条件の下ではその結果は 0.95 となり、1 を 1 に上書きすると結果は 1.05 となります。このような違いは、コントローラにとっては無関係です。しかし、特殊な機器を使用すれば、「下に隠れている」0 と 1 のシーケンスを簡単に読み取ることができます。

このような方法で「削除された」データを読み取るのに必要なものは、専用のソフトウェアと、それほど高価ではないハードウェアだけであり、その方法としては、ハードディスクのセクタの磁化やトラックの縁に残留している磁化を分析する、あるいは最新の磁気顕微鏡を使用するなどが使用されます。

磁気メディアに書き込んだときの目に見えない効果を要約すると、「ディスクの各トラックに格納されているものは、それまでに書き込まれたすべてのレコードのイメージであるが、そのレコード(磁気層)の効果は、時間がたつにつれて次第に認識しにくくなる」となります。

21.3.1 情報の抹消方法の動作原理

ハードディスクから情報を物理的に完全に抹消するには、記録媒体のすべての磁気領域 1 つ 1 つに対して、特別に選ばれた論理的な 1 と 0 の並び(サンプル データ)を書き込み、磁気の状態をできるだけ多くの回数切り替えます。

一般的なハードディスクの論理データ エンコーディング方法を利用すれば、セクタに書き込まれる記号(または最小単位のデータ ビット)の並びのサンプルを選択して、継続的かつ効果的に機密データを抹消することができます。

国家規格で提唱された方法では、ランダムな記号をディスク セクタに対して(1 回または 3 回)記録します。これは単純で確実性に欠ける方法ですが、それほど重大ではない状況では効果的です。最も有効な情報抹消方法は、あらゆる種類のハードディスクに記録されたデータの、微細な特徴の詳細な分析に基づくものです。このような理由により、情報の抹消を保証するには、複数の工程で処理する複雑な方法が必要となります。

情報の抹消を保証する技術に関する具体的な理論は、Peter Gutmann 氏による論文で紹介されています。次の論文を参照してください。

『Secure Deletion of Data from Magnetic and Solid-State Memory』

21.3.2 アクロニス製品で使用できる情報消去方法

次の表では、アクロニス製品で使用できる情報抹消方法について簡単に説明しています。それぞれ、ハードディスク セクタの工程数と、各セクタにバイト単位で書き込まれる数値を表します。

情報抹消方法に関する説明

No.	アルゴリズム (書き込み方法)	工程数	記録
1.	米国国防省準拠 DoD 5220.22-M 方式	4	第 1 工程 - 各セクタの各バイトにランダムに選択した記号。第 2 工程 - 第 1 工程で書き込まれた値の補数。第 3 工程 - 再度、ランダムな記号。第 4 工程 - 書き込み結果の検証。
2.	米国海軍準拠 NAVSO P-5239-26-RLL 方式	4	第 1 工程 - 全セクタに 0x01。第 2 工程 - 0x27FFFFFF。第 3 工程 - ランダムな記号のシーケンス。第 4 工程 - 検証。
3.	米国海軍準拠 NAVSO P-5239-26-MFM 方式	4	第 1 工程 - 全セクタに 0x01。第 2 工程 - 0x7FFFFFFF。第 3 工程 - ランダムな記号のシーケンス。第 4 工程 - 検証。
4.	ドイツ VSITR 方式	7	第 1~第 6 工程 - 0x00 と 0xFF を交互に。第 7 工程 - 0xAA。つまり、順番に 0x00、0xFF、0x00、0xFF、0x00、0xFF、0xAA となる。
5.	ロシア GOST P50739-95 方式	1	セキュリティ レベルが 6~4 のシステムの場合、各セクタの各バイトに論理値ゼロ (数値 0x00)。 セキュリティ レベルが 3~1 のシステムの場合、各セクタの各バイトにランダムに

No.	アルゴリズム（書き込み方法）	工程数	記録
			選択された記号（数値）。
6.	グートマン（Peter Gutmann）方式	35	非常に高度な方式。この方式は、ハードディスクの情報抹消についての Peter Gutmann 氏の理論に基づいている（『Secure Deletion of Data from Magnetic and Solid-State Memory』を参照）。
7.	Bruce Schneier 方式	7	Bruce Schneier が著書『応用暗号論』で提唱している 7 回の工程で上書きする方法。1 工程目で 0xFF を、2 工程目で 0x00 を書き込み、その後、暗号的にセキュリティの高い擬似ランダム シーケンスで 5 工程の書き込みを行う。
8.	高速	1	全セクタに対して論理値ゼロ（数値 0x00）で抹消。

22 起動パラメータ

Linux カーネルを起動する前に適用できる追加パラメータ。

22.1 説明

Linux カーネルを起動する前に適用できる追加パラメータ

説明

次のパラメータを使用すると、Linux カーネルを特殊モードで読み込むことができます。

- **acpi=off**

ACPI を無効にします。ハードウェアの特定の構成に役立ちます。

- **noapic**

APIC (Advanced Programmable Interrupt Controller) を無効にします。ハードウェアの特定の構成に役立ちます。

- **nousb**

USB モジュールの読み込みを無効にします。

- **nousb2**

USB 2.0 のサポートを無効にします。このオプションを指定しても、USB 1.1 デバイスは動作します。このオプションを指定すると、USB 2.0 モードでは動作しない一部の USB ドライブを USB 1.1 モードで使用できます。

- **quiet**

このパラメータはデフォルトで有効になっており、起動メッセージは表示されません。このパラメータを削除すると、Linux カーネルが読み込まれるときに起動メッセージが表示されるようになり、Acronis プログラムが実行される前にコマンド シェルが提供されます。

- **nodma**

すべての IDE ディスク ドライブの DMA を無効にします。カーネルが一部のハードウェアでフリーズするのを防ぎます。

- **nofw**

FireWire (IEEE1394) のサポートを無効にします。

- **nopcmcia**

PCMCIA ハードウェアの検出を無効にします。

- **nomouse**

マウスのサポートを無効にします。

- **[モジュール名]=off**

モジュールを無効にします (例: **sata_sis=off**) 。

- **pci=bios**

PCI BIOS の使用を強制し、ハードウェア デバイスには直接アクセスしません。たとえば、コンピュータが標準以外の PCI ホスト ブリッジを備えているような場合にこのパラメータを使用することがあります。

- **pci=nobios**

PCI BIOS の使用を無効にします。ハードウェアへの直接アクセスのみを許可します。たとえば、BIOS が原因で起動時にクラッシュが発生すると考えられる場合にこのパラメータを使用することがあります。

- **pci=biosirq**

PCI BIOS の呼び出しを使用して、割り込みルーティング テーブルを取得します。これらの呼び出しは、一部のコンピュータではバグがあり、使用するとコンピュータがフリーズしますが、他のコンピュータでは、割り込みルーティング テーブルを取得する唯一の方法です。カーネルが IRQ を割り当てることができない場合、またはマザーボード上のセカンダリ PCI バスを検出できない場合は、このオプションを試してください。

- **vga=ask**

現在のビデオ カードで利用できるビデオ モードの一覧を取得し、ビデオ カードとモニタに最適なビデオ モードを選択できるようにします。自動的に選択されたビデオ モードがお使いのハードウェアに適合しない場合は、このオプションを試してください。